

ケイシー・ヴェイル — 10歳の少年が語った彼の
過去世の話に基づいて

千の人生

THOUSAND LIVES

千の輪廻。万の因縁。一つの行き先。

 THE LIVES
MEDIA®

千の人生

(THOUSAND LIVES)

千の輪廻。万の因縁。一つの行き先。

著者：ジャーナリスト、ケイシー・ヴェイルが、10 歳の少年の過去世についての語りに基づき執筆。

Copyright © 2025 THE LIVES MEDIA。すべての権利を
保有します。無断複製を禁じます。

編集者注

本書は実在の物語、出来事、背景に基づいて執筆されています。しかし、個人のプライバシーを尊重し、特定の方々への影響を避けるため、登場人物の名前や一部の個人を特定できる詳細は、文学的な形式の下で変更、簡略化、あるいは再構成されています。

本書の一部の段落は、当事者の個人的な視点から語られており、その時々 of 彼ら自身の経験と認識を反映したものです。これらの見解は、必ずしも THE LIVES MEDIA の立場と一致するものではありません。

文章表現については、編集部が必要な修正を加えましたが、原作の登場人物を尊重し、物語の精神と躍動感を保つため、私たちは登場人物の素朴な味わいと本来の語り口を最大限に維持するよう努めました。

編集部



はじめに

一人のジャーナリストの人生、特に、常に遠い土地を旅し、あらゆる種類の人々と接する者の人生は、多くの驚きに満ちています。しかし、これから私がリバーという愛称で呼ばせていただくことになる少年との運命的な出会いは、この世界が秘めているであろう奇跡に対する私のあらゆる想像をはるかに超えるものでした。

私がリバーに会ったのは、アジアでの長期出張を終え、アメリカ西部の静かな小さな町で短い休暇を過ごしていた時の、かなり偶然の状況でした。彼はまだ十歳で、英語を話すアメリカ人の少年でしたが、その輝く瞳と、同年代の子供には珍しい物憂げな表情が印象的でした。私が知り合う機会を得た彼の家族は、穏やかで心優しい人々で、彼らが東洋に起源を持つ古代の修煉法である法輪大法を実践し、深い精神生活を送っていることに、私はすぐに気づきました。

当初、私たちの会話は日常的なことばかりでした。しかしある日、私たちが一緒に遠くの山々に沈む夕日を眺めていると、リバーは突然語り始めました。それは学校や友達、子供の遊びについての話ではありませんでした。

それは、先史時代の輝かしい文明から、馴染みのある歴史上の王朝、さらには地球外の世界にまで及ぶ、驚くほど詳細で生き生きとした過去世の記憶の断片だったので

す。

リバーが言うには、特別な因縁と幼い頃からの修煉のおかげで、彼の天目（第三の目）が一部の智慧と共に開かれ、他の次元を見たり、多くの前世を思い出したりすることができるようになったとのことでした。私が気づいた奇妙なことは、これらの能力が顕著に現れて以来、リバーが前世の記憶に言及する際の話し方も変わったことでした。顔は子供の無邪気な純粹さを保ったままでしたが、その言葉はまるで人生経験豊かな者が自らの洞察を分かち合うかのように、成熟し、深遠なものになっていきました。彼はそれらの人生について語る時、ごく自然に「私」という一人称を使い、あたかもその瞬間を再び生きているかのようにでした。彼が語るとき、その声はまだ十歳の子供のものでしたが、物語の内容と深みは、並外れた博識と驚くべき洞察力に満ちていました。彼は誰にも教わっていない古代の言語の一部を話すことができ、どんな本にも記録されていないような風習や歴史的イベントを詳細に描写することができました。

ヨーロッパ人である私は、仏法や東洋の教えについて多少の知識はありましたが、当初は驚きを隠せず、少し懐疑的でさえありました。しかし、聞けば聞くほど、彼の目や態度にある真実味、何百万年にもわたる物語の驚くべき脈絡と一貫性を目の当たりにするほど、私はますます引き込まれていきました。そこに誇張はなく、感心させようという意図もありませんでした。彼はただ、瞑想中や静かな思索の瞬間に「思い出した」こと、「見た」ことを語っているだけでした。

特筆すべきは、リバーが常にそれぞれの人生における自身のキャラクターの視点に立って物事を認識し、評価していたことです。将軍であったときは、将軍として考えました。修行者であったときは、修行者の心境でした。そして外交顧問であったときは、そのキャラクターが修煉者でない背景においては、霊的な解釈や因果応報を混ぜることなく、純粹に政治家の視点から問題を分析しました。この明確な区別が、物語を一層信頼でき、深みのあるものにしています。

最初の驚きに満ちた会話の後、そしてリバーの両親からの心からの同意を得て――彼らは息子の特別さをよく理解しており、これらの物語が同じ心を持つ魂に届くこと

を願っていました——私は約二週間、集中して彼の記憶の流れに耳を傾け、慎重に記録しました。最初は、奇跡に関する貴重な資料として、自分だけのために記録するつもりでした。しかし、聞けば聞くほど、これらの物語が私だけのものではないことに気づきました。それらは歴史、因果応報、善と悪の選択、そして何よりも、一つの生命が輪廻転生を通じてその根源に帰るための果てしない旅についての深い教訓を含んでいました。

本書、『千の人生』は、その期間にリバーが語った物語を、可能な限り忠実に記録したものです。彼が語っている間、私はほとんど質問をせず、ただ耳を傾け、記録しました。そのため、読者の皆様は、物語の流れがほとんど主人公の独白であることにお気づきになるでしょう。私たちはその主人公と共に、先史時代の将軍、三国時代の道士、イエスに従った信者、聖なる山を司る山の神、古代火星の職人、そして 20 世紀半ばのアメリカの外交官まで、数え切れないほどの役柄を旅することになります。そして最後に、彼の真の出自が明らかになります——それは、大法を待つために下界に降りることを誓った、輝かしい天国の王主だったのです。

最初の章は、主人公が遠い前世で真の法に背いたために受けなければならなかった悲惨な応報について語られているため、一部の読者には重く感じられるかもしれません。しかし、どうか辛抱してください。なぜなら、それは真実の、そして厳格でありながらも慈悲深い因果応報の法則の、不可欠な一部だからです。第二章以降、リバーは彼の記憶を通して、歴史の「観察者」としてより多く登場し、出来事や人物を超常的な修煉者の視点から解き明かし、天意と事件の背後に隠された教訓に焦点を当てていきます。「副元神（ふくげんしん）」のような聞き慣れない言葉が出てきた際には、少年の説明や参考文献から得た私の理解に基づき、括弧内に簡単な説明を付け加えるよう努めました。

『千の人生』を通して、私たち一人ひとりが人生や歴史について新たな視点を得て、もしかしたらどこかで、自分自身の旅に対する少しの共感や思索を見出すことができると願っています。

ケイシー・ヴェイル (Casey Vale)

THE LIVES MEDIA

* * *

第一章： 先史時代の月

...

時々、私が座禅を組んでいる時、あるいはただ静かに窓の外を眺めている時、記憶が蘇ってくるのだ。昨日のことや、先週どこで遊んだかといった類いの記憶ではない。これらの記憶は奇妙で、どこかとても、とても遠い昔の場所からやってくる。この地球にその痕跡が残っているとは思えないほど、遥か遠くだ。（後になって両親から

説明され、私はこれらを天目で見ているのだと理解した。天目が開き始めたのは、私がまだ五歳くらいの時だったからだ。)

記憶は私を、今から一億年も前の時代、ある非常に栄光に満ちた文明周期の最後の数世紀へと連れて行く。だがその文明は、まさに滅亡の崖っぷちに立たされてもいた。

その時代から残された最も古い歴史書には、その文明がかつて輝かしい黄金時代を経験したと記されている。想像してみしてほしい。当時の地球は全く異なる姿をしていた。都市は灰色のレンガや石で建てられたのではなく、まるで光で織られたかのようにきらめき、優美な塔が高くそびえ立っていた。その全盛期の人々は自然と調和して生き、智慧も道徳も非常に高い境地にあった。

歴史書にはこう記録されている。ある重要な時期、その文明周期が約五千年の存在の末に終わろうとしていた時、一つの偉大な出来事が起こった。後世の人々が敬意を込めて創世主と呼ぶことになる至高の存在が、この世に降臨されたのだ。その御方は大法——宇宙の真理——を携え、衆生を救い済度するために広く伝えられた。その教えは数億の人々を目覚めさせた。彼らは修煉の道を歩み始め、心性を高め、智慧を開き、そのおかげでその文明

は滅びるところか、さらに一万年もの間、未だかつてないほどの栄光の中で存続したのである。

その一万年の間、大法に従って真に修煉した者たちは、驚異的な成果を達成した。私たちが今日見る月は、伝えられるところによると、彼らが創造または調整した偉大な奇跡の一つである。それは単なる岩塊ではなく、エネルギーの中心であり、神聖な場所であり、心を修め善に向かう人々の智慧と超常的な能力の象徴であった。そして、今なお痕跡を残す壮大で壮麗な神殿や建築物の数々は、人と神が近く、大法が道を照らす灯台であった時代の証なのである。

しかし、ご存知の通り、時間は絶え間なく流れる。私がある前世で生まれた時には、その栄光の一万年もまた、最後の年月を迎えようとしていた。その人生での私の名前は、もし今の皆さんの言語で音訳しようとすれば、アリオンという音に近くなるだろう。その時代の言語と文字は私たちが知るものとは全く異なるので、皆さんが想像しやすいように、ここでは仮にアリオンという名前を使って話を進めることにする。

私、アリオンが生まれた時、月は夜空に堂々と輝き、古の神殿もまだそこにあった。しかし、大多数の人々の意

識の中では、創世主や大法、そして月を創造した神通広大な修煉者たちの物語は、次第に「おとぎ話」になっていた。今の人が月の女神である嫦娥や月で餅をつく兎の話をするようなものだ。美しく、壮大ではあるが、どこか遠い存在で、それが真実だと信じる者はほとんどいなかった。

私、アリオンの時代、社会は深く分断されていた。一方には、信仰を守り、先祖が残した精神的価値を尊重しようと努める人々がいた。もう一方では、日に日に勢力を増していたのが、目に見え、耳に聞こえるものだけを信じ、物質的な力、自らが把握し制御できるものを信じる人々であった。彼らが唯物論派だった。

当時、ますます実用主義の空気が濃くなる中で育った私たち世代にとって、古の人々が語る「超自然科学」や「精神科学」の物語は、曖昧で信じがたいものに聞こえた。私たちは、測定可能で、実験によって証明でき、私たちが製造し操作できる技術こそが、真の科学であると教えられた。

もちろん、どこかでかすかに、古の「大法」とやらを「修煉」としていると自称する少数の人々がまだいるという話も耳にはしていた。噂によれば、彼らは「神通力」

や奇妙な「功能」を持ち、我々の科学では説明できないような「超自然的な技術」さえも生み出すことができるという。しかし正直なところ、私個人も、そして同世代のほとんどの者も、そういったものをはっきりと目の当たりにしたことはなかった。私たちにとって、それは多くが遠い過去から紡がれた噂話や神話であり、あるいはせいぜい何らかの巧妙な手口に過ぎないと思われた。私たちは目に見える力、軍隊、そして我々の派閥が日夜研究開発していた最新鋭の兵器を信じていた。

それゆえ、その文明周期の最後の約 500 年における道德の退廃は、ほとんど必然的な出来事だった。人々が神仏を信じなくなり、宇宙の目に見えない法則を畏れなくなると、道德的な束縛も次第に緩んでいく。貪欲、利己心、権力と物質的快樂への渴望はますます激しくなった。

真に心を修めていない者や、かつて修煉していたが意志が固くなかった者たちは、名声、利益、感情といった誘惑に容易に引きずられ、伝統的な価値観から遠ざかっていった。彼らは問い始めた。なぜ苦行をしなければならないのか、なぜ目に見えないものを信じなければならないのか、物質科学が目の前に快適で満ち足りた生活をもたらしてくれるというのに、と。

そして、その道徳的退廃を土台として、唯物論的思想は私の国だけでなく、他の多くの地域にもますます広がっていった。同じ志を持つ国々や勢力の指導者、思想家たちは徐々に連携し、強力な同盟を結成した――それは、物質の絶対的な力を信じる者たちの同盟であった。私の家族もまた、この台頭しつつある運動の一部だった。

その唯物論同盟は明確な目標を持っていた。彼らが「幻想的な精神世界」と見なすものの影響を、一国の範囲内だけでなく、より広い規模で社会生活から完全に排除することだ。彼らは、人間が自らの運命の主であり、全ての成果は人間の知恵と力によって生み出されると宣伝した。彼らは、修煉者や大法への信仰を持ち続ける人々を排斥し、彼らを社会の「進歩」を妨げる力、自分たちが確立したい新しい秩序への脅威と見なした。

その時代の雰囲気は、日増しに息苦しくなっていた。かつては指針とされていた大法の教えは、今や多くの場所で嘲笑され、歪曲された。唯物論同盟は、人間が自ら築く「地上の楽園」という約束を掲げ、多くの人々、特に加盟国の若者たちを引きつけた。同盟の基本方針は非常に断固としており、時には独裁的でさえあり、その指

導者たちは目的達成のためには武力を含むあらゆる手段を用いることを厭わなかった。

それはもはや、一つの社会内部での思想闘争ではなく、次第に大きな規模での対立、一つの文明の魂をめぐる争いへと発展していった。そして私、アリオンは、まさにその強力に台頭しつつあった唯物論同盟の主要国の一つで、中心的な役割を担う家庭に生まれ育ったのである。

前にも述べたように、私アリオンが生まれたのは、その一万年にわたる文明周期の最後の世紀であり、唯物論の炎が激しく燃え盛っていた時代だった。我が家は社会的に地位のある階級に属し、両親は唯物論同盟の主要な党派で大きな影響力を持つ中心メンバーであった。

ごく幼い頃から、私は物質と権力を崇拝する空気に包まれていた。私が最初に聞いた教えは、神仏や慈悲、信仰に関するおとぎ話ではなく、科学技術の力、人間の優越性、そして人間が自然を征服し自らの運命を切り開くことができるという講義であった。無神論的思想が毎日私の頭に詰め込まれた。精神的な事柄や古の「大法」に関連することは全て、迷信であり、進歩の妨げと見なされた。両親や周りの人々は、信仰を持ち続ける人々、つまり修煉者に対して、しばしば軽蔑、さらには憎悪の念を

表明した。彼らはそうした人々を「時代遅れ」、「空想家」と呼んだ。

このような環境で育った私が、教えられたことを固く信じるようになったのは驚くにはあたらない。私は精神的価値を軽蔑し、物質的な力と軍事力だけが追求するに値するものだと思っていた。修煉者が建てたと言われる古代の遺跡や神殿を見ても、畏敬の念ではなく、ある種の科学的好奇心から、どのような「技術」が使われたのかを解明しようとし、その精神的な側面には全く思いを馳せなかった。

おそらく、私は生まれつき軍事的な才能に少し恵まれていたのだろう。戦術ゲームが好きで、歴史上の大きな戦いの記録を読むのが好きだった（ただし、それらはしばしば唯物論的な視点で解釈されていたが）。体格にも恵まれ、早くから指揮能力を発揮した。両親はそうした傾向を見て非常に喜び、私に軍人の道を歩むよう勧めた。彼らにとって、軍隊は力の象徴であり、唯物論同盟の影響力を守り、拡大するための道具であった。

同盟軍での私の昇進は順調だった。私は若くして士官学校に入り、熱心に学び、絶え間なく訓練を積んだ。現代の戦術を素早く習得し、我々の派閥が製造した最新鋭の

兵器の使い方を学んだ。生まれ持った才能、決断力、そして家族からの後押しもあり、私はかなり早く階級を駆け上がった。大規模な演習や、小規模な国境紛争（唯物論同盟にまだ抵抗する勢力との）での勝利は、私の名声をさらに高めた。

そして、まだかなり若い年齢で、私は主力軍団の指揮官に任命された。それは約五万の兵力を擁する強力な部隊であった。それは同盟で最も戦闘経験豊富な軍団の一つであり、知っておくべきは、我々の同盟全体には同様にそれ以上の規模を持つ多くの軍団があり、大規模な作戦に備えていたことだ。

整然とした隊列、マスケット銃と光る銃剣を持った密集した歩兵部隊、剣や槍を手にした強力な騎兵隊、そして屈強な駿馬に引かれた重砲部隊を想像してほしい。我々の軍服は念入りに仕立てられ、鮮やかな色彩と威厳に満ちており、各軍団、各兵科には広大な戦場で区別するための独自の記章があった。当時の私にとって、それは名声の頂点であり、私の努力と信念の証であった。私はその地位を誇りに思い、規律正しく組織された私の軍団を誇りに思い、そして私が「崇高な」理想、すなわち

人間が支配する世界、精神的な「幻想」の余地のない世界を築くという理想に仕えていると固く信じていた。

その張り詰めた空気は、ついに爆発せざるを得なかった。唯物論同盟の最高司令部から最終命令が下された。総力戦が開始される、と。スローガンは非常に明確で、至る所で広められた。これは、世界を迷信の枷から「解放」し、いまだ精神世界の闇に沈む地を「啓蒙」し、そして人間と物質科学が絶対的に支配する新しい世界秩序を確立するための戦いである、と。同盟指導部の当初の計画は「電撃戦」であり、最大でも半年以内にはあらゆる抵抗を掃討し、完全な勝利を収める予定だった。

私と私の五万の軍団にとって、それは待ち望んだ時であり、そのために訓練を積んできた時であった。この戦いの正義について、微塵のためらいも疑いもなかった。我々は未来をもたらし、古くさい、時代遅れのものを打ち砕いていると信じていた。

私の軍団は、同盟の他の多くの強力な軍団と共に、進軍を開始した。重なり合う歩兵の隊列、威風堂々とした騎兵の集団、轟音を立てて進む砲兵の列は、天を衝くほどの勢いであった。我々は、精神主義派の要衝とされる地域、彼らが「光の都」と呼ぶ土地への攻撃を命じられた。

そこは修煉者の中心地であり、多くの経典や大法（ダイファ）の遺産が保管されている場所だとされていた。

しかし、戦いは当初の計画通りには進まなかった。大法を信仰する国々や共同体は、我々のように専門的に組織された軍隊ではなかったものの、非常に勇敢な闘志を示した。彼らに大規模な常備軍はなかったが、国民一人ひとりが兵士であるかのようで、自らの信仰と故郷を守るために進んで戦った。彼らは非常に賢く戦い、慣れ親しんだ地形を利用し、柔軟なゲリラ戦術を用いて我々に少なからぬ損害を与えた。

それに加え、精神主義派の少数の「功能」を持つ修煉者たちの陰ながらの助けも、我々の進軍を著しく遅らせる一因となった。我々が進軍を予定していた道が、不可解な形で崩落することがあった。生命線となる橋が、巧妙に破壊された。濃い霧や季節外れの突然の豪雨が発生し、移動や後方支援を妨げた。私の軍団も、説明のつかない奇妙な状況に何度も遭遇した。ある時は、真昼の太陽の下を行軍中、突如として前衛部隊の半数近くの兵士が倒れ、症状は深刻な熱中症のようであったが、気候はそれほど過酷ではなかった。またある時は、軍団の大部分で奇妙な疫病が突如として発生し、非常に早く広まり、我

々の軍医が困難の末に抑制策を見つけるまでの数週間で、兵力の約一割が死亡した。これらの行動は、目に見える敵からの直接的な殺傷力を持つものではなく、主に我々を阻止し、消耗させることを目的としていたが、実に多くの困難と、水面下での動揺を引き起こした。

まさにこの粘り強い抵抗と予期せぬ障害のために、我々が数ヶ月で終わると考えていた戦争は、長引くことになった。ほぼ三年もの歳月、無数の大小の戦闘、そして双方にとって決して小さくない損害を経て、我々の唯物論同盟は、ようやく全ての戦線で徐々に優位を確立していった。一步進むごとの代償は、血と疲労によって支払われた。

そして、ほぼ三年にわたる戦いの後、私アリオンの軍団は、多くの試練と消耗を乗り越え、ついに「光の都」の郊外に到達した。我々の任務は変わらない。都市を占領し、残存するすべての抵抗勢力を殲滅し、精神主義派の象徴を破壊することだ。「向かうところ敵なし」というスローガンは依然として叫ばれていたが、内心では誰もがこの勝利が容易ではないことを理解していた。

「光の都」への攻撃は、私の軍団が経験した中で最も熾烈な戦いであった。精神主義派は、ほぼ三年にわたる戦

争で弱体化していたものの、ここ、この最後の砦での彼らの抵抗は、凄まじいものがあった。彼らは、これが運命の戦いであることを知っているかのように、絶望的な決意で戦った。何日にもわたる血なまぐさい戦闘の末、今や当初の五分の三ほどの兵力に減っていた私の軍団は、ついに市外の敵兵の最後の抵抗拠点を鎮圧した。

市中心部への道は、今や開かれていた。我々の次の目標は、広大な宗教建築群、壮大な寺院であり、そこが最も神聖な場所であり、大法の精髓が保管されていると言われていた。諜報によれば、そこはまた、修煉者と、依然として頑固に信仰を守る民衆の最後の隠れ家でもあった。

寺院の巨大な門が砲兵の力で打ち破られた時、我々の目の前に一つの光景が広がった。広大な境内の中、巨大で荘厳かつ慈悲深い仏主の像の前で、修煉者の法衣をまとった数百人が座禅を組み、口々に祈りを唱えていた。彼らの周り、そして後ろには、何千もの一般民衆――老いも若きも、女も子供も――が皆、合掌し、敬虔と帰依の念を込めて像に向かっていった。武器はなく、抵抗もなかった。ただ、信仰の静寂と、ささやくような祈りの声があるだけだった。

三年間戦い続け、仲間が倒れるのを見て、「迷信深い敵」に対する憎しみを植え付けられた私の兵士たちにとって、その光景は少しも同情を誘うものではなかった。彼らはそれを「蒙昧」の最後の巢窟であり、世界を「浄化」するために滅ぼされるべき者たちと見なした。

上層部から命令が下された。一人も残すな、と。そして、私アリオンの軍団はなだれ込んだ。

それは、大虐殺だった。

私は高い壇上に立ち、見下ろした。私は、武器を手にした兵士たちが、非武装の群衆に突入していくのを見た。叫び声、泣き声、武器が肉や骨に当たる音、倒れる体。寺院の白い石畳の上に、血が広がり始めた。修煉者たちは、死に直面しても、多くが平静を保ち、最後の息まで経を唱え続けた。一般の民衆はパニックに陥り、絶望の中で逃げ惑った。

私は直接、修煉者を一人も殺めてはいない。私の役割は指揮を執り、「任務」が遂行されることを保証することだった。しかし、その残虐な光景が目飛び込み、悲痛な叫び声が耳に届いた時、私の胸に冷たい感覚がこみ上げてきた。一瞬、ほんの一瞬だけ、哀れみの情が、この

無意味な虐殺を止めさせたいという思いが、私の心に忍び込んだ。長年の唯物論的教義に覆い隠されていた人間の良心が、か細い声を上げようとしているかのようにだった。

だが、鉄の意志、叩き込まれた唯物論という「真理」への信念が、そのか弱い光をたちまち消し去った。「彼らは敵だ」と、冷たい声が頭の中で響いた。「彼らは進歩の妨げだ。彼らの破滅は、より良い新秩序のために必要だ」。私は一秒間目を閉じ、再び開けると、その顔は冷たく、無表情になっていた。私は虐殺が続くのを黙認し、兵士たちの荒い息遣いと、今や血に染まった寺院の静かな回廊を吹き抜ける風の音以外、何の音もしなくなるまで続けた。

その日、私アリオンの指揮下にあった軍団は、天に唾する大罪を犯した。我々は無実の命を奪っただけでなく、聖地を破壊し、神仏を冒瀆した。そして私個人は、直接剣を振るわなかったとはいえ、罪を容認し、見て見ぬふりをし、ほんの一瞬の良心の声を否定したことで、その時には想像もつかないほどの巨大な業力を背負い込んだ。

それこそが、私アリオンがその生涯で犯した、最大かつ最も重い罪であった。それは、その後の無数の輪廻転生

の中で、筆舌に尽くしがたい苦しみをもって償わなければならない負債であった。

「光の都」が占領され、残忍な方法で「浄化」された後、三年近く続いた戦争はついに終結した。唯物論同盟は、全土で絶対的な勝利を収めた。精神主義派の生き残りは、殺されなかった者も、隠れ住み、恐怖の中で生きるか、信仰を捨てることを強いられた。

私アリオンは、「光の都」を征服した軍団を指揮した「功績」により、英雄として称賛された。私は栄誉を受け、手厚く報奨され、今日の皆さんの軍隊における大將に相当するであろう、非常に高い階級に昇進した。私の名声は同盟中に響き渡った。これらの功績と、家族や多くの権力派閥からの支援により、私は同盟軍全体の最高指導者——「国防大臣」に相当する役職——の次期候補者として、最も有力視されるようになった。すべてが私の目の前に開かれているように見え、権力と栄光の頂点に立つ未来が待っていた。

私は、その地位を得ることをほぼ確信していた。あらゆる準備、あらゆるロビー活動は、すでに決着がついたかのように思われた。しかし、人生とは皮肉なものだ。公

式な任命決定が発表される直前、予期せぬ「事故」が起こった。

その日、私は別の都市での重要な会議からの帰り道だった。私の馬車はかなり速く進んでいた。突然、激しい雨が降り始め、雷が鳴り響いた。馬車が陰しく滑りやすい山道を通った時、なぜか馬たちが突然パニックに陥り、激しく暴れた。馬車は制御を失い、揺れ動き、そして底知れぬ深い谷底へと真っ直ぐに突っ込んでいった。

私アリオンとしての最後の感覚は、体が自由落下するときの極度の恐怖、そして天変地異のような衝撃、そして闇がすべてを包み込む感覚だった。

ずっと後になって、この現在の人生で、大法を修煉したおかげで天目が開かれ、初めてその「事故」の真相を振り返ることができた。それは偶然の事故ではなかった。それは、唯物論同盟内の別の政敵によって巧妙に仕組まれた暗殺計画であった。その男もまた、私が得ようとしていた「国防大臣」の椅子を狙っていたのだ。彼は御者を、そしておそらく私の旅程の安全を確保する責任者たちをも買収していた。

滑稽だと思わないか？ 唯物論という「理想」の名の下に数々の罪を犯した私が、結局は同じ志を持つ者たちの手にかかり、権力と物質的利益を巡る争いのために死ぬことになったのだ。その死は、痛ましく、無念ではあったが、おそらく私の果てしない業の返済の始まりに過ぎなかったのだろう。

谷底での私の突然の死は、アリオンの野心と罪に満ちた生涯に終止符を打った。しかし、その「事故」が起こる約一週間前、遠い戦線からの最後の知らせが届いていた。唯物論同盟は完全に勝利していた。精神主義派の残存する全ての国や領土は平定されていた。修煉者、つまり大法への信仰を固く守り続けた人々は、ほぼ絶滅させられるか、捕らえられて投獄され、自らの道を捨てることを強いられた。約三年にわたる戦争は、唯物論派の絶対的支配をもって終結した。我々は、数千年にわたって存在してきた一つの世界観、一つの信仰を抹殺することに「成功」したのだ。

その最後の数日間、戦闘が収まった直後、奇妙な出来事、今思い出しても身の毛がよだつ光景が起こった。ある夜、空は晴れ渡り、月は満月で煌々と輝いていた。突然、私と首都にいた他の多くの人々は、信じられない光景を目

の当たりにした。月、我々の祖先が修煉者によって創造されたと伝えたその巨大な球体が、ゆっくりと動き始め、その慣れ親しんだ軌道から外れていったのだ。最初はわずかな移動だったが、それは次第に速く、明確になっていった。それは落ちてくるわけでもなく、何かに衝突するわけでもなかった。ただ、去っていく、地球から遠ざかっていくのだ。我々はそこに立ち尽くし、呆然とし、恐怖にかられ、その銀色の球体が小さく、小さくなっていくのを見つめ、やがてかすかな光点となり、宇宙の深淵に完全に消えていった。

我々唯物論者の中で、その現象を説明できる者はいなかった。我々の科学者たちは、重力や軌道に関する仮説を立てようとしたが、月が去ってしまったという明白な事実の前では、すべてが無意味だった。ずっと後になって天目が開かれた時、私はそれが自然現象ではなかったことを知った。それは、偉大なる脱出であった。非常に高い道徳的境地にある大法の修煉者の一団が、文明の避けられない衰退と人心の墮落を予見し、神通力を用いて、残された真の修煉者の一部——およそ数万人——を、文化の精華や生命の種と共に月に乗せたのだ。

後に、天目によって、私は何が起こったのかをより鮮明に見た。その月は、外見上は固い岩の球のように見えたが、実は内部は空洞であった。それは非常に複雑に建造されており、まるで縮小された世界のように、多くの層と様々な区域があった。食糧となる作物や貴重な薬草を栽培するための肥沃な土地があり、連れてきた動物を飼育するための区域もあった。彼らはさらに、今日の SF 映画で見るような、人工的な力場を生成し、内部で安定した重力と大気を維持できる特別な技術、秘密のシステムさえ持っていた。その内部構造全体は、数万人が星々の間を長い旅をする間、生活し、生存するのに十分な、完全な生態系を維持するように設計されていた。

そして、それらの修煉者たちは、その広大な神通力を用いて月を操り、それを巨大な宇宙船、一つの文明の「方舟（はこぶね）」へと変え、太陽系を離れ、彼らの血統と希望を保存するために別の安全な場所へと向かったのだ。

私アリオンが馬車の「事故」で死んでから間もなく、おそらくほんの数日後、さらに恐ろしい大災害が襲った。私はすでに死んでいたもので、次に起こったことは、後に天目で観察し直したものである。月が、その上の避難民

と共に太陽系を遠く離れた時、もはやこの惑星の均衡を保つものは何もないかのようであった。その文明の全衆生が生み出した巨大な業力、特に唯物論派が大法に敵対し、修煉者を弾圧した天をも驚かす大罪は、ついに清算の時を迎えた。

私は、この宇宙の守護神である神々、我々唯物論派がかつてその存在を嘲笑し否定した者たちが、行動を起こすのを見た…救うためではなかった。もはや何も救うことはできなかったからだ。彼らはその偉大な神通力を用い、恐ろしい地殻変動、巨大な洪水、凄まじい火山の噴火を引き起こした。そして最後に、完全な浄化のために、彼らはまさにその前の文明周期の地球そのものを爆破させた。全ての文明は、その全ての物質科学的成果、罪、そして野望と共に、跡形もなく完全に消し去られた。

不思議なことに、その月、その思いがけない救いの箱舟は、何年も、おそらく我々の計算では何十年も、想像を絶する速度で多くの遠い宇宙空間を漂流し、旅をした後、ついに、新しい地球が神々によって古い宇宙の残骸から再創造され、新しい文明の周期が始まろうとしていた時、再び導かれて戻り、この惑星の衛星となり、その静かな使命を続けたのである。

...

そして私アリオンの魂は、その悲惨な死の後、漆黒の重い業力を背負っていた。私は罪を償う旅を始めた。それは、最も暗く、最も苦しい境地での、無数の輪廻転生を通じた旅であった。

その時、私の豚としての、犬としての人生が始まった。

...

アリオンの死後、私の魂は犯した罪による巨大な業力を背負い、果てしない闇に沈んだ。どれほどの時間、その状態で漂っていたか分からない。ただ、冷たさ、孤独、そして漠然とした恐怖を感じていた。やがて、強い引力に引かれ、意識が徐々に戻ると、私は全く異なる姿になっていた。

それは、豚としての生であった。一度だけではない、七回連続であった。

それらの生についての記憶は、今思い出しても身震いがする。想像してみしてほしい。数万の軍を指揮する大將軍、最高権力を掌握しようとしていた者が、今やただの四つ足の獣となり、汚く、悪臭を放つ豚小屋で生きている。

アリオンの思考も野望も全て消え去り、ただ最も基本的な本能だけが残った。空腹、渇き、そして常に付きまとう漠然とした恐怖だ。

狭く、湿った豚小屋に閉じ込められた感覚を覚えている。地面は常に糞尿でぬるぬるしていた。我々の餌は、人間が捨てた残飯や屑で、汚れた木製の飼料桶に投げ込まれた。我々は一口の餌を巡って争い、互いに体を押し付け、哀れにキーキーと鳴いた。尊厳も、選択の余地もなかった。ただ、避けられない結末を待ちながら、その日その日を生き延びるだけであった。

最大の苦痛は、不潔さや飢えだけではなかった。それは無力感であり、蒙昧であった。時折、短い瞬間に、アリオンとしての生の微かな記憶の光が頭をよぎった――壮麗な軍服の姿、威厳のある戦場、歓声。しかし、それはすぐに消え去り、名状しがたい当惑と苦悩を残した。私は誰なのか？ なぜここにいるのか？ 答えはなかった。ただ、重く、鈍重な肉体と、獣の無知があるだけであった。

そして、その運命の日がやって来た。豚小屋から乱暴に引きずり出された感覚を覚えている。仲間たちのキーキーという叫び声、極度の恐怖。そして、冷たい刃と、天

を裂くような痛み。一つの生が終わる。そしてまた、別の生が始まる。同じく豚の姿で、同じく汚い小屋で、そして同じくそのような痛ましい死で終わる。七回、繰り返された。

しかし、特別な豚としての生が一度だけあった。それは死ぬ直前の束の間の意識であったが、決して忘れることのできない生であった。

その生でも、他の豚の生と同様、私はみすぼらしい小屋で飼われていた。ある日、主人が私を引きずり出し、四本の足を固く縛り、屠殺の準備をした。その時、死が目前に迫り、屠殺人の冷たい鋭いナイフが振り下ろされようとした瞬間、奇妙なことが起こった。束の間、どういうわけか、将軍アリオンとしての生の記憶が、突然、鮮明に頭の中に蘇ったのだ。私は全てを思い出した。征服、残酷な命令、そしてかつて寺院で私が殺害を命じた修煉者たちの顔までも。

そして、私は目の前に立つ屠殺人を見上げた。極度の恐怖が私を襲った。私は彼を認識した！ その顔、その眼差しは、歳月と人生の苦難に染まっていたが、見間違うはずもなかった。それは、まさに「光の都」での大虐殺で私の兵士たちが殺した修煉者の一人であった！

豚の体では、私は話すことも、震える以外に何もすることもできなかった。遅すぎた後悔、名状しがたい恐怖がこみ上げてきた。私はもがき、何か懇願しようとした。超人的な努力で体を起こし、前足でひざまずこうとし、前足を合わせるようにして懇願し、哀れなキーキーという声を発し、屠殺人が理解し、私を許してくれることを願った。

しかし、彼、その屠殺人は、おそらく死を前に怯える一匹の豚しか見ていなかったのだろう。彼は、その汚れた体の中に、かつての前世で彼の死を引き起こした者の魂が宿っていることなど、知る由もなかった。彼の眼差しは冷たいままだった。刃は振り下ろされた。

私は極度の絶望と、最高の恐怖と後悔の中で死んだ。その屠殺人を見分けた瞬間、そして運命を変えるために何もできなかった無力感は、私の魂に決して消えることのない傷跡を深く刻み込んだ。それは因果応報の法則、宇宙の絶対的な公正さについての、過酷な教訓であった。風を蒔く者は、嵐を刈り取る。全ての罪は、遅かれ早かれ、何らかの形で償われなければならない。

七度の豚としての生、その一つ一つが苦難であり、苦痛と屈辱の中での罪の浄化であった…

...

七度の苦痛と屈辱に満ちた豚としての生の後、私は墮落の底に達したかのように思えた。しかし、アリオンの業の返済の旅はまだ終わっていなかった。その後、私は十五の生を犬として生きなければならなかった。

十五回、私は再び別の姿で生まれた。やはり四本足の獣であったが、おそらく少し機敏で、人間との関係もより複雑であった。犬としての生は、さまざまな苦しみ、さまざまな教訓をもたらしたが、結局のところ、それはやはり無力感、依存、そして獣の多様な感情の経験であった。

ある生では、私は飼い主のいない犬で、混雑した都市の汚い通りをさまよっていたことを覚えている。毎日が、残飯を探し、悪意ある人々の打ち擲を避け、凍えることなく夜を過ごせる隅を見つけるための戦いであった。私は、倒れそうになるほどの飢え、追い払われる恐怖、そして極度の孤独を味わった。

また別の生では、私は辺鄙な田舎の貧しい家族に引き取られた。彼らも裕福ではなかったが、持っているものを私と分かち合った。しかし、生活は決して楽ではなかつ

た。飼い主は、おそらくあまりにも過酷な生活のせいで、しばしば私に怒りをぶつけた。私は、何の理由もない打ち擲や、私が意図せず犯した些細な過ちのために飢えさせられた日々を覚えている。私は、凍えるような冬の夜、私が玄関の外で寝ることを強いられ、肌を刺すような寒さに震えながら、ドアの隙間から家の中を見て、彼らの暖かい光と笑い声を聞き、言葉にできないほどの自己憐憫を感じたことを覚えている。酷い扱いを受けても、犬の本能は私を忠実にさせ、彼らに寄り添わせ、彼らを喜ばせようとさせ続けた。

しかし、犬としての生が全て苦しみであったわけではない。ある生では、私は愛情を味わうこともあったが、それは時として、それ以上の痛みで終わることもあった。

私が最も覚えているのは、ある生で、私が非常に賢い犬であり、田舎の家族に心から愛されていたことだ。彼らは私を家族の一員として扱った。私は子供たちと遊び、家を守り、彼らからの温かさや信頼を感じた。それは、私の長い畜生としての生の中での、稀な幸せな日々であった。

ある日、その家族は都市に引っ越すことを決めた。おそらく、都市での生活では、私のような大きな犬を連れて

行くことは許されなかったのだろうし、あるいは、私が適応できないと思ったのかもしれない。本当の理由は分からない。ただ覚えているのは、ある朝、彼らが荷物をまとめ、馬車に乗ったことだ。彼らは私を最後に撫で、その眼差しにはどこか悲しげなものがあり、そして馬車は遠ざかっていった。

最初は、何が起きているのか分からなかった。私はただ、彼らがいつものように、少しの間どこかへ行って、すぐに戻ってくるのだと思っていた。私は門で辛抱強く待った、来る日も来る日も。私は丸一週間待った。彼らが残してくれた食べ物も尽きてしまった。彼らへの恋しさが胸を締め付けた。その時でも、私は自分が捨てられたとは思っていなかった。私は *наивно* に、きっと彼らが道中で何らかの事故に遭い、それで戻って来られないのだと思っていた。

その思いと、無限の忠誠心をもって、私は彼らを探しに出ることを決意した。私は慣れ親しんだ家を離れ、果てしない旅に出た。私は直感に従い、空気中に残る微かな馴染みのある匂いに従って歩いた。私は、極度の飢えと渴きを経験し、見知らぬ人々に追い払われ、他の犬に襲

われた。しかし、私の主人を見つけなければならないという思いが、私に力を与え続けた。

搜索は、どれくらい続いたか分らない。私は、いくつの野原を、いくつの村を通り過ぎたことだろう。私の体は日に日に痩せ衰え、疲れ果てていった。ついに、深い森をさまよっている時、私はもう一歩も動けなくなってしまった。私は、古い木の根元に倒れ込んだ。

そして、一頭の猛獣、虎のようであったが、現れた。それは、捕食者の冷たい眼差しで私を見た。私にはもう抵抗する力も、逃げる意志も残っていなかった。それが私に襲いかかる直前、私の心に痛みがこみ上げてきた。それは、これから受けるであろう肉体的な痛みだけでなく、主人を見つけられなかった痛みであり、そして、微かな、しかし痛烈な疑念であった。もしかしたら、もしかしたら、私は本当に捨てられたのかもしれない、と。

私は、その森で死んだ。裏切られた忠誠心で打ち碎かれた心と、かつて抱いた愛情についての答えのない問いを抱いて。

十五の犬としての生、それぞれが、苦しみ、無力感、愛情、忠誠心、そして裏切りについての異なる経験であっ

た。それらの記憶は、獣のものでありながら、私の意識に深く刻み込まれており、アリオンが蒔いた罪と、遅ればせながらも、畜生の身にさえ芽生え始めた後悔の種についての、決して色褪せることのない戒めとなっている。

* * *

第二章： 青い海の王子

...

豚として、犬としての長い日々、人間の世界で言えばおよそ百年に及ぶ年月を経て、私の魂はついに畜生道から抜け出すことができた。私は再び人として転生した。しかし、アリオンとしての人生で負った業力はあまりにも重く、最初の数回の人生は、貧しく苦しい境遇で生き、あらゆる欠乏と屈辱を経験しなければならなかった。生まれ変わりは続き、おそらく百回以上も、貧困や病、あるいは夭折の運命に生まれたであろう。次第に、時が経ち、絶え間ない業の返済を繰り返すうちに、私の業力も少しずつ軽くなっていった。そして、もう少し条件の良い家庭に生まれ、教育を受け、ささやかな財産と社会的地位を得ることができるようになった。

過ぎ去った無数の人生の中には、儚い夢のようにぼんやりとしたものもあれば、非常に特別な経験と共に記憶に深く刻まれたものもある。そして以下に、そのような人生の一つについて、皆さんにお話ししたいと思う。これは、今から非常に、非常に昔、およそ二百万年前に起こった出来事である。その時、私は陸に住む人間ではなく、大海の生命体であった。私は、大洋の底深くで暮らす人魚の王国の王子だったのである。これもまた、非常に記憶に残る人生であったと思う。今日ではおそらく伝説の

中にしか存在しないであろう、不思議な法則と生き物たちがいた、魔法のような世界であった。

コラリア王国 – 海底の人魚の世界

我々の王国は当時、コラリアという名であった。あるいは、人魚の言葉ではそれに近い響きの名前だった。それは広大な深海の谷、あるいは広大なサンゴの平原に隠れるように位置し、雄大な海中の山脈に囲まれ、守られていた。そこには地上のような眩しい太陽の光はなかった。王国全体が、無数のサンゴや海藻、そして生物発光の能力を持つ奇妙な海洋生物から放たれる、きらめく幻想的な光に照らされていた。その光は時に満月のように優しく、時に色とりどりに輝き、心を奪われるほど美しい光景を創り出していた。王国の水面に近い、より浅い領域では、時折、青く深い水を通して差し込む、弱く暖かい太陽の光を感じることもできた。

我々は、陸上の人間のように石や金属で都市や家を建てることはなかった。我々人魚の住処は、自然が何千年もの歳月をかけて彫刻した巨大なサンゴの塊であったり、時には我々自身が何世代にもわたって意のままに「養殖」

し、形を整え、独特の形状を創り出したものであった。また、海中の崖の奥深くにある自然の洞窟に住むこともあり、そこはきらめく貝殻や貴重な真珠、色とりどりの海の石で飾られていた。私が生まれ育った父王の宮殿は、コラリアの中心に位置する最も雄大で輝かしいサンゴの塊であり、遠くからでも見える、アクアマリンのような優しい青い光を放っていた。

当時の海底の人魚の世界は、単一の種族だけではなかった。我々のコラリア王国は多くの共同体の一つに過ぎず、王国内にも多くの異なる人魚の血統が存在し、混じり合っ
て暮らしたり、独自の領土を持っていたりしたが、全ては私の父王に服従していた。特筆すべきは、それぞれの大きな人魚の種族が独自の方言、つまりコミュニケーションにおける特徴的な音を持っていたことである。そして、我々の水中でのコミュニケーションは、陸上の人間が話す方法とは大きく異なっていた。我々は、皆さんのように明確な単語として言葉を発することはなかった。人魚の言語は、旋律的な音、口笛、高低のトリルの連続であり、おそらく今日の科学者が研究しているイルカやシロナガスクジラのコミュニケーション方法にいくらか似ているかもしれない。それらの音は水中で非常に遠くまで伝わり、メッセージや感情を運ぶことができた。そ

れに加えて、ボディランゲージや表情も我々のコミュニケーションにおいて非常に重要な部分であった。穏やかな尾の振り、眼差しのわずかな変化、あるいは頭の傾け方、そのすべてが非常に明確な意味を伝えることができた。当時の我々人魚は非常に素朴で、自然と一体化して生きていたため、後の陸上の人間ほど言葉によるコミュニケーションを必要としなかった。我々の間の理解の大部分は、直接的な感覚、魂の共鳴、そしてそれらの繊細な表現から来ていた。

私の種族、コラリアンの王家は、最も高貴な血統と見なされていた。我々は、海底で最も美しい宝石のように輝く、アクアマリン色の鱗を持っていた。我々が泳ぐと、その鱗はきらめく光を反射し、幻想的な光の筋を生み出した。我々の髪は長く、海の絹のように柔らかく、通常は濃い藍色か苔色をしていた。コラリアン族の際立った特徴の一つは、体から穏やかな生体エネルギーの流れを放出する能力であった。このエネルギーの流れは、大きな敵を攻撃するには十分な強さではなかったが、より小さな生き物から身を守ったり、さらに重要なこととして、自分自身や他者の小さな傷を癒したりするのに役立った。

コラリアン族の他に、独自の特徴と役割を持つ他の人魚の種族もいた。例えば、黒鱗の人魚がいた。その名の通り、彼らの鱗は漆黒で光沢があった。彼らは通常、光が届きにくいより深い水域に住んでいた。黒鱗の人魚の目は、暗闇での視力が非常に優れており、海中の岩の裂け目や密集した海藻の中に身を隠すのが非常にうまかった。そのため、彼らはしばしば遠い海域の状況を偵察したり、王国の国境地帯を警備したりといった重要な任務を担っていた。彼らは口数が少なく、物静かであったが、非常に勇敢で忠実であった。

そして、サンゴの人魚もいた。彼らは、おそらく最も色彩豊かな人魚の種族であっただろう。彼らの鱗は、彼らが普段暮らし、隠れ住むサンゴ礁と全く同じ、色とりどりの鮮やかな色をしていた。サンゴの人魚は我々よりも小柄であったが、非常に機敏で器用であった。彼らは擬態の達人であり、誰にも見つけられないほど完璧にサンゴ礁に溶け込むことができた。また、食料や薬として使われる海草や貴重な藻類を収穫するのも非常にうまかった。

さらに、戦士と呼ばれる人魚の一族もいた。彼らは我々コラリアン族の特別な分家であったか、あるいはコラリ

アン族と黒鱗の人魚の混血であったか、もはやはっきりとは覚えていない。しかし、彼らの特徴は他の種族よりもはるかに頑健な体であり、彼らの鱗もまた硬く、まるで自然の鎧のようであった。彼らはほとんどの時間を戦闘技術の訓練に費やし、サメの歯や鋭い貝殻、あるいは大きな魚の骨から作られた長い槍などの武器を使用した。彼らは、王国を外部の脅威から守る主力であった。

規模について言えば、我々のコラリア王国は当時、およそ百万人の人魚の人口を抱えていた。コラリアの領土の周りには、より小さな他の人魚の小国もいくつか存在した。我々は平和的に交流し、産物を交換することもあったが、領土や資源をめぐる小さな紛争が起こることもあった。

当時の我々人魚の社会は、後に私が知ることになる陸上人類の歴史と比較すれば、おそらく初期の封建社会に近かっただろうが、非常に異なる点もあった。トップには父王と王妃が立ち、共に王国を統治し、大洋の英知と祝福の化身と見なされていた。注目すべきは、我々人魚の社会には、例えば古代中国のように、多くの陸上封建社会に見られるような深刻な性差別がなかったことである。男女は生活の多くの側面でかなり平等であり、王位継承

も完全に性別に基づいていたわけではなかった。十分な才能、徳、そして強力な法力を持つ者であれば、男女を問わず、後継者として検討される可能性があった。実際、私の姉は、その卓越した法力と智慧により、父王と王家の長老たちから将来の王位継承者として目されていた。次に、私のような他の王子や王女がおり、それぞれが独自の役割と責任を担っていた。その下には、王国に功績のあった大きな氏族がおり、父王から土地や特定の特権を与えられていた。そして最後に、大多数の一般民衆、黒鱗の人魚、サンゴの人魚、そして貴族の血を引かないコラリアン族がいた。

我々には、陸上のような複雑な官僚制度や、大きな学校、図書館はなかった。我々の民族の知識、法律、歴史物語は、主に歌や海の響きを持つ旋律を通じて、世代から世代へと口伝えで受け継がれていた。最も重要なことのいくつかは、人魚の古代の、波のようにうねる文字を用いて、大きなサンゴの石板に単純な形で記録されることもあった。

我々には、皆さんが理解するような哲学者や明確な宗教はなかった。我々人魚は母なる大洋を崇拝し、それが全ての生命の根源であり、全てを保護し育む存在であると

信じていた。我々は自然のバランス、そして善行をすれば大洋から祝福を受け、悪行をすれば罰せられるという単純な因果応報の法則を信じていた。我々人魚の信仰では、王家の成員、特にコラリアンの血統は、神々自身、母なる大洋によって王国を導き、守るために選ばれた者と見なされていた。我々には「法力」と呼ばれる、純粋な生体エネルギーの形で現れる特別な恩恵が与えられていると信じられていた。この恩恵のおかげで、我々は特別な能力を持つだけでなく、知恵、健康、寿命も一般の人々よりはるかに優れていた。当時の人魚の平均寿命はかなり高く、およそ二百年であった。父のような王家の成員や、強力な法力を持つ者は、さらに長く生きることができ、中には三百年を超える者もいた。

王家の重要な役割の一つであり、また母なる大洋からの寵愛の表れでもあったのが、海の神々と繋がり、コミュニケーションをとる能力であった。それは常に明確ではなかったが、時折、特に父王、王家の長老たち、あるいは民間の特別な因縁を持つ少数の人魚が、神々からメッセージや導きを受け取ることがあった。これは、予言的な夢の中で、あるいは母なる大洋に捧げる神聖な儀式を行う深い静寂の瞬間に起こることがあった。それらのメ

ッセージは、通常、王国の重大な問題、天災の予兆、あるいは調和を維持するための助言に関連していた。

しかし、特筆すべきことが一つあった。我々は長寿であったにもかかわらず、我々人魚の繁殖能力は、自然な形で、多くの陸上生物ほど高くはなかった。長い生涯の中で、人魚の女性は通常、最大で二度しか妊娠・出産しなかった。それは我々の種族にとって自然の法則のようであり、王国の人口バランスを調和的に保ち、母なる大洋の資源の過剰な搾取を避けるのに役立っていた。

王家の成員の法力は、神々からの贈り物であり、単なる特権ではなく、臣民を守り、王国の繁栄と平和を維持するという大きな責任でもあった。この法力は、人によって全く同じように現れるわけではなく、まるで独自の印のようであった。例えば、私の父王は、高い集中力を必要とする時や危険に直面した時に、自身の周りに弱いが効果的な保護力場を生成する能力を持っていた。王位を継ぐと見なされていた私の姉は、非常に特別な目を持っていた。彼女が望むと、その目は暗闇で明るい光を放ち、幻影を見破ったり、隠された小さな物体を見つけたりするのに役立った。また、私の叔父の一人は、その法力によって、後に我々が知ることになるデンキウナギのよう

に、体から電流を蓄積して放出することができた。その電流は、小さな海洋生物を麻痺させたり、より大きな敵を一時的に気絶させたりするのに十分な強さであった。

そして私、その人生での名はライラという。私はそのように音訳している。私はコラリア王国を治める父王の次男、王子であった。

王子ライラ – 才能と徳

幼い頃から、私は王家の血を引く者としての資質を示していた。母なる大洋が私に与えてくれた法力は、並外れた身体能力としてはっきりと現れていた。私は同年代のどの若い人魚よりも速く泳ぐことができ、その持久力もまた注目に値するものだった。遊びや訓練中の小さな傷や打撲は、私の体では非常に早く治った。私の髪は月明かりのない夜の海のように濃い藍色で、私の目は、人々がよく言ったものだが、海底で見つかる最も貴重な真珠のように輝いていた。

父王と王妃は、我々に法力の使い方を「教える」ことはできなかった――なぜなら、それは神々が各人に与える

固有の恩恵であり、その現れ方もまた非常に個人的なものであったからだ――しかし、彼らは我々に、善良な心性を保ち、清らかな徳を維持することの重要性を絶えず教え、諭した。彼らは、法力は、それを持つ者が他者を思いやる慈悲深い心を持っている時にのみ、真に意味を持ち、良い効果を発揮すると強調した。まさにその教えが、私が自分の力を見つめ、用いる方法を方向づけた。さらに重要なことに、彼らは私の心に、慈愛、公正さ、そして臣民と王国に対する深い責任感の種を蒔いた。私は、真の強さは人並み外れた戦闘能力にあるのではなく、弱者を愛し、守る心にあると教えられた。我々が得た法力は、誇示したり見せびらかしたりするためではなく、コラリアの保護下にあるすべての生命に平和と幸福をもたらすために仕えるためのものであった。

我々人魚の結婚生活もまた、非常に特徴的であった。王家であろうと一般民であろうと、我々は皆、一夫一婦の貞節を重んじた。興味深いことに、王家の成員は、たとえば相手が一般民の出身であっても、愛する者と自由に知り合い、結婚することができた。真実の愛が何よりも尊重されたのである。そして、母なる大洋からの祝福と見なされる、一つの奇跡があった。もし一般民が王家の成員と結婚し、数年間共に暮らした後も、その者が善良な

心性と徳を保ち続けていれば、次第にその者もまた、神々から法力の一部を授けられることがあったのだ。たとえば、その力が王族の伴侶ほど強力でなくても。このことは、社会の各階層間の調和と愛情をさらに促進した。

私自身、王子ライラもまた、その頃、心に深い恋心を抱いていた。彼女は、王国の南のサンゴ礁沿いにある小さな村に住む、サンゴの人魚の娘であった。彼女は法力を持たず、貴族の血筋でもなかったが、その純粋な美しさ、優しさ、そして慈悲深い魂が、私の心を完全に捉えていた。我々はしばしば秘密裏に会い、共に神秘的な洞窟を探検したり、あるいはただ静かに色とりどりの魚の群れの中で泳いだりした。我々の愛は非常に清らかで、強烈であった。私は近いうちに父王と王妃に話し、彼女と正式に結婚する許可を請うつもりであったが、これから起こる大きな出来事のために、全ての計画は一時的に棚上げせざるを得なくなった。

少し成長すると、私はもはや王宮の中だけにとどまらなかった。私はしばしば、サンゴの人魚が住む色鮮やかなサンゴ礁から、黒鱗の人魚が住む暗い海中の峡谷まで、王国の領土の至る所を泳ぎ回って多くの時間を過ごした。私は（我々人魚のやり方で）一般の人々と話し、彼らの

心の内、願い、そして困難に耳を傾けるのが好きであった。もし自分の能力の範囲内で何か手助けできることがあれば、たとえそれがどんなに些細なことであっても、決して断ることはなかった。おそらくそのために、私は姉のように王位を継ぐ者ではなかったただの次男王子でありながらも、多くの臣民から愛され、尊敬されていたのだろう。彼らは私に、潜在的な戦士の力だけでなく、常に彼らの側に立つ者の親しみやすさと徳をも見ていた。

国境からの脅威

コラリアでの平穏な生活は、私が法力を熱心に鍛え、サンゴの人魚の娘との恋を密かに育む日々とともに、過ぎていった。ある日まで、王国の北の国境地帯から恐ろしい知らせが届き始め、恐怖と混乱をもたらした。報告によれば、数十匹にも及ぶ、かつてないほど大きな海蛇の王の群れが、その海域に出現したという。群れの先頭に立つのは一匹の蛇の王で、その大きさは他の個体をはるかに凌駕し、その鱗は通常の岩灰色ではなく、冷たい視線を放つ恐ろしい血のような深紅色をしていた。

この海蛇の王の群れは非常に凶暴で、組織化されていた。彼らはもはや以前のように単独で獲物を狩るのではなく、協力して国境地帯のサンゴの人魚や黒鱗の人魚の小さな漁村を攻撃した。彼らは家々――民衆が住むサンゴの塊――を破壊し、逃げ遅れた多くの人魚を殺害し、広大な地域に恐怖をまき散らした。泣き声や絶望的な助けを求める声が王宮まで響き渡り、日常の静寂を打ち破った。

私の父王は非常に心配された。彼は直ちに王家の長老たちと戦士部隊の指揮官たちを召集し、対策を協議した。コラリアの人魚軍は、主に戦士の一族に属する戦士たちで構成され、勇敢で戦闘経験が豊富であったが、彼らは主に領土防衛や他の人魚の小国、あるいは単独の海蛇の王との小規模な戦闘に慣れていた。狡猾な蛇の王が率いる大きな海蛇の王の群れ全体と対峙することは、王国の歴史上、前代未聞の挑戦であった。多くの変事を経験してきた長老たちも、非常に懸念を示した。コラリア王国全体が、緊迫と恐怖の空気に包まれた。日常の遊びや歌などの活動は、すべて止まってしまったようであった。

王子の出陣

幸運にも逃げ延びた人々の話から臣民の苦しみを知り、父王の顔に深く刻まれた心労を見て、私の心は火のように燃えた。同胞が危険と死に直面している間、私は豪華な宮殿で安閑としてはいられなかった。母なる大洋が私に授けてくれた法力、私が長年鍛え上げた力は、享樂のためではなく、弱者を守るためのものであった。

緊急の朝議で、将軍たちが危機的な状況と対処の困難さを報告した後、私はためらうことなく進み出て、父王の前にひざまずいた。

「父王よ」と私は決然とした声で言った。「先鋒の印を賜り、王国の精鋭部隊を率いて北の国境へ赴き、海蛇の王の群れを滅ぼし、臣民に平和をもたらすことをお許しください！」

朝廷は水を打ったように静まりかえった。父王は私を見つめた。その眼差しには驚きと心配、そして少しの誇りが浮かんでいた。彼は私の性格を知っており、私の勇気と真心を知っていた。しかし、彼はこの任務の危険性も知っていた。

「ライラ、我が子よ」と父王は穏やかに言った。「そなたの勇気は誠に称賛に値する。しかし、今回の海蛇の王

の群れは常とは異なり、極めて凶暴で、蛇の王が率いている。これは通常の狩りではないのだ。」

「存じております、父王」と私は答えた。「しかし、だからこそ、私は見て見ぬふりはできません。もし我々が彼らを滅ぼさなければ、彼らは破壊を続け、恐怖は王国中に広がるでしょう。私は母なる大洋から力を授かりました。その力をもってコラリアを守ることを誓います。どうか父王、私を信じてください！」

王位を継ぐはずの私の姉も、私を支持する声を上げた。訓練中に私の能力を目の当たりにした多くの将軍たちも、信頼を表明した。ついに、しばらく熟考した後、私の目にある固い決意と朝臣の支持を見て、父王は頷かれた。

彼は立ち上がり、威厳をもって歩み寄り、自らの手で王家に伝わる海の剣を私に手渡した。その刃は、遠い昔に絶滅した古代の巨大なサメの歯から作られており、鋭く、非常に硬かった。彼はまた、海底で何千年もの間化石となっていた巨大なウミガメの甲羅から作られた、軽くて丈夫な鎧を私に授けた。特筆すべきは、それを私に渡す前に、父王が自らの強力な法力を用いて加持し、鎧の甲羅の一枚一枚にエネルギーを注ぎ込んだことであつた。

これにより、鎧は軽さを保ちつつも何倍も頑丈になり、強力な攻撃に耐えることができた。

「行け、我が息子よ」と父王は私の肩に手を置き、その声は低く、力強かった。「コラリアの力と、母なる大洋の祝福と共にあれ。用心せよ、そして無事に帰ってくるのだ。」

私は頭を下げて重責を受け入れた。心は誇りと鉄の決意で満ち溢れていた。その日、私、王子ライラは、自らの王国を守るため、生死をかけた戦いに正式に足を踏み入れたのである。

壮絶な戦い

父王からの命令を受けた後、私は少しも遅れることなく、直ちに王国で最も精鋭な部隊を編成した。それは、主に戦士の一族に属する最も勇敢な人魚の戦士たちと、偵察に長けた機敏な黒鱗の人魚数名であった。彼らは皆、多くの試練を乗り越え、戦闘経験が豊富で、コラリアに心からの忠誠を誓っていた。数はそれほど多くなく、わず

か数千人であったが、それはまさに選りすぐりの精鋭であった。

我々は迅速に出発し、海蛇の王の群れが恐怖をまき散らしている北の国境地帯へと向かった。行軍は迅速に進められたが、規律は保たれていた。破壊された海域に近づくと、目の前に広がる光景は実に悲惨なものであった。かつて人々の家であったサンゴの塊は、多くの場所で粉々に破壊されていた。残忍な攻撃の痕跡はまだそこにあった。空気は死の匂いと恐怖で重く垂れ込めていた。このことは、私と兵士たちの戦う決意を一層固めさせた。

海蛇の王の群れとの戦いは、私が当初予想していたよりも長く続き、おそらく数ヶ月にも及んだ。それは、非常に壮絶で、困難と試練に満ちた一連の戦いであった。我々は、数え切れないほどの小競り合いは別にしても、彼らと六、七回の大規模な戦闘に直面しなければならなかった。

これらの海蛇の王は、実に恐ろしかった。彼らは数が多いだけでなく、血のように赤い鱗を持つ蛇の王の指揮下で非常に狡猾であった。彼らは、海底の複雑な地形、深い海中の峡谷や、巨大で密集した藻の森を利用して待ち伏せしたり、不利な状況になると退却したりする方法を

知っていた。彼らの皮は厚く硬く、我々の通常の槍では、目や柔らかい腹部などの弱点を突かない限り、その鱗を貫くことは困難であった。

戦士たちの勇猛さ、黒鱗の偵察兵の機敏さ、そして特に私の法力のおかげで、我々はいくつかの重要な勝利を収めた。ある時、私は驚異的な速さで彼らの陣形の中央に突入し、手に持った海の剣を絶え間なく振り下ろし、数匹の大きな蛇に重傷を負わせ、彼らを一時的に撤退させたことを覚えている。そのような時、兵士たちの歓声が海全体に響き渡り、彼らの信頼と士気は力強く固められた。我々はまた、それらの戦闘で何匹かの海蛇の王を倒し、蛇の群れの力をいくらか削ぐことができた。

しかし、我々が多くの不利な状況に直面し、少なからぬ兵士を失う戦いもあった。蛇の群れはあまりにも数が多く、多くの方向から攻撃し、その巨大な尾が水中で激しく打ち付けられると危険な渦が生まれ、彼らの噛みつきによる毒は実に致命的な脅威であった。私の勇敢な戦士たちの多くが犠牲になるか、重傷を負って戦闘を続けられなくなった。仲間が倒れるのを見て、私の心は切り裂かれるようであったが、指揮を続け、戦い続けるためにその痛みを抑えなければならなかった。

私は、自分が優れた戦士であり、力と勇気を持っているにもかかわらず、戦略的な面では、このような狡猾で数多くの敵に対処するための複雑な計画においては、実に多くの欠点があることに気づいた。私はしばしば、力と勇気に頼って直接対決し、最も危険な場所に飛び込む傾向があった。それは兵士を鼓舞することができたかもしれないが、時には我々を不利な状況に陥らせたり、より少ない損失で敵を倒すためのより良い機会を逃させたりした。もし姉がここにいたら、彼女はおそらくもっと賢明で効果的な作戦を立てていただろう。

それでも、我々は退かなかった。蛇の群れを押し返すたびに、我々は少しずつ前進し、王国のために一寸の海を取り戻していった。戦いは一進一退を繰り返し、熾烈を極め、ますます困難になっていった。

罨、そして悲壮な死

父王からの命令を受けた後、私は少しも遅滞しなかった。黒鱗の偵察兵が収集した初期の情報に基づけば、北の国境に出現した海蛇の王の群れは、その中に一際大きく狡猾なリーダーがいたものの、二十匹近くしかいなかった。

この情報をもとに、私は精鋭部隊さえあれば、たとえ彼らが毒を持っていたとしても、容易に全滅させられると確信していた。そのため、私は王国で最も勇敢で戦闘経験豊富な戦士五百人以上だけを率いていくことに決め、この兵力で我々は完全に、そして容易に勝利できると信じていた。

我々は意気揚々と迅速に出発した。しかし、我々はそれが重大な誤情報であることに全く気づいていなかった。実際には、その海蛇の王の群れは二百匹以上の兵力を有していた。血のように赤い鱗を持つ蛇の王は非常に狡猾で、彼は自分の群れに、それぞれ二十匹未満の小さな部隊に分かれて行動し、別々に狩りをするよう命じていた。まさにこのことが我々の偵察兵を欺き、彼らに脅威の実際の規模について不正確な報告を提出させたのであった。

我々の部隊が国境地帯に接近したとき、我々は報告通り、確かに二十匹近く、海蛇の王の一隊を発見した。彼らは我々の部隊を見て、かなり「臆している」ように見えた。私は約百人の兵士に前進して交戦するよう命じた。戦いはかなり迅速に進み、我々は明確な優位を占めた。その蛇の群れは、いくつかの弱い攻撃の後、戦いながら非常に速く、険しい海中の山脈に向かって逃げ始めた。

問題は、海蛇の王が本気で逃げようとしたときの速度が恐るべきものであったことだ。私の兵士の大部分は、勇敢ではあったが、海底の複雑な地形で彼らに追いつくことは困難であった。私と、三十人余りの最も精鋭な戦士たち、つまり強力な法力や卓越した泳ぎの技術を持つ者たちだけが、彼らと同等か、わずかに速い速度を持っていた。

逃げようとする蛇の群れを見て、彼らを滅ぼす機会を逃したくないという焦りが私の中に生まれた。小さな集団を分離して追跡することが危険であることは知っていたが、彼らが逃げて再集結するのを防ぐための、より良い策も思いつかなかった。私は決断した。私自身がこの最も速い三十人の集団を率いてあの蛇の一隊を追跡し、その間、残りの軍団が後方から支援する、と。

それは、致命的な過ちであった。

あの二十匹近くの手蛇の王の一隊は、実はただの囚であった。彼らは、私を含む我々の小集団を、海中の山脈の間にある暗く狭い峡谷へと、ますます深く誘い込むことに成功した。ここの地形は非常に陰しく、無数の洞窟や隅々があり、待ち伏せには理想的な場所であった。

我々が峡谷の中ほどに差し掛かったちょうどその時、突如として四方八方から物音が響き渡った。洞窟の中から、岩壁の暗がりから、何百匹もの他の海蛇の王が一斉に飛び出し、全ての逃げ道を塞いだ。彼らの数は我々が想像していたよりも何倍も多く――二百匹以上はいたに違いない。我々は完全に罠にはまっていた。

その瞬間、遠くからちらりとしか見ていなかった血のように赤い鱗を持つ蛇の王が、ついにその姿を現した。それは私がこれまで見たどの海蛇の王よりも巨大で、その血走った目は私をじっと見つめ、身の毛もよだつほどの血の渇きと獐猛さを帯びていた。

私の三十人の勇敢な戦士たちは、死地に陥ったことを知りながらも、少しも動揺しなかった。彼らは直ちに私の周りに陣形を固め、最後の戦いに備えた。しかし、戦力差はあまりにも大きかった。

蛇の王は、私だけを狙っているようだった。それは水中で天変地異のような咆哮を上げ、そして矢のようにまっすぐ私に向かって突進してきた。私は持てる全ての力と法力で戦った。手にした海の剣を振り上げ、その石のように硬い鱗に打ちつけると、薄暗い水中で火花が散った。父王から授けられ、法力を込められた鎧は、その多くの

尾撃や毒に満ちた噛みつきから私を守ってくれた。私はそれに多くの傷を負わせ、その黒い血が広がり始めた。

しかし、それはあまりにも強く、あまりにも粘り強く、そしてその群れからの支援はあまりにも圧倒的であった。私が一瞬の間を見せた時、後ろから別の蛇に攻撃された忠実な戦士を庇おうとした瞬間、蛇の王はその機を逃さなかった。それは強烈な尾撃を放ち、私を吹き飛ばし、鋭い岩壁に激しく叩きつけた。鎧は壊れなかったが、その衝撃で私は眩暈がした。そして私が体勢を立て直す前に、その巨大な顎が、長く鋭い牙とともに、私を捕らえた。

王子ライラとしての私の最後の感覚は、全身を引き裂くような痛みと、意識を覆う闇であった。私の魂は抜け出し、自分の肉体が怪物に飲み込まれるのを見ているようだった… いや、すぐにはそうではなかった。

私の意識が完全に消え去る前に、私はまだ周囲の混乱を感じていた。蛇の王の打撃を受け、それに捕らえられて重傷を負ってはいたが、私はまだ完全には死んでいなかった。私の三十人余りの勇敢な戦士たちのうちの数人、おそらく十人にも満たない者たちが、自らも傷だらけでありながら、絶望的に戦い、私の周りに最後の小さな円

陣を組もうとしていた。海蛇の王の群れの咆哮、弱々しくぶつかり合う武器の音、残された者たちの苦痛の叫び…そのすべてが混沌とした耳障りな音に溶け込んでいった。

まさにその危機的な瞬間、我々がほぼ完全に力尽きようとしていた時、軍団の残り、四百人以上の兵士たちが、ついに峡谷の入り口に到着した。おそらく彼らは激しい戦闘の音を聞いたか、何か異常を感じ取ったのだろう。我々の窮状を見て、私、彼らの王子が、重傷を負いながらもまだ息があり、何百もの怪物に囲まれているのを見て、彼らはためらうことなく、我々を救出するというかすかな望みをかけて突入してきた。

しかし、それは実に絶望的な試みであった。彼らは、殺戮の狂乱にある海蛇の王の群れの厚い包囲を突破できなかっただけでなく、勝ち目のない戦いに巻き込まれてしまった。私は、忠実な兵士たちが戦い、倒れていくのを辛うじて見るだけで、その後、蛇の王が最後の一撃で私の命を完全に絶った。

最終的に、救助部隊全体の中で五十人余りしか生き残らなかった。疲れ果て、傷だらけの戦士たちが、幸運にも

その死の包囲網から脱出し、私の犠牲と精鋭部隊のほぼ全滅という悲劇的な知らせを王国に持ち帰った。

ずっと後になって、現在の生で天目が開かれた時、私はさらに一つの悲劇的な詳細を知ることになった。私が愛したサンゴの人魚の娘は、私がその戦いで犠牲になったと聞くと、三日三晩、絶え間なく泣き続けた。そして、極度の絶望の中で、彼女は自らの命を絶った。来世で私と結ばれたいという切なる願いを込めて…

* * *

第三章： 長白山の山の神

...

青い海の王子ライラとして、悲壮な戦いと未完の恋を経験した深海の底での生ののち、私の魂は再び輪廻の旅を続けた。さらに多くの人間としての生を経験し、栄枯盛

衰、喜びと悲しみを味わった。ある時は官吏となり、ある時は民となり、またある時は各地を旅する商人となった… それらの生についての記憶は、ややおぼろげである。しかし、ある一つの生は、非常にはっきりと覚えている。なぜならその時、私は人間ではなかったからだ。

その人生で私は、雄大で神聖な長白山一帯を治めることを託された、山の神であった。（長白山は、今日の中国と北朝鮮の国境に位置する山である）

この話もまた、非常に、非常に昔のことで、おそらく今から七万年ほど前のことだろう。その時代は、我々が知る古代文明よりもさらに前に存在した文明に属する。彼らの言語や文字は、異なっていたが、後に我々が知ることになる古代中国語に似た、近しい特徴を持っていた。おそらくそのため、「長白」のような当時の概念や名称の一部は、その意味が多少変わったかもしれないが、今なおその名残を留めているのだろう。山を治める神としての私の任期は、この世の時間で百数年続いた。

当時の長白山は、普通の山々とは似ても似つかぬものであった。それはまさに、古の人々が「靈氣が集まり、天と地を繋ぐ場所」と呼んだ場所であった。それは天と地を結ぶ巨大なエネルギーの柱のようであり、道を修める

者たち、そしてそこに住む他の生命体にとっても聖地であった。

長白山 – 聖なる領域

七万年前の長白山の美しさと神聖さは、今日の我々の言葉では到底表現し尽くせない。何千年もの樹齢を重ねた巨木が生い茂る広大な原生林を想像してみてほしい。その幹は数人がかりでなければ抱えられないほど太く、その豊かな葉冠は空全体を覆い隠していた。その空気は常に清らかで涼しく、特別な聖なる気が漂っており、それを吸い込むと全身が軽くなり、心が爽やかになるのを感じた。

当時の長白山の頂は、今日よりもはるかに高かった。私の記憶では、海拔四千五百メートルを超えていたはずだ。頂は一年中、白く厚い雪に覆われ、太陽の光にきらめき、あるいは霧の中にぼんやりと浮かんでいた。後世の人々が知る天池のような大きな湖は、頂にはまだ一つもなかった。その代わり、頂は雄大な花崗岩の塊であり、そこでは風と雪が吹き荒れ、荘厳で過酷でありながら、同時に非常に清らかで神聖な風景を創り出していた。人々は、

そこが天に最も近い場所であり、神々がしばしば降臨してこの世を観察する場所であると信じていた。

当時の長白山はまた、無数の珍しい霊獣、色鮮やかな羽を持つ鳥獣、そして他の場所では到底見つけれない奇花や珍草の住处でもあった。中でも特筆すべきは、千年の人参であった。それらは単なる貴重な薬草ではなく、実に高い霊性を持ち、感知する能力、さらには移動し、善ならぬ心を持つ者から身を隠す能力さえ持っていた。

まさにその神聖さと豊富なエネルギーのために、長白山は各地から多くの道を修める者たちを引き寄せた。彼らは人里離れた洞窟や、深い森の中にひっそりと佇む庵を選び、隠棲し、心の静けさを求め、天地の霊気を吸収して修煉の助けとした。彼らはまた、山で珍しい薬草を探し求めて丹を練ったり、人々を癒す薬を作ったりすることもあった。

私の役割と権能（山の神として）

天から長白山全体の統治を任された神として、私の責任は非常に大きかった。私は自分の領地内の自然の調和の

とれた運行を見守らなければならなかった。草の一本、木の枝一本から、獣たち、そして地の霊的エネルギーの流れに至るまで。私の使命は、全体的な均衡を保ち、善良な生命体を保護し、聖なる山と因縁のある真の修煉者を助け、そして時には、悪事を働く者や山の神聖を破壊する行為をする者を罰することであった。もちろん、私の全ての行動は天意に基づかねばならず、自分の意のままに軽々しく行うことはできなかった。

私のような山の神の権能にも一定の限界があり、多くの人々が誤解しているように無限ではなかった。長白山の範囲内であれば、私は蒸し暑さを払うためのそよ風や、弱い生命体を守るため、あるいは山に足を踏み入れたばかりの者の心を試すために、時折薄い霧を発生させることができた。必要であれば、草木を潤す小雨を降らせたり、自然に大きな混乱を引き起こさない程度に小さな岩を動かして景観を変えたりすることもできた。私は必要に応じて様々な姿で現れることも、姿を隠して誰にも見られないようにすることもできた。私の重要な能力の一つは、私の領地に入る者たちの善悪の心を見抜くことであり、誰が助けるに値し、誰に警戒すべきかを知ることだった。

しかし、海から押し寄せる嵐や、広範囲に及ぶ長期の干ばつといった大きな気象現象は、通常、はるかに高い次元の神々、つまりより大きな地理的地域や自然要素を司る神々によって定められていた。そのような場合、私には介入してそれを変える権能はなく、もし天が許すのであれば、自分の山の範囲内で被害を最小限に抑えることしかできなかった。

私の統治下で、長白山内の各種の生物や特定の地域には、それぞれさらに小さな、より専門的な神々がおり、それはまるで階層システムのようなものであった。例えば、山中の全ての虎を司る虎の神がおり、彼らが自然の法則に従って狩りをし、他の生命体に無用の害を与えないように保証していた。自分の群れを見守る猿の神もいた。さらには、貴重な木の成長を見守る木の神々、大きな岩や険しい崖の安定を司る石の神々、そして他にも多くの神々がおり、それぞれが独自の責任を担っていた。

このシステムは、因果応報の法則と天意に基づき、非常に厳格な規則に従って機能していた。例えば、ある虎の神が監督を怠り、自分の虎が理由もなく人間を襲って食べた場合——人間が先に侵入したり挑発したりしたわけではなく、また前世からの因果関係もなかった場合——

その虎の神もまた、天帝の宮廷から叱責を受け、責任を果たさなかったとして罰せられることさえあった。この宇宙の全ての事柄には、神々の世界でさえも、公正さと秩序が存在するのである。長白山での私の百数年にわたる任期は、それらの責任を遂行し、聖なる山を常に平和で調和のとれた状態に保つ、長い日々の連続であった。

道士たちの流れと人参の奇跡を目撃して

長白山を治めていた百数年の間、私が最も頻繁に行ったことの一つは、ここにやってくる道を修める者たちの流れを静かに見守ることだった。彼らは様々な場所から、異なる因縁と目的を携えてやって来た。ある者は瞑想のための静寂を求め、ある者は悟りを願い、またある者はただ俗世を離れて隠遁生活を送りたいと願っていた。彼らは古代の言語を話したが、この地の神である私は、彼らの祈りや秘めたる思いを理解することができた。

私の神の目を通して、多くの人々の敬虔な心、困難に満ちた修煉の道における彼らの忍耐と粘り強さが見えた。また、彼らが直面する試練や魔の障害、外部からのものも、彼ら自身の内面からのものも見ることができた。こ

れらの修煉者の大半は、超自然的な世界に対してある程度の感応を持つことはあっても、私の存在を明確に認識することはできなかった。彼らは山の神聖さを感じることはできたが、一人の山の神が静かに見守り、時には彼らを保護していることには気づいていなかった。

しかし、長い任期の間には、非常に高い道徳的境地にある道士たちと何度か出会い、心を通わせることもあった。彼らは長年修煉を積み、天目を開き、一定の神通力を持つ人々であった。このような方々とは、我々は通常の間言語を使って話す必要はなかった。我々は天目を通して、思考の伝達によってコミュニケーションを取った。それは、後世の人々が「他心通」と呼ぶかもしれない能力の一種である。それは実に特別な対話であり、言葉の限界を超えていた。我々は、彼らの文化に古くから存在する概念である「道」について、天地の奇跡的な運行について、宇宙の謎について語り合うことができた。時には、天意が許せば、私は彼らの修行の道すがら、小さな助言や繊細な警告を与え、彼らが罣を避けたり、突破すべき点に気づいたりするのを助けることもあった。このような出会いは多くはなかったが、その都度、真の修煉者の智慧と不動の心に深い感銘を受けた。

もう一つ、私が頻繁に目撃したのが、長白山の千年の人参を求める人々の姿であった。先に述べたように、これらの人参は単なる通常の薬草ではなかった。それらは何百年、何千年もの間、天地の靈気を吸収してきたため、非常に高い靈性を持ち、ある程度の知性を持つ生命体とさえ考えられた。その形状はしばしば非常に特別で、人間の形に似た根を持ち、感じ取ることができる温かい靈気を放っていた。それらはまた、移動し、巧みに身を隠す能力も持っていた。そしてもちろん、このような貴重な人参には、より下級の木の神々や森の精霊たちが付き添い、保護していた。

私はしばしば自分の神力を用いるか、木の神々に合図を送って、これらの貴重な人参を保護した。善ならぬ心を持つ者、貪欲な者、あるいは因縁がまだ熟していない者がそれらを探し求めようとする、私はそれらの人参を彼らの目の前で「消え失せ」させたり、彼らを別の方向に迷わせたりした。私がかつて交流した道士のような高い道徳的境地を持つ修煉者か、あるいは本当に純粋な心を持ち、山林と大きな因縁を持つ一般の人々だけが、人参を「見て」「得る」という縁に恵まれた。千年の人参を「見つける」ことは、単なる幸運ではなく、私の許可、見守る神々の同意、そして時には人参自身の靈の「受容」

の全てが揃って初めて可能となるのであった。徳の高い道士たちの中には、貴重な人参を見つけてもすぐには採らない者もいたのを覚えている。彼らは、その人参がまだ最も「熟した」時期にないと察したのかもしれないし、あるいは、より縁のある者のためにそれを残しておきたいと思ったのかもしれない。そのような時、彼らはしばしば自らの術を少し用いて、その人参をより巧みに隠し、後の適切な時期を待った。

それらは、山の神としての生活における一場面であり、私が神聖な長白山で目撃し、経験した事柄であった。

運命の出会い

長白山を治めていた長い年月、私は常に天意の枠内に留まるよう努め、人間や他の生命体の運命に深く干渉することはなかった。世の中の全ての事柄には、それぞれの因縁と業報があることを理解していた。しかし、一度だけ、たった一度だけ、私の心の中の哀れみの情があまりにも強く湧き上がり、その原則から逸脱させてしまった。そして、まさにその一度が、私の山の神としての人生に大きな転機をもたらした。

ある日、私が自分の領域を巡り、山林の隅々まで観察していた時、険しい山腹を苦勞して登っている若い女性に気づいた。彼女は少し修煉の素地があるように見え、初めの道心はかなり誠実に見えたが、その素養はまだ浅く、修煉の功夫もまだそれほどではないと感じられた。その女性の名前は、もし現代の言葉に訳すとすれば、ミン・タムという響きに近かった。

ミン・タムが長白山に来たのは、隠棲するためでも、自己の悟りを求めるためでもなかった。彼女は非常に具体的な目的を持ってここに来た。故郷で重い病に伏している老母を救うために、千年の人参を探しに来たのだ。私は、彼女の母親が病床に横たわり、息も絶え絶えで、その命が風前の灯火である光景を見た。また、ミン・タムが母親に捧げる親孝行の心、心配、そして無限の愛情も見た。

彼女はこの山に何日も滞在していた。毎日、夜明けから日没まで、ミン・タムは森中をさまよい、数え切れないほどの坂を登り、岩の隙間や茂みの中を探し回った。彼女の体は疲れ果て、薄い衣服は所々擦り切れ、その小さな足は鋭い岩にぶつかって血が滲んでいたかもしれない。しかし、彼女の目にはまだ固い決意と、かすかな希望が

輝いていた。彼女は、靈的な人参さえ見つければ、母親は助かると信じていた。

私はミン・タムを数日間観察し続けた。私は彼女の親孝行の心にある誠実さを見た。しかし同時に、天機も見た。定められた運命によれば、ミン・タムの母親の寿命は尽きかけており、それは彼女が前世で返さなければならない業報であった。そしてミン・タム自身も、現在の素養と徳では、天地の靈物である千年の人参を所有するほどの因縁はまだなかった。彼女がこの時に人参を見つけることは、母親の命を少し引き延ばすことはできても、定められた因果を乱すことになるだろう。さらに、その福分は、当時のミン・タムが背負うにはあまりにも大きく、後々彼女に災いをもたらすことさえあり得た。

私はそれを知っていた。しかし、何日も探し続けた末に完全に疲れ果て、古木の根元に座り込んで嗚咽するミン・タムの姿を見た時、荒涼とした山林で泣くか弱い娘の姿は、あまりにも胸が張り裂けるようであった。彼女は天を仰ぎ、涙と汗を混ぜ合わせながら、神々に、長白山の山の神に、慈悲を乞い、道を示してくれるよう祈った。「どうか母を助けてください！ 私は牛馬となって御恩に

報いることを誓います！」その悲痛な祈りの言葉は、絶望の涙と共に、私の心の奥深くにまで届いた。

戒律を超えた慈悲

その光景、ミン・タムの苦痛と絶望を目の当たりにして、私の心は実に揺さぶられた。無限の憐憫の情が湧き上がり、天機や、私のような神が守るべき戒律についての考察さえも圧倒した。私は自分に言い聞かせた。私はこの山の山の神であり、少しの権能を持っている。こんなにも窮地に陥っている親孝行な娘を助けられないことがあるだろうか？ほんの少しの助けであれば、おそらく大きな混乱は引き起こさないだろう。まもなく命を落とそうとしている生命が、愛する人と少しでも長く一緒にいられるなら、それは良いことではないか？

その時、私の心の中の慈悲が理性を曇らせてしまった。私は、神の慈悲は天の理に従わねばならず、宇宙の調和の中に置かれねばならず、一時的な感情から生じるものではなく、ましてや因果の定められた計らいに逆らうことなどできない、ということを忘れてしまっていた。私

はただ単純に、ミン・タムを助けたい、彼女の苦しみを和らげたいと思っただけだった。

そして、私は介入することを決意した。

私は自分の神力を使い、空間の微細なエネルギーの流れにそっと働きかけ、見えない導きを創り出した。私はミン・タムの前に直接姿を現すことはなかったが、彼女の疲れた足取りを、私が知っている、数百年の貴重な人参がある人里離れた場所へと巧みに導いた――それは希少な千年のものではなかったが、奇跡を起こすには十分な霊気を持っていた。同時に、私は自分の念を使い、その人参を見守っている木の神と、人参自身の霊意識にも穏やかなメッセージを送り、彼らの警戒心を解かせ、ミン・タムがより簡単に見つけられるようにした。私は、数百年の人参であれば、千年ものほど大きな業は生じないだろうと思った。

即座の報いと天からの警告

案の定、ほんのしばらくして、ほとんど絶望していたミン・タムは、突然、近くの茂みから放たれる柔らかな光

輪を見た。彼女は涙を拭い、なんとか立ち上がって近づいた。そして、彼女は抑えきれない喜びの声を上げた。彼女の目の前、葉陰に見え隠れしていたのは、非常に美しい形をした人参の根で、清らかな香りを放っていた。それは彼女が望んでいた千年のものではなかったが、彼女はそこから溢れる靈気を感じ取った。彼女は慎重に人参を掘り出し、宝物のように手に抱き、そして絶えず頭を下げて天地と山林に感謝した。その後、彼女は希望に満ちた心で急いで山を下りていった。

ミン・タムが、私が彼女が見つけるのを「手助け」した人参を持って木々の陰に消えた直後、私は突然、自分の周りの空間に強い振動を感じた。長白山の頂の青空が、にわかに暗くなった。威厳があり、やや厳しい金色の光が、九天の雲の上から、私が立っている場所にまっすぐに降り注いだ。空気は凝固し、山林の全ての音が静まり返った。

私の意識の中に、声が響き渡った。それは喉から発せられる音ではなく、直接的で、力強い思念の伝達であった。

「長白山の山の神よ！ そなたは私情により天の理を乱し、因果に干渉した！ そなたの先程の行いは、たとえ憐憫の情から出たものであっても、運命の

自然な運行に逆らうものであったことを知っているか？ 神の慈悲は天の理に従わねばならず、智慧に基づかねばならず、宇宙の戒律を超えることはできぬ。そなたは定められたものを勝手に変えた。その行いの結果は、そなたが負わねばならぬ！」

私は愕然とし、全身が凍りついたようであった。この時になって初めて、私は本当に目覚め、自分の重大な過ちに気づいた。慈悲が智慧と天意への絶対的な遵守を伴わなければ、善をもたらさないばかりか、予測不能な混乱を引き起こす可能性があり、自分自身もその責任を負わねばならない。後悔と恐怖の念が心に湧き上がったが、もはや手遅れであった。天からの警告は、非常に明確であった。

審判と慈悲深き決定

天からの厳しい警告の後、私は自分が審判を免れないことを知っていた。程なくして、私は見えない引力を感じ、私の霊体は長白山を離れ、より高位の神々が集う荘厳な領域へと導かれた。

天帝の宮廷の前に立ち、私は自分の罪を否定したり、自分の行動を正当化したりすることは一切しなかった。私は誠実に過ちを認め、一時的な哀れみの情から天機を乱し、他者の因果に干渉したことを認めた。私はあらゆる罰を受け入れた。

天帝の宮廷の神々は、事態を注意深く検討した後、私の行動には過ちがあり、戒律を犯したものの、その出発点は困窮する衆生を助けたいという慈悲の心からであり、私利や悪意からではなかったことを明確に見抜かれた。さらに、私の介入も節度ある範囲内であり、わずか数百年の人参であり、運命に大きな混乱を引き起こすほどのものではなかった。

そのため、天が私に下した罰は、厳格さの中にも慈悲と、因縁に満ちた計らいが隠されていた。私は神力のかなりの部分を剥奪され、さらに重要なことに、長白山を治める山の神としての任期は予定より早く終了することになった。私は俗世に下生し、人間として転生しなければならなかった。

この下生の目的は、私が理解する限り、単なる罰のためではなかった。天は、私が干渉した因果の流れに直接身を置くこと、特に親孝行な娘ミン・タムとの因縁を

通して、その行動の結果を自ら体験し、より深く理解することを望んでおられた。同時に、これは私が自己の修養をさらに完成させる機会でもあり、将来、私の慈悲が一時的な感情に左右されることなく、常に智慧と天意への絶対的な敬意を伴うようになるためのものであった。

山林への別れと新たな始まり

私の魂が神の領域を正式に離れ、転生の準備に入る前に、私は最後に一度だけ長白山を見ることを許された。高みから、私が百数年にわたって愛し、守ってきた雄大な山々を見渡し、私の心には言葉にできないほどの愛着の念がこみ上げてきた。私は草木から、獣たちから、せせらぎの音から、そして私がかつて守った霊的な人參たちからも、名残惜しさを感じた。彼らもまた、自分たちの山の神が去ろうとしていることを知っているかのようにだった。私は静かに皆に別れを告げ、もし縁があれば、いつか必ず戻ってくると約束した。

そして、私の魂は一人の神に導かれ、異なる空間の層を通り抜け、人間界の輪廻の輪へと入っていった。そして、実に驚くべき計らい、奇跡的な因縁が定められていた。

私は、見知らぬ家族のもとに転生したのではなく、まさにミン・タム——かつて私が長白山で哀れみの情を抱き、手を差し伸べたあの親孝行な娘——の息子として生まれることになったのだ。

ミン・タムの息子としての人生－経験と成長

ミン・タム、その人生での私の母は、非常に慈悲深く、徳の高い、子供を心から愛する女性であった。おそらく、彼女の老母（前世でのミン・タムの母）への親孝行の心から得たわずかな福德と、私がかつて彼女が見つけるのを「助けた」人参の霊気のおかげで、彼女の母は重い病を乗り越え、自分の孫が生まれ育つのを見るのに十分なほど、さらに何年も生きることができた。

その人生での私の父（ミン・タムの夫）もまた、素朴で心優しい、妻と子を深く愛する男性であった。我々の家族は小さな田舎の村で暮らし、生活はやや厳しかったが、常に笑いと思い合いへの気遣いに満ちていた。

ごく幼い頃から、私は漠然とした感覚や、広大な山林、何か非常に神聖で雄大なものについての奇妙な夢を抱いていた。私は自然と特別な結びつきがあり、丘をさまよい、鳥のさえずりを聞き、流れる雲を眺めるのが好きだった。しかし、自分がかつて威厳ある山の神であったという前世の記憶は、全く思い出すことができなかった。ただ、私の意識の中には常に、修行者や高い山に対する特別な敬意と、神仏の存在に対する漠然とした信仰があった。

私は両親に心から愛され、育てられ、きちんと教育を受けさせてもらった。成長すると、私もまた親孝行で素直な、学問に励む息子であることを示した。後に、私は試験に合格し、地方の小役人、おそらく今日の郡長に相当する職に就いた。役人として過ごした年月、私は常に正直で清廉な人生を送るよう努め、自分の能力の範囲内で民衆に心から仕え、私が治める地域の人々に公正と豊かさをもたらそうと努めた。おそらく、潜在意識のどこかで、私は山の神であった頃の無思慮な介入が引き起こしたかもしれないことを、たとえ明確に意識していなくても、償うかのように、良いことをしたいとまだ願っていたのだろう。

その人生で、ミン・タムの息子として、私は実に人間の生の浮き沈みを十分に味わった。家族団らんの喜び、別れの悲しみ、日々の糧の心配、仕事や社会に対する責任。私は、どんな生命であれ、誰であろうと、それぞれに運命と、自らが負うべき重荷があることを理解した。また、両親の愛情、彼らの静かな犠牲についても、より深く理解した。そして、他者の人生に外部から介入することは、たとえどれほど善意からであっても、非常に慎重でなければならないと気づいた。なぜなら、それが元々非常に複雑な因果の輪に、どのような影響や混乱を引き起こすかを、我々は到底予測できないからである。

ミン・タムの息子としての人生は、平凡ではあったが、私に人生について、人の情について、そして天の理の働きについて、非常に貴重な教訓を与えてくれた。それは実に、私の魂の次なる旅立ちに必要な準備であった。

* * *

第四章： 三国時代の天機

...

今日、中国の三国時代について聞いたことがある人は多いだろう。それは、英雄的な戦い、驚くべき謀略、そして代々語り継がれる兄弟の絆の時代であった。しかし、それは劇の一部に過ぎない。空を覆う旗とぶつかり合う武器の音の背後には、もう一つの世界があった。隠棲する道士、術数、そして運命を見通すことができる者たちの世界である。それは、天意と因果が驚くほど鮮明に現れた時代であった。

そしてある人生で、私はそこにいた。ただし、名高い將軍としてではなく、静かな観察者として。

その時の私の魂は、非常に道教的な名前を持っていた。清虚子（せいきょし）である。

私は幼い頃から、一年中霧に覆われた霊山である武当山で道を修めていた。私の師父は真の修煉者であり、私に医術や術数を教えただけでなく、さらに重要なことに、天地の運行、つまり世の人々が天意と呼ぶものを感じ取る道を開いてくださった。良い素質と師父の教えのおかげで、私の天目は早くに開かれ、常人には見えないものが見えるようになった。

師父が道を円満成就し昇天された後、私は山を降り、俗世を巡る旅を始めた。それは天下が大いに乱れていた頃であった。漢王朝の朝廷はもはや影のような存在となり、各地で諸侯が蜂起し、誰もが霸王の夢を抱いていた。その頃、私は四十歳を過ぎ、多くの地を旅し、多くの悲惨な光景を目にした。その放浪の日々の中で、私は俗世に隠棲する多くの道を修める者たちに出会った。ある者は名だたる山で修煉し、ある者は賑やかな市場の喧騒の中に身を隠していた。我々はしばしば、一瞥するだけで互いを認識し、世事や道について一言二言言葉を交わし、そしてまたそれぞれの道へと分かれていった。

しかし、その中にはいくつかの特別な出会いがあった。それは、道徳的境地が高いだけでなく、時代全体の運命と密接な関係を持つ人々との出会いであった。そして、まさにこれらの奇遇を通して、私は次第に天下を覆う見えざる網を見抜くようになった。最初の出会いは、水鏡先生、司馬徽であった…

そして、因縁は私を水鏡莊へと導いた。

水鏡先生との出会い

司馬徽の屋敷は、それほど人里離れた場所にあったわけではないが、不思議と孤高の雰囲気醸し出していた。まばらな竹垣に囲まれ、数本の古い松の木が影を落とし、小さな小川からさらさらと水の流れる音が聞こえる。高い門や壁はなく、多くの使用人がいるわけでもない。中へ入ると、梅の木の下で枯葉を掃いている一人の童子がいるだけだった。客に気づくと、童子は名前を尋ねることもなく、ただ頭を下げて挨拶し、私を奥へと案内した。

池を望む質素な木の縁側の下で、白髪白髭の老人が、粗末な布の服を着て、一人で碁盤に向かっていた。黒と白の碁石は、複雑な膠着状態にあった。老人は顔を上げなかったが、その声は低く、暖かく、そして清らかに響いた。

「道友よ、武当山の霧の気配をまとめて来られたな。この拙僧の碁盤には難局がある。共に見てはくれぬか。」

私は彼が水鏡先生であることを知っており、彼もまた私が誰であるかを知っていた。道を修める者たちの間では、精神的な交感は時に言葉よりも速い。私は微笑み、彼の向かいに座った。

「先生」と私は言った。「この碁、白は劣勢にあり、囲まれてはおりますが、隅にはまだ活路が一つ残っております。ただ、その活路はあまりにも細く、包囲を破るには神の一手が必要でしょう。凡人には見えにくく、たとえ見えたとしても、その手を打つ勇氣はないかと存じます。」

水鏡先生はここでようやく顔を上げた。その目は秋の湖のように澄み渡っており、私を見て静かに頷いた。彼は袖を振り、盤上の碁石を払いのけた。

「どうやら、道友と拙僧はもはや碁の話をする必要はないようだな。茶をどうぞ。」

童子が湯気の立つ茶の急須を運んできた。茶の香りはほのかで、清らかであった。私たちはしばらく黙って座っていた。ただ風のざわめきと水の流れる音だけが聞こえた。

「道友よ、そなたは各地を旅しておるが」と水鏡先生が先に口を開いた。「この天下という大きな碁盤で、何を見られたかな？」

「竜と蛇が入り混じり、鹿や獲物が争うのを見ました」と私は答えた。「しかし、真龍は見えませぬ。漢王朝の龍は、その気力も衰え、龍脈も断たれ、もはや彷徨う影に過ぎませぬ。」

水鏡先生は一つため息をついた。それはまるで四百年の悲しみを内包しているかのようであった。「その通りだ。龍脈は断たれた。諸侯が争っているのは、実のところ魂のない龍の骸に過ぎぬ。河北の袁紹は、四代にわたり三公を輩出した家柄で、一見すると猛虎のようだが、その気運は混じり合っており、外見は強固でも内面は脆弱だ。それは張子の虎、大雨が降れば崩れてしまう。」

「許都の曹操はいかがでしょうか？」と私は尋ねた。「この者の気は深く計り知れず、王者の気を持ちながら、同時に奸雄の気も混じっております。非常に複雑です。」

「道友の見立ては間違っておらぬ」と水鏡先生は一口茶を啜った。「曹操は蛟龍だ。蛟龍は川や海を縦横無尽に駆け巡り、雲や雨を掻き乱すことはできるが、真龍ではない。彼は一時期、天に代わって事を行うことはできても、天そのものになることはできぬ。彼の天命は、古い時代を終わらせることであり、永続する新しい王朝を開くことではない。彼は天の鞭であり、死んだ龍の骸を打

ち、他の役者のために舞台を掃き清めるために使われるのだ。」

彼の言葉に私ははっとした。「天の鞭」。この表現はあまりにも的確であった。

「では、江東の孫氏はいかがでしょうか？」と私は続けた。「その地は長江を防御線とし、土地は豊かで、民心も従順で、まるで独立した世界のようにです。」

「江東には帝王の気があるが、それは分相応の王の気だ」と水鏡先生は答えた。「彼らは自らの基盤を固く守ることはできても、天下を統一する天命はない。彼らは山に籠る虎のようなもの。一地方の覇者にはなれても、平野に下りて獅子の群れと争うことは決してあるまい。」

我々は再び沈黙した。我々の話すことを、もし凡人が聞けば、おそらくただの空論だと思うだろう。しかし私には分かっていた。それは我々が本当に「見て」いるものであり、気数、すなわち天命の働きそのものであった。

私は静かな湖面を見つめた。皇族の血を引く劉備が、各地を放浪し、大志未だならざるを思った。

私の考えを読んだかのように、水鏡先生は静かに言った。

「もう一人おる。漢の真の気をわずかに宿しているが、あまりにも弱すぎる。この者は仁義に溢れているが、時運に恵まれていない。彼は良質な種子のようだが、厳寒の冬に落ちてしまい、大木に育つのは非常に難しい。」

「先生」と私は尋ねた。「ではこの天下は、永遠に混乱の中に沈んだままなのでしょうか？」

水鏡先生はすぐには答えなかった。彼は立ち上がり、手を後ろに組んで縁側に出て、湖面に広がるさざ波を見つめた。

「そうはなるまい。どんな舞台にも幕が下りる時が来る。大乱の後には、塵が収まる時が来る。世に優れた人材が現れ、この碁に一時的な結末をもたらすだろう。しかし、それはあくまで一時的な結末に過ぎぬ。道友よ、龍中に若者がいることをご存知かな？」

「臥龍先生のことですか？」と私は答えた。

「そうだ」と水鏡先生は振り返った。その目には賞賛と哀れみが入り混じった複雑な光があった。「この者の才は、姜子牙や張子房にも匹敵する。しかし残念なことに、

時運に恵まれなかった。姜子牙は殷王朝が末期に差し掛かった時に文王に出会い、周王朝八百年の礎を築くことができた。張子房は秦王朝が極度の暴政を敷いた時に漢の高祖に出会い、漢王朝四百年の泰平をもたらすことができた。」

彼は一旦言葉を切り、そして私が後々まで忘れられない一言を口にした。

「だが臥龍は、主君には出会えたものの、王朝の天命が尽きた時に会ってしまった。彼は天下第一の名医のようだが、内臓が全て腐りきってしまった患者を治療するために招かれたようなものだ。息を引き延ばし、最期の日々を少しでも痛みの少ないものにすることはできても、死者を蘇らせることは到底できぬ。それが彼の悲劇であり、またこの時代の悲劇でもあるのだ。」

彼の言葉は、私の心を槌で打つかのようであり、私の漠然とした考えを明確にした。私は立ち上がり、深く一礼した。

「先生のご指導、感謝いたします。清虚子、理解いたしました。」

私が去る時、彼の嘆息がまだ耳元で響いていた。私は、間もなく劉備がここを訪れ、水鏡先生が彼に臥龍と鳳雛について語ることを知っていた。しかし、天機の核心、その「時運に恵まれなかった」という事実は、おそらく彼はただ一つの嘆息の中に留めておくだけだろう。

諸葛亮との出会い

水鏡莊を後にして、天下の形勢についての私の心の中の霧は、いくらか晴れたように思えた。先生の「名医」と「内臓が腐りきった患者」についての言葉が頭の中で響き続け、私を龍中へと向かわせた。私はこの「臥龍」を、その才能のほどを見るためではなく、運命的な選択を前にした一人の人間の魂を感じるために、この目で確かめたかった。

諸葛亮の庵は龍中の丘の上にあり、そこからは広大な土地を一望できた。清らかで孤高の水鏡莊とは異なり、この場所は別の雰囲気醸し出していた。それは依然として隠者の質素さであったが、静の中には動が秘められていた。整然と耕された田畑、青々とした野菜の畝、そして庭には土と小石で丹念に作られたいくつかの軍事ジオ

ラマが見えた。ここは、完全に俗世から離れたいと願う者の場所ではなく、時を待つ者の場所であった。

私は、私と諸葛亮の共通の友人である崔州平と共にそこを訪れた。中へ入ると、二十歳そここの若者が窓際に座っていた。手には古い書物を持っていたが、その視線は書物にはなく、空を流れる雲を追っていた。その若者は背が高く、書生風の佇まいであったが、その目は他人の心を見透かすかのように、異常なまでに輝いていた。彼こそが、諸葛孔明であった。

彼は書物を置き、立ち上がって我々に拱手の礼をした。その態度は悠然として優雅であった。崔州平は私を武当山から来た道士だと紹介した。諸葛亮は私を見て、その目をわずかに細めた。探るような、しかし決して無礼ではない視線であった。私は、彼もまた、ただの目でなく、私を「見て」いるのだと分かった。

我々は腰を下ろし、初めは天気や農作業のこと、久しぶりに会った友人同士のたわいもない話をした。しかし、次第に会話は天下の形勢へと移っていった。

崔州平は率直な男で、彼は諸葛亮に尋ねた。「孔明よ、君は人並み外れた才知を持ちながら、なぜいつまでもこ

のような山林で畑を耕しているのか？世に出て国を助け、功名を立ててはどうか？」

諸葛亮はただ微笑み、手にした羽扇を軽く振った。「州平兄よ、時至らずして、何を急ぐことがあろうか？賢い鳥は枝を選んで止まり、優れた臣下は主君を選んで仕えるものだ。主君現れず、時至らずして世に出ても、それは火に飛び込む蛾のようなもの。一生を無駄にするだけだ。」

その答えを聞いて、私は彼が普通の功名心を持つ人間ではないと悟った。彼は自分の才能にふさわしい「主君」を待っていた。私は口を挟んだ。「先生は『時至らず』と申されるが、果たして先生は『時が至る』のを待てるのであろうか？それとも、先生ご自身が『時』を創り出そうとされているのか？」

私の問いは、彼の心の内を的確に突いたようであった。諸葛亮の視線は、私をより深く見つめた。

「道士殿のお言葉、ごもっともです」と彼は答えた。その声にはもはや雑談の響きはなかった。「『時』は天が定め、『勢』は人が創るもの。人は『勢』を創り出すことはできても、『時』に逆らうことはできません。漢王

朝四百年の気数は尽きました。それが『時』です。諸侯が争い、民が苦しむ。それが『勢』です。この時代の才ある者は、せいぜいその『勢』に乗じて新たな局面を創り出すことができるだけで、どうして過ぎ去った『時』を引き留めることができるのでしょうか？」

我々の対話は、ますます易経の道理や星占いの術へと深まっていった。彼は星々の運行、天象と世事の対応について、書物で学んだ書生とは異なり、自ら観察し、実証した者のように、流暢かつ正確に語った。私は、この若者もまた道を修める者であり、非常に高い境地で智慧を開いた者であると知った。

話が最も核心に触れた時、私は彼に集中して視線を送った。そしてその時、私の天目に奇妙な光景が現れた。

優雅な書生の姿が徐々に薄れ、その上に別の、より遠い過去からの映像が重なった。私は、煙が立ち込める戦場を見た。高い台の上で、一人の将軍が車椅子に座っていた。その顔は傷跡だらけで、罪人の刺青さえあった。彼の両足はまだあるように見えたが、膝の皿が抉り取られており、ぐにやりとして力なく、彼が永遠に立ち上がれないことを示していた。彼の眼差しは鋭く冷たく、手は絶えず合図を送り、三軍を完璧な機械のように操ってい

た。数万の兵士が命令に寸分違わず従い、変幻自在の陣形を組み、敵を死地に追い詰めていた。私は彼を認識した。それは、戦国時代の斉の国で、天才でありながらも悲劇的な運命を辿った軍師、孫臏であった。その映像は一瞬にして消え、目の前には再び、健康で完全な姿の諸葛亮が座っていた。

一瞬にして、私は全てを理解した。

龐涓による残酷な裏切りに耐えた孫臏の不幸な魂は、今、健やかな肉体と、かつてよりもさらに鋭い知恵をもって、再びこの世に戻って来たのだ。そして、彼が後年、戦場で四輪の車に乗る習慣は、見栄ではなく、前世の消せない印であり、軍を指揮するために車椅子に座らなければならなかった年月を思い起こさせるものであった。

私は諸葛亮を見た。私の眼差しが何かを漏らしてしまったのかもしれない。彼もまた私を見て、そして私が何を見たのかを感じ取ったようだった。彼は何も言わず、ただ静かに手を伸ばして私のために茶を注いだ。

「武当山から来られた道士殿は、さぞ多くのことを見てこられたのでしょう」と彼は独り言のようにつぶやいた。「この諸葛亮はただの農夫、穏やかに日々を過ごしたい

と願うばかり。ただ恐れるのは、木は静かならんことを欲すれども風やまず（樹欲静而風不止）ということです。」

私は彼が謙遜しているのだと分かった。「先生は木ではありませんせぬ」と私は答えた。「先生は大きな風です。ただこの風は、東に吹くべきか西に吹くべきか、待っているだけ。しかし、間もなく、別の風が、漢の真の気を宿した、たとえ弱々しくとも、先生の風と合流するためにここへやって来るのを、私は見ます。」

私は劉備の出現を予言した。

諸葛亮はそれを聞いても、喜ぶでもなく、驚くでもなかった。彼は茶碗を置き、窓の外を見やった。そこでは雲がまだゆっくりと流れていた。彼は何も言わなかったが、彼の嘆息が聞こえた。それは非常に静かで、ほとんど聞こえないほどの嘆息であったが、広大な受容を内包していた。

それは躊躇のため息ではなかった。それは、これから歩む道が茨に満ち、結末が悲劇であることを知りながらも、それを自らの使命の一部として、自らの魂が果たすべき運命の一部として受け入れた者の嘆息であった。その瞬

間、私はもはや謀略家の孔明ではなく、自らの悲劇に静かに向き合う、偉大な魂を見た。

神医華佗との出会い

臥龍との出会いの後、私は襄陽に長くは留まらなかった。私は旅を続け、東へ向かった。そこには多くの貴重な薬草で有名な山々があった。私は見たことをじっくりと考えるための、本当に静かな場所を探したかった。そしてまさにその道中で、私は別の奇遇に恵まれた。

人里離れた山の斜面で、朝霧がまだ晴れないうちに、私は白髪白髭の老人が薬籠を背負い、険しい崖を慎重に進みながら見慣れない植物の枝を摘んでいるのを見た。その姿は機敏でしっかりしており、七十代の人間とは思えなかった。私は彼を、その名声によってではなく、彼から放たれる純粋で穏やかな気によって認識した。それは神医、華佗であった。

私は邪魔をしないように近づかず、ただ近くの岩に腰を下ろし、静かに観察していた。しばらくして、彼が必要

なものを摘み終えると、振り返って私に気づいた。彼は驚くことなく、ただ優しく微笑んで近づいてきた。

「この老いばれは欲深く、天地の靈気を少しばかりいただこうとしたところ、思いがけず道友にお会いするとは」と彼は朗らかな声で言った。

「先生が天地の靈気を取られるのは、衆生を救うため。それは道に従うことであり、どこに欲深さがありましようか」と私は答えた。

私たちは共に岩の上に腰を下ろした。多くの言葉を交わすまでもなく、我々が同じ道を歩む者であり、ただその現れ方が世間で異なるだけだと感じ取ることができた。私は己の明智を求めて道を修め、彼は人を癒すために道を用いた。

私は彼の薬籠の中を見た。そこには極めて珍しい薬草があり、それらは地の気が集まる場所にしか生えないものであった。私は、彼の医術が書物や蓄積された経験だけから来るものではないと理解した。彼の医術は、本質的に一種の神通力であった。

私が彼に集中して視線を送ると、私の天目はそれを見た。彼が診断するたびに、彼の眉間から微かな光が放たれ、患者の肉体を透過し、彼が内部の各部位をはっきりと見、経絡の運行を、気血が滞る場所を、そして隠れている病の芽や腫瘍さえも見ることを助けているのが見えた。それが、世の人々が奇跡と見なす手術を彼が実行できた理由であった。そして私は、それが彼が曹操の脳内の腫瘍を見ることができた理由でもあったことを知った。それは、通常の医術では到底不可能なことであった。

「先生の医術は、神の域に達しておられますな」と私は言った。「ただ残念なことに、薬やメスでは治せない病もございます。」

華佗は静かに頷き、その視線は曹操が勢力を誇る遥か北の地へと向けられた。「その通りだ、道友よ。肉体の病は治すことができる。しかし、心の病、運命の病となると、この老いぼれの医術もまた無力だ。ある者たちは、その猜疑心自体が、脳内の腫瘍よりも大きな腫瘍となってしまう。彼らを治すには、まずその心を開かねばならぬ。しかし、それは不可能なことだ。」

一瞬の沈黙の中で、私と彼はまるで同じ光景を見ているかのようであった。私は、彼が怒りと猜疑心に満ちた曹操によって捕らえられ、投獄される光景を見た。私は、彼が暗い牢獄の中で、死を受け入れる前に、落ち着いて最後の医学書を整理している姿を見た。華佗は、自らの能力をもって、明らかにその運命を予見していた。しかし、彼の顔には少しの恐怖も恨みもなく、ただ静かな受容があるだけであった。

「人は皆、この世に生まれる時、それぞれの負債を背負ってくるものだ、道友よ」と彼は静かに言った。「この老いぼれは生涯、病を治し人を救ってきたが、この命をもって返さねばならぬ負債もある。それが天地の公正というものだ。」

私は彼に合掌し、一礼した。私は彼の医術を尊敬したが、それ以上に、天命に従うその心を尊敬した。我々は黙って別れ、それぞれが別の方向へ歩き出したが、私は、我々の魂がより高き場所で再会することを知っていた。

華佗との出会い、そして水鏡先生や諸葛亮で見たことは、私を最終的な答え、この時代の全ての悲劇に対する答えへと駆り立てた。私は山中の静かな洞窟を見つけ、瞑想に入り、その根源を徹底的に見極めようと決意した。

私の心が静まり、世俗の雑念が消え去った時、私の天目はより深い空間へと開かれた。私の意識は時を超え、過去へと遡った。四百年、それは人の一生にとっては長い時間だが、宇宙の流れの中ではほんの一瞬に過ぎない。

そして、私は見た。

私は、威風堂々とした漢の高祖、劉邦を見た。しかしその目には、生死を共にした功臣たちへの猜疑心と嫉妬が宿っていた。私は、百戦百勝の大將軍、韓信が、宮中に誘い込まれて斬首され、死ぬ前に天を仰いで恨みの言葉を叫ぶ姿を見た。「ああ、蒯徹の計を用いざりしを悔ゆ。乃ち女子に詐（あざむ）かるるとは、豈に天意に非ずや」（吾悔不用蒯徹之計，乃為兒女子所詐，豈非天哉！）

彼の怨念の気は消えることなく、凝縮し、四百年の歴史を貫いて、後に曹操という名を持つことになる子供の肉体へと入り込んだ。

私は再び、忠実な王であった彭越が、謀反の濡れ衣を着せられて極刑に処され、一族もろとも皆殺しにされるのを見た。彼と彼の一族の深い恨みもまた、黒い気と化して飛び去り、後に劉備として転生する魂を見つけた。

そして私は、別の猛将であった英布が、追い詰められて自害するのを見た。彼の怨念の気もまた消えることなく、江東の地へと向かい、孫権として転生する日を待った。

最も恐ろしい光景が最後に現れた。私は、漢の高祖、劉邦の魂が、死後、その業を返すために多くの輪廻転生を経るのを見た。そしてこの生において、彼はまさに自らの皇族に転生し、漢王朝最後の皇帝、漢の献帝となった。

この時、全てが恐ろしいほどに明らかになった。

全ては偶然ではなかった。これは、完璧に仕組まれた因果応報の清算であった。かつての負債はあまりにも大きく、今や一つの天下をもって返済しなければならなかった。無実の罪で殺された三人の功臣は今や、三つの最強勢力となって戻り、彼らを害した者の祖先が築いた基盤そのものを切り裂き、食い尽くしていた。劉備の化身である漢の献帝は、自らが殺害した者たちの子孫の手の中で傀儡となり、無力のうちに帝国が崩壊するのを見届けるという代償を払わなければならなかった。

これこそが「天命」であり、巨大で、目に見えないが、誰も逃れることのできない因果の網であった。このことを理解した時、私はもはや三国時代を英雄たちの覇権争

いとしてではなく、血塗られた悲壮な負債の返済として見るようになった。そして、曹操、劉備、孫権から、諸葛亮、周瑜、司馬懿に至るまで、その中の全ての登場人物は、ただの駒であり、四百年前にすでに仕掛けられていた因果の碁盤の上で、自らの役を演じきっていたに過ぎなかった。

世事は劇の如し

この時代全体が、業の負債を清算するための大きな劇であることを理解した私は、その後に起こる出来事を別の視点から見始めた。もはや人間の謀略、戦場での勝ち負けだけを見るのではなく、全てを仕組んでいる天上の見えざる手をも見るようになった。後世の人々が神秘的、幸運、あるいは奇跡と見なす事柄が、道を修める者の目には、非常に明確に映るようになった。

私は、劉備の馬、的盧の物語を今でも覚えている。世間では、それは主人を殺す馬であり、乗る者は必ず災いに遭うと噂されていた。劉備が荊州にいた時、蔡瑁が彼に害をなそうとし、彼は一人で馬に乗って逃げなければならなかった。目の前には幅数十丈の急流、檀溪が流れ、

後ろからは追手が迫っていた。絶体絶命の状況で、的盧は突如として驚異的な跳躍を見せ、対岸へと飛び越え、劉備を死地から救った。人々はこれを稀な幸運と見なすか、あるいは劉備が大きな福德を持っていたために難を逃れたのだと考えた。

しかし、私がその出来事を定（じょう）の中で観察した時、私は全く異なる光景を見た。

私は、絶望の中にある劉備が、馬を駆って川岸に迫るのを見た。彼はもはや逃げ道がないことを知っていた。その生死の瞬間に、彼の生存への意志が最も強く燃え上がった時、天から金色の光がまっすぐに降り注ぎ、人と馬の両方を包み込んだ。その光は暖かく、力に満ちていた。私は、それが彼を守護する天の神々からの神力の加護であることを知っていた。劉備はこの因果の劇における重要な登場人物であり、彼の役はまだ長く続く。ここで終わるはずがなかったのだ。

神力の加護の下、怯えていた的盧は突如として非常に落ち着きを取り戻した。その目は明るく輝いた。恐怖は消え去り、代わりに不思議な勇猛さが現れた。その全身の筋肉に、超自然的なエネルギーが注ぎ込まれた。その跳躍は、単なる一頭の動物の力ではなく、天意の現れであ

った。それは川を飛び越え、一枚の葉のように軽やかに、対岸に安全に着地した。それは幸運ではなく、真の天命を帯びた者、その役がまだ終わる時ではない者への、必然的な保護であった。

そして、諸葛亮の話である。先に述べたように、彼は漢の運命が尽きたこと、天命には逆らえないことをよく知っていた。ではなぜ、彼はそれでも草庵を出て、劉備に仕え、最終的な結果がないと分かっている道へと身を投じる決意をしたのか？

後世の人々は、彼の忠義心、そして「為せぬと知りて仍（なお）為す」という精神を称賛する。彼らはそれを、君主に忠誠を尽くし、国に身を捧げる大臣の最も崇高な現れと見なす。それは正しい。しかし、それは物語の表面に過ぎず、凡人が感じ、称賛できる外殻に過ぎない。

より深い次元で、私は、修煉者である諸葛亮が、この劇における自らの役を受け入れたのだと理解した。彼は結末を変えるために山を下りたのではない。彼は自らの使命を果たすために山を下りたのだ。その使命とは何か？それは、三国時代の「義」の文字をより輝かせ、豊かにすること。後世に、忠誠心、君臣の深い絆、そして最後の息まで続く献身の、不滅の模範を残すこと。彼は、漢

王朝の再興には失敗するであろうことを知っていたが、後世に残る物語、何千年後も人々が熟考するであろう教訓を創り出すことには成功するであろうことを知っていた。

彼の生涯は、劉備が三顧の礼を尽くした時から、五丈原で没するまで、まさに最も生き生きとした教訓であった。彼がいなければ、劉備の物語は、ただ仁徳はあるが才能のない皇叔の物語に過ぎなかつただろう。彼がいなければ、劉・関・張の間の「義」が輝く場はなかつただろう。天上は、この劇を完璧なものにするため、核心的な精神的価値を頂点にまで高めるために、彼のような人物を必要としていた。

諸葛亮は、その悲劇的な役を受け入れた。彼は運命に抗おうとしていたのではなく、運命に従って自らの役を演じきろうとしていたのだ。それは、偉大で、孤独な役であった。

諸葛亮にまつわる逸話

諸葛亮にまつわる神秘的な逸話もまた、当事者にとっては少しも神秘的ではなかった。後世の人々が物語を読み、劇を見る時、しばしば驚き、感嘆し、彼が天地に通じる神通力を持つ仙人であると考えた。しかし実際には、それは修煉者が心性と智慧を一定の境地にまで開き高めた時に得られる能力の運用に過ぎなかった。

例えば、「草船借箭（そうせんしゃくせん）」の話である。

人々はただ、濃霧の一夜、諸葛亮が悠々と船上で琴を弾き酒を飲みながら、曹操から十万本以上の矢を手に入れ、周瑜が彼を陥れるために仕掛けた難題を解決したという結果だけを見る。彼らはそれを絶妙な計略、並外れた大胆さと見なす。しかし彼らは知らない。諸葛亮にとって、それは大胆さではなく、確実な計算であったのだ。

その数日前、私は彼を観察していた。彼がただ長江の地形を調べ、曹操の猜疑心深い心理を分析しているだけではないことを見た。私は、彼が毎夜、静かに戸外に出て、天を仰ぎ星々を見つめ、両手で指を折り、凡人には理解できない言葉を呟いているのを見た。彼はただ通常の方法で天文学を観察していたのではなかった。彼は術数を

用い、自らの感応能力と組み合わせて、天の気の運行を正確に計算していたのだ。

彼は、三日目の夜、五更（ごこう）の頃、長江に未曾有の濃霧が発生することを確認していた。数歩先でも顔が見えないほどの濃霧だ。それが「天の時（天時）」であった。彼はまた、曹操が猜疑心深い人間であり、このような濃霧の中では水軍を出撃させる勇気はなく、ただ弓兵に矢を放たせて身を守るだろうということも知っていた。それが「人の和（人和）」——より正確に言えば、敵の心理の洞察であった。そして、彼はその川筋の地形が、船を配置し、撤退するのに有利であることも知っていた。それが「地の利（地利）」であった。

天の時、地の利、人の和という三つの要素を完全に掌握した時、矢を借りることはもはや実行の問題に過ぎなかった。それは奇跡ではなく、自然の法則を理解し、運用した結果であり、修煉者が到達しうる能力であった。凡人にとって、それは神算鬼謀（しんさんきぼう）。彼にとって、それはただ自然に従って事を行うだけであった。

赤壁の戦いの物語は、さらに劇的である。人々が最も恐れたのは、彼が七星壇を設け、三日三晩、東風を祈った

ことであった。人々は、彼が本当に風を呼び、雨を降らせ、天地を変えることができると信じていた。

しかし、真相はもっと巧妙であった。

諸葛亮は、天象を観察し、秘伝の方法で計算することによって、その年の冬至の日に陽の気が生まれ始めることを早くから知っていた。長江のような広大な水域での気の流れの交錯は、特異な地形と相まって、異常な気象現象を引き起こすだろう。つまり、通常は北風しか吹かない冬の真っ只中に、数日間、南東の風が吹くであろうことを。

彼は風を「創り出した」のではない。彼は風が来ることを「予知」しただけだ。

風を祈るための祭壇の設置は、本質的には、巧妙に仕組まれた芝居であった。それには多くの目的があった。第一に、自らの格を高め、東呉の陣営、特に周瑜に敬意を払わせ、軽んじられないようにするため。第二に、皆の目を欺き、彼が七星壇に留まる正当な理由を作り、火計が成功した直後に彼を殺害しようと常に狙っていた周瑜の監視から逃れるため。第三に、そして最も重要なのは、時間を稼ぐためであった。彼は事前に趙雲と密かに約束

し、風が吹く日に、南岸で船で彼を迎えるよう詳細に指示していた。

戦いが迫った日、そこにいた道を修める者は私だけではなかった。多くの隠棲した道士たちもまた、赤壁周辺の地域に集まっていた。我々は誰一人として約束したわけではなかったが、皆、天意による壮大な劇がまもなく上演されるを感じ取っていた。我々は丘の上や、人里離れた川岸に身を隠し、参加するためではなく、静かに観察するためであった。我々は、諸葛亮の七星壇の旗が、北西に向かってはためき始めるのを見た。我々は、周瑜の自己満足に満ちた眼差しを見た。そして我々はまた、鉄の鎖で繋がれた戦船を見つめる曹操の不安をも見た。それは、龐統が彼の頭に植え付けた、致命的な過ちであった。

そして、東風が吹き始め、最初は穏やかに、次第に強くなると、我々は全てを見た。黄蓋の火船が、曹操軍の水寨（すいさい）に向かって疾走するのを。天を焦がす炎の海が燃え上がり、悲痛な叫び声が響くのを。そして、趙雲の護衛の下、一艘の小舟が静かに川岸を離れ、周瑜が気づく前に諸葛亮を連れ去っていくのを。

赤壁の戦い全体が、人間の謀略と天上の采配との完璧な協調であった。人間は、その行動が天地によって定められた「時」と「勢」に従う時にのみ、成功することができる。諸葛亮、周瑜、龐統、黄蓋…彼らは皆、優れた役者であったが、この劇の脚本を書き、監督した真の存在は、天意そのものであった。

最後の戦い

しかし、諸葛亮もまた人間であった。人間というものは、役に入り込みすぎると、時には過ちを避けられず、世俗の闘争心に、道を修める者の静寂が打ち負かされることを避けられない。

彼の生涯を通じて、私は彼が超常的な智慧を用いて軍を指揮し、乾坤を動かすのを何度も目撃した。しかし、彼の「闘争心」が、上方谷での最後の戦いほど、明白かつ強力に現れたことは一度もなかった。

私は自らの境地から、その谷全体を一つの碁盤のように観察した。私は諸葛亮の一手一手、その全てをはっきりと見た。彼はこの罌を、恐ろしいほど完璧に準備してい

た。上方谷は死の袋小路であり、両側は切り立った崖、入り口は狭く、出口はほとんどない。彼は兵士を人夫に変装させ、毎日偽の食糧を運ばせ、わざと司馬懿の斥候に見せた。彼は、司馬懿が老獪な狐であり、疑い深く、簡単には罠にかからないことを知っていた。そのため、彼は何日も辛抱強くその芝居を演じ続けた。

そして彼は魏延を出陣させ、数合交戦した後に偽りの敗走をさせ、旗や装備を捨てて、まっすぐ上方谷へと逃げ込ませた。司馬懿は、何日も観察し、魏延が惨敗するのを見て、ついにその慎重さも貪欲さに覆い隠された。彼は、これが魏延を生け捕りにし、大手柄を立てる絶好の機会だと考えた。彼は、自分が追いかけているものが、死神の鎌そのものであることには全く気づいていなかった。

私は、司馬懿親子と魏の大軍が、意気揚々と谷に突入するのを見た。敵全軍が袋の中に入った時、諸葛亮は合図を出した。直ちに、両側の崖の上から巨大な岩や木が転がり落ち、出口を塞いだ。同時に、乾いた薪、硫黄、硝石を積んだ車が押し出され、入り口を遮断した。谷は一瞬にして、火をつける準備が整った巨大な木の棺と化した。

司馬懿は、自分が計略にはまったと気づいた時、顔面蒼白となった。彼は崖の上を見上げ、諸葛亮が悠然と四輪車に座り、羽扇を軽く振りながら、冷たい眼差しで見下ろしているのを見た。その瞬間、私は司馬懿の極度の絶望を感じ取った。生涯狩りを続けてきた老獪な狐が、今や逃げ道のない罠に陥ったのだ。

そして、火の手が上がった。

松明が投げ込まれ、乾いた薪と硝石に燃え移り、恐ろしい火の海を作り出した。魏軍の悲痛な叫び声が山々に響き渡った。真っ赤な炎が鎧をなめ、勇猛な戦士たちを生きる松明へと変えていった。私は、司馬懿親子が抱き合い、絶望して天を仰ぎ、「今日、我ら親子はここで死ぬのだ！」と泣くのを見た。

山の頂では、諸葛亮がまだそこに座り、静かに観察していた。その顔には、勝者の喜びは微塵もなかった。それは緊張しており、そこには何か非常に頑ななものがあつた。私は、この時、彼が丞相としての「鞠躬尽瘁（きっきゅうじんすい）」の役をあまりにも深く演じきっていたのだと感じ取った。彼はただ勝ちたいだけではなく、本当に司馬懿を殺し、この天変地異のような火計を用いて天意に逆らい、蜀漢のためにわずかな希望を取り戻そ

うとしていた。彼から放たれる強力で冷たい殺気、それは私が彼を観察してきた年月の中で一度も見たことのない殺気であった。

その時、天が動いた。

天命は、司馬懿がそこで死ぬことを定めていなかった。晋王朝の基盤は、この一族から築かれねばならなかった。天命はまた、蜀漢がその役を終えることも定めていた。

炎が最も激しく燃え盛っていた時、晴れ渡っていた空がにわかに暗くなった。どこからともなく黒い雲が集まり、まさに上方谷の上空に渦巻いた。風が唸りを上げ始めた。そして、突然、滝のような豪雨が降り注いだ。

雨粒は大きく、重く、火の海に直接叩きつけられ、恐ろしい「ジュージュー」という音と、立ち上る白い煙の柱を生み出した。雨は線香一本が燃え尽きるほどの時間しか続かなかったが、それはまるで神々による巨大な水桶のようであり、諸葛亮の野望に直接浴びせかけられた。火は消え、薪は濡れ、蜀軍の武器もまた無用となった。死の淵から生還した司馬懿親子は、急いで残存兵を率いて血路を開き、逃走した。

私は諸葛亮を見上げた。彼は車の上で、呆然と座っていた。羽扇はいつの間にか地面に落ちていた。彼は天を仰いだ。そのかつて鋭かった目は、今や茫然自失とし、無力感に満ちていた。そして、彼の胸から、悲痛で、辛辣なため息が漏れた。それは、数万本の矢が肉体を貫くよりも痛ましい嘆息であった。

「事を謀るは人に在り、事を成すは天に在り（謀事在人、成事在天）」と彼は呟いた。「抗うことはできぬ！」

そう言うと、彼の口から一口の鮮血が吐き出され、その衣の裾を赤く染めた。

私は、彼が理解したことを知った。その雨は偶然ではなかった。それこそが天意であり、最も厳しい警告であった。天に逆らおうとするこの行為は、たとえ役の中でも、彼の軍人としての生涯におけるあまりにも多くの殺生、特に孟獲を七度捕らえる際の火計で多くの藤甲軍を焼き殺したと相まって、彼の陰徳を著しく損なった。本質的に、彼は道を修める者であったが、その智慧と学識を用いて、常人の争いにもあまりにも深く関与し、あまりにも多くの殺業を生み出してしまった。この雨は、谷の炎を消し去っただけでなく、彼の風前の灯火であった生命の炎をも消し去ったのだ。

その結果、彼は寿命を十二年失い、その生で道を成し遂げ仙人となることはできなかった。これもまた、天が後世に残そうとした教訓であった。いかに才能があろうとも、天意に勝つことはできない。殺業は、修煉者にとってさえ、非常に恐ろしいものである。

しかし、まさにその失敗があったからこそ、諸葛亮は昇華することができた。

上方谷の戦いの後、健康を害した彼は、全ての闘争を完全に手放し、天命を受け入れた。彼の最期の日々における心境は、大きな飛躍を遂げた。闘争的な「自我」が消え去り、もはや漢王朝再興の重荷を背負おうとしなくなった時、彼の天目はかつてないほどに澄み渡った。彼は、その後の約二千年にわたる世の未来を見通すことができた。

五丈原での彼の最期の日々、その肉体が徐々に衰えていく中、私は彼を最後に一度訪れた。骨肉の身ではなく、意識の中での出会いであった。

私は、彼がもはや憂いに満ちた丞相ではなく、新たな旅立ちの準備をする魂であり、その心は明晰で、静寂に満

ちているのを見た。意識の空間では、我々に言葉は必要なかった。

「道友よ、もう見られたであろう？」彼の思念が私に伝わってきた。それは穏やかで、微塵の波もなかった。

そして私は、彼が何を言っているのかを悟った。その交感の瞬間、私は彼の前世である孫臧を再び見ただけでなく、より壮大な流れをも見た。私は、彼の魂が、渭水のほとりにいた姜子牙の時代から、戦国時代の戦場にいた孫臧、そして彼自身、蜀漢の諸葛亮へと続くのを見た。私は、これが使命を帯びた魂であり、歴史の転換期ごとに下生し、補佐役として乾坤を動かす助けとなるという、天の采配を見た。

「私は見ました」と思念で答えた。「そして、私はさらに見ます。あなたの使命はまだ終わってはいません。千年以上後、異民族の別の王朝が滅びようとする時、あなたは再び下生し、劉伯温という名を名乗り、布衣の明君を補佐して新たな基盤を築くでしょう。」

諸葛亮は、意識の中で静かに「微笑んだ」。それは、透徹した理解と受容の微笑みであった。彼は少しも驚かなかった。彼は、自ら全てを見ていたのだ。

まさにその聡明な状態の中で、この生の全ての執着を完全に手放し、過去と未来の両方を見通した時、彼は中国史上最も正確な预言書の一つである『馬前課』を書き上げた。それは謀略の産物ではなく、天機をはっきりと見た者が、別の役の準備をする前に、諸葛亮という役の使命を終えるために残した遺訓であった。

三国時代とは、結局のところ、後世の人々に「義」について、因果の複雑さについて、そして決して変わることはない一つの真理について見せるための、壮大な舞台であった。人間は非常に小さく、天意に逆らうことは難しい。ただ修煉し、天命を理解し、道に従うことこそが、最も賢明な道なのである。

* * *

第五章：エルサレム、主の足跡

今回の記憶は、私を砂塵と太陽の地へと連れ戻す。そこは信仰と懷疑が常に並行し、同じくらい強烈に存在する場所であった。それは古代ユダヤの地、まさに主イエスが現れ、福音を説いたその時代である。

その人生での私の名はシモンであった。私は学者でもなければ、権力者でもなかった。ただエルサレムに住む普通の 大工であり、家族がいて、私の生活は木材を削り、槌音と鋸の音を中心に回っていた。エルサレムでは木材が豊富ではなく、我々はしばしばガリラヤ地方から輸入された木材や、レバノンから運ばれてくる貴重な杉材を使わなければならなかった。その木々の香りは、私の生涯を通して私に付きまとい続けた。当時、私は四十五歳を過ぎており、イエス様より十五歳ほど年上であった。その歳になれば、人は十分に浮き沈みを経験しており、その頃の私の信念は、目に見え、耳に聞こえるもの、手の中の木材、そして妻と子を養うために汗水流して稼いだ金銭に置かれていた。

ある日、友人や隣人たちが、ナザレから来たイエスという人物について騒ぎ始めた。彼らはその方の奇妙な教えや、行われた奇跡について語った。初め、私はあまり気に留めなかった。自らを預言者と称する人々の話をあま

りにも多く聞きすぎていたからだ。彼らは砂漠を吹き抜ける一陣の風のように現れては消えていった。人生の半分近くを生きてきた男として、私はまだ自分の目で確かめていないことに対して、ある種の懐疑心を抱いていた。

しかし、好奇心と、親友からの誘いを断りきれない気持ち、ついに私をイエス様が説教されている場所へと足を運ばせた。それは日差しの強い午後で、群衆が丘の中腹に集まり、砂埃が舞っていた。私は遠くに立ち、腕を組み、一人の観察者という心境でいた。

その方は、王や将軍のような風貌ではなかった。その方の服装も、他の民衆と同じように質素であった。しかし、その方が声を発すると、群衆は突然静まり返った。その方の声は響き渡るものではなかったが、奇妙な力があり、一人一人の心の奥底にまで染み渡った。

その方は非常に奇妙なこと、私がこれまで生計を立てるために知っていた全ての事柄や人生の道理に反することを語られた。心の謙虚な者、貧しい者こそが幸いであり、天の国は彼らのものである、と。敵をも愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい、と。

それらの言葉は、初めは実に常識外れに聞こえたが、私の心の奥深くにある何かに触れ、私がこれまで名前をつけることさえ知らなかった問いに答えてくれた。私は周りの裕福な人々を見た。彼らは全てを持っているが、その心は常に不安であった。私は権力者たちを見た。彼らは他人に命令することはできても、自分自身の心の平穩を命じることはできなかった。イエス様の言葉は、まるで清らかな水の流れのように、長年私の心にこびりついてきた俗世の塵をゆっくりと洗い流していった。

しかし、私が本当に心服したのは、ただの説教ではなかった。それは、私がその方に従ってエリコの町を出る道中で、この目で見たことであった。

その地域では誰もが知っている物乞いがいた。彼の名はバルティマイ。彼は盲目で、毎日道端に座り、通りすぎりの人々の哀れみによって生きていた。我々の一団が通りかかった時、ざわめきを聞いたバルティマイは何事かと尋ねた。それがナザレのイエス様だと知ると、彼は叫び始めた。それは胸を張り裂くような叫び声であった。「ダビデの子、イエス様、どうか私を憐れんでください！」

群衆の中の多くの者が振り返って彼を叱りつけ、黙るように、師を煩わせるなどと言った。しかし、彼らが叱れば叱るほど、彼はさらに大声で叫んだ。彼の叫びには、暗闇に沈んだ一生の全ての絶望が込められていた。

そして、イエス様は立ち止まられた。その方は振り返り、簡単な一言を言われた。「彼をここに呼びなさい。」

人々はバルティマイを呼んだ。彼は大喜びし、上着さえも脱ぎ捨てて立ち上がり、イエス様の前に歩み出た。私は群衆の中に立ち、息を殺して見守っていた。

「私に何をしてほしいのか。」イエス様は尋ねられた。その方の声は実に穏やかであった。

「先生、目が見えるようにしてください！」バルティマイはむせび泣いた。

イエス様は彼を見つめられた。その眼差しは慈悲に満ちていた。その方は言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです！」

その方が言葉を終えた瞬間、想像を絶することが起こった。バルティマイのかつてうつろで生気のなかった目が、突然きらきらと輝きを取り戻した。彼は瞬きをし、もう

一度瞬きをした。まるで起こっていることが信じられないかのようであった。そして彼は顔を上げ、イエス様を見、我々群衆を見、青い空を見上げた。生まれて初めて、彼は光を見たのだ。

私はその時の彼の顔を決して忘れないだろう。それは絶望から極度の驚きへと変わり、そして言葉にできないほどの幸福感で溢れかえった。彼はもう叫び声を上げることはなく、笑った。輝くような笑顔で、涙が止めどなく流れた。彼はひざまずいたが、それは懇願するためではなく、感謝するためであった。そして彼は立ち上がり、自分の物乞いの場所には戻らず、静かに人々の輪に加わり、イエス様について行った。

その時の私の心臓は、戦の太鼓のように鳴り響いていた。それは、私の中の全ての懐疑心が完全に崩れ去った瞬間であった。私のような大工は、一本の木材を役に立つものにするしかできない。しかし、その方は、一つの人生に光をもたらすことができた。

今、この時代の修煉者として、私はそれが人々が通常考えるような魔法ではなかったことを理解している。全ての生命にはそれぞれの運命と業力の負債があり、それは異なる次元の神々によって公正に定められている。バル

ティマイが盲目であったこともまた偶然ではなく、彼の業を返す計画の一部であった。

主イエスが癒しを行った時、その方は他の神々の采配を破っていたわけではなかった。その方は、その負債を一方的に消すことはできないと知っておられた。代わりに、その方ははるかに偉大で悲壮なことをされた。その方は、その業力の負債を自ら引き受ける道を選ばれたのだ。

癒された一人一人、救われた一つの魂、彼らの業力は全てその方に移された。それは、自分の子供が借金まみれであるのを見て、債権者たちに「彼の全ての負債は、私が全て引き受けよう」と言う慈悲深い父親のようであった。

そして、このような巨大な業力を背負うことの代償こそが、後の受難であった。その方が十字架上で耐えなければならなかった肉体的、精神的な極度の苦痛こそ、その方が信者のために引き受けた全ての負債を、自らの生命と忍耐をもって清算する時であった。私が（シモンとして）目撃した癒しの奇跡は、その方の慈悲の「前払い」に過ぎなかった。十字架上での死こそが、その方がその慈悲の代償を支払われた時であった。

それが、その方が選ばれた救済の道、究極の犠牲の道であった。

その日から、私はもはや、触れることができるものだけを信じる大工のシモンではなかった。私はシモンとなった。群衆の中の一人の普通の弟子として、静かにその方の光に従い、一つ一つの教えに耳を傾け、この目で見た慈悲と威厳を心に刻み込んだ。私は十二使徒の中核の一人ではなかった。私は、信じる者の大海の一滴の水に過ぎなかった。しかし、その一滴の水は、大海の偉大さを目の当たりにし、もはや昔のような淀んだ水溜りに戻ることは決してできなかった。

私の人生はそれから完全に変わった。大工の仕事場はまだあり、槌音と鋸の音は毎日響いていたが、私の心はもはや木材や注文のことばかりを考えてはいなかった。機会があるたびに、私はイエス様が説教される場所を探し、静かに群衆の中に立ち、耳を傾け、熟考した。

次第に、その方の周りに小さくも固い絆で結ばれた共同体が形成されていった。我々信じる者は、あらゆる階層から来ていた。ガリラヤの素朴な漁師もいれば、社会から軽蔑されていた収税人もいた。徳の高い女性たちもいれば、私のような普通の職人もいた。我々には壮麗な教

会も神殿もなかった。我々の「教会」は、師が立ち止まって教えを説かれる場所であればどこでもよかった。丘の中腹、湖の岸边、あるいは信仰心のある誰かの家の庭であった。

我々は互いを愛し、分かち合うことを学んだ。多く持つ者は少なく持つ者を助けた。我々の誰かが困難に陥ると、残りの者たちは共に祈り、助け合った。そこには、私がこれまでどこにも感じたことのない温かさ、真の兄弟愛があった。我々は共に生き、共に希望を抱き、師が約束された天の国を共に信じた。

しかし、光に従う道は決して平坦な道ではなかった。

我々はすぐに反対に直面した。大神殿の祭司や律法学者たちは、イエス様を脅威と見なし始めた。魂の謙虚さについてのその方の教え、神は石の神殿にだけでなく、一人一人の心の中におられるという教えは、彼らの権威と地位に直接挑戦した。彼らは、その方を冒涇者、神を汚す者、神の子と自称する者と見なした。

我々、その方に従う者たちも、巻き添えを食った。かつて親しかった隣人たちが、我々を違う目で見るようになった。彼らは囁き、噂し、我々が惑わされ、邪教に従っ

ていると考えた。ある者はもはや私の木工品を買おうとしなかった。ある者は共に育った友人と縁を切った。我々は嘲笑され、排斥され、時には脅迫さえされた。

ローマ政府は、ユダヤ人の宗教論争には関心がなかったが、我々にも目を光らせ始めた。彼らは、イエス様に従う群衆が政治的な反乱に発展することを恐れた。我々の全ての活動が監視された。

今なら分かる。それらの困難は全て偶然ではなかった。それは、修煉の道を歩もうとする者たちに天が与えた試練であった。正法が伝えられる時、魔もまた妨害しに来て、人々の信仰が本当に固いかどうかを試すのである。それらの試練はふるいのようなもので、信仰の最も良い種を選び分け、本当に最後まで耐え抜くことができる者を選び出すためのものであった。

そして、最大で最も痛ましい試練がやって来た。

私はエルサレムでのあの運命の一週間を、今でも鮮明に覚えている。街中が緊迫した空気に包まれていた。師が、最も信頼していた弟子の一人、ユダに裏切られたという知らせを聞いた。そして、ゲッセマネの園で夜中に捕ら

えられたという知らせ。私の心は締め付けられるようであった。

翌日、私は群衆の中に立ち、無力にもその方が街路を連行されるのを見ていた。私が盲人を癒し、何千人もの人々をパンで満腹にさせるのを見たその方が、今や茨の冠をかぶせられ、打たれ、侮辱されていた。ほんの数日前までその方を称賛していた人々が、今やその方を十字架につけろと叫んでいるのを私は見た。

そして私はそこにいた。ゴルゴタの丘の上で、遠くから、全てを目撃していた。

私は、彼らがその方の手足に無骨な鉄釘を打ち込むのを見た。彼らが十字架を立てるのを見た。その方が天と地の間に吊るされ、血と汗がその体に流れ落ちるのを見た。その時の私の痛みと悲しみは、言葉では言い表せないほどであった。私の信仰は、極限まで試された。なぜ、なぜ全能の神が、これほど悲劇的で屈辱的な結末を迎えなければならないのか？一瞬、懐疑心が再び戻り、私の心を蝕んだ。

しかし、その時、その方が息を引き取る前の最後の言葉を聞いた。「父よ、わが霊を御手にゆだねます。」

その言葉の中には、一かけらの恨みもなく、ただ絶対的な受容と平安があった。そしてその瞬間、私はふと理解した。これは失敗ではない。これは完遂である。これこそが、私が教えられてきたが、真に理解したことのなかった、究極の犠牲であった。その方は、ご自身の使命を果たしておられたのだ。

師が亡くなられた後、恐怖が我々の小さな共同体を覆った。我々はもはや公に集まることを恐れ、ただ閉ざされた家の内で密かに会い、ささやきながら祈り、互いに慰め合った。

すると、我々の中に、暗夜の稲妻のように一つの知らせが広まった。師は復活された！マグダラのマリアと数人の女性たちが墓を訪れると、墓は空であった。そして使徒たちもまた、その方にお会いしたのだ。

初めは、信じられなかった。打ち碎かれた魂を慰めるための作り話ではないかと恐れた。しかし、その信念は日増しに強まり、人から人へと広がっていった。それは証拠によるものではなく、奇妙な内なる力によるものであった。未曾有の喜びと力が、我々一人一人の心に湧き上がった。我々は、師が死をも打ち負かされたことを理解した。

まさにその復活への信仰が、我々を変えた。恐怖は勇気に変わった。我々は再び集まり始め、より大胆に、何が起こったのかを分かち合うようになった。

そしてその時、迫害の鎌が本当に振り下ろされた。

ある晩、私と十数人の者たちが友人の家で集まっていると、ローマの兵士が押し入ってきた。彼らは我々全員を捕らえた。多くの質問もなく、長い裁判もなかった。我々はイエスの「邪教」に従い、公の秩序を乱したとして告発された。

彼らが私に手錠をかけた時、私はもはや恐怖を感じなかった。私の心は不思議なほど穏やかであった。十字架につけられた師の姿と、その方の復活の知らせが、私の心に浮かび続けた。私は、自分が正しい道を選んだことを知っていた。

私は兄弟たちと共に、暗く湿った牢獄に放り込まれた。空気は悪臭と絶望で満ちていた。しかし奇妙なことに、我々の誰も泣き言を言ったり、不平を言ったりはしなかった。我々は黙って隣り合って座り、時折、覚えている師の教えを静かに唱えた。牢獄の闇の中で、奇妙な平安が我々を包んだ。

彼らは我々を拷問したり、誘惑したりはしなかった。この逮捕は、我々の運動を芽のうちに摘み取るための、見せしめの行為であったようだ。彼らは、迅速かつ決定的な処罰を望んでいた。

翌日、一人の看守が私の独房の扉を開けに来た。彼は何も言わず、ただ私についてくるよう合図した。私は自分の時が来たことを知っていた。私は最後に兄弟たちを見た。彼らは私を見たが、その眼差しには同情はなく、ただ共感と静かな励ましがあった。私は彼らに頷き、兵士に続いて毅然と歩き出した。

彼は私を、牢獄の裏手にある小さな中庭へと連れて行った。そこには彼と、氷のように冷たい顔をした、幅広の剣を手にした死刑執行人がいるだけだった。私は自分が斬首されることを理解した。

看守は私に最後の質問をした。「ナザレのイエスへの信仰を捨てるか？もしそうなら、お前は自由だ。」

私は彼の目をまっすぐに見つめた。十字架上の師の姿、初めて光を見たバルティマイの顔、何千人もの人々のために増やされたパンの数々…その全てが、映画のように

私の心の中を駆け巡った。私は見た、信じた、そして真実を感じた。どうしてそれを捨てることができようか？

私は首を横に振り、私の唇に穏やかな笑みが浮かんだ。

その笑みは、挑戦や軽蔑ではなかった。それは平安であった。それは受容であった。それは、間もなく家に帰り、もはや苦しみも涙もない場所で、自分の師に再会することを知っている者の喜びであった。それは、最後まで信仰を完全に守り通した、一人の普通の弟子の円満成就であった。

看守は私の笑みを見て、眉をひそめ、理解に苦しむ様子であった。彼は死刑執行人に合図を送った。

その人生での私の最後の感覚は、目の前で閃く冷たい光と、首筋への鋭い痛みであった。

そして、全てが闇に沈んだ。

しかし、それは終わりの闇ではなかった。その直後、私の魂は抜け出し、軽やかになった。私は自分の肉体が倒れるのを見、そして目の前に輝く光の道が開かれるのを見た。私は、自分が正しい選択をしたことを知っていた。

エルサレムの大工シモンとしての人生は、私に信仰についての計り知れない教訓を教えてくれた。信仰は、聖人や非凡な人々だけのものではない。それは、最も普通の人間の心にも芽生えることができ、一度根を下ろせば、その人に死でさえも笑顔で向き合う力を与えることができる。

そして私はまた、どんな修煉の道も、常に試練と検証を伴うことを理解した。偽りの中で生きるか、真理のために死ぬかの選択は、歴史上の多くの修煉者が直面しなければならなかった試練である。その選択が、最終的に、彼らの魂がどこへ向かうかを決定するのである。

* * *

第六章：ピラミッドのこだま

(少年リバーは私の向かいに座り、その澄んだ瞳は遥か
彼方を見つめている。まるで、彼にしか見えない古いフ

イルムを眺めているかのようだ。少年の声は低くなり、その年齢にはそぐわない荘厳さを帯びていた。)

...

今回、記憶は私をさらに遠い昔の時代へと連れ戻す。おそらく、皆さんの時間の数え方で言えば、約八千万年前に。それは、地球が今とは全く異なる姿をしていた世界、巨人たちの世界であった...

その人生で、私はソロンという名の将軍であった。ソロン、あるいは中天国、モナ、カンラといった、これから私が語る名前は、現代の言語で見つけられる最も近い音訳に過ぎない。我々の時代の言語は全く異なり、もっと単純で直接的であり、文字よりも音のエネルギーを多く含んでいた。

世界と人々

その頃の我々の世界は、雄大な絵巻物のようであった。我々人間、つまり巨人たちは、平均身長が五メートルを超えていた。我々の体は頑健であったが、その魂は非常に純粋で素朴であった。我々は自然と調和して生きていた。皆さんが今日では想像もつかないような自然と。恐竜は怪物ではなく、仲間であった。大きくて温和な翼竜は、我々が都市間を移動するための乗り物として飼いならされていた。他の巨大な草食恐竜は、その比類なき力で、我々が建築工事で重い資材を引くのを手伝ってくれた。

我々の社会は非常に調和がとれ、平和であった。誰もが神仏に対して深い信仰心を持っていた。私の王国は中天国と呼ばれ、マラという名の若く賢明で慈悲深い王によって治められていた。

ソロンの役割

その平和な時代、私は王室警備隊長であった。民は非常に素朴で、大きな争いが稀であったため、国内での私の仕事はかなり暇であった。しかし、中天国の軍隊は常に

精鋭として訓練されていた。我々はその精鋭さを侵略に用いるのではなく、威徳を示すために用いた。

ある時、隣国が敵意を示そうとしたことを覚えている。マラ王とモナ王女が共に幼い頃から仏法を修煉する者であり、非凡な気品と威徳を身にまとっていることは誰もが知っていた。やや意外な決定であったが、兄妹は自ら軍隊を率いて国境地帯へと赴いた。

我々の軍隊が現れると、その強大さと規律は敵を恐怖に陥れた。しかし、彼らの戦意を真に打ち砕いたのは、マラ王の威風であった。王は戦車に座り、一言も発する必要はなかったが、真の修煉者であり帝王である者から放たれる荘厳で正大な気は天を衝き、敵を小さく感じさせ、対抗しようという考えすら抱かせなかった。モナ王女の実在は、その俗世離れした美しさと穏やかな気品で、我々の軍にさらなる神聖さと正義を加えた。

かの王は、その天を衝く威風に直面し、完全に屈服した。彼は自ら軍の撤退を命じ、急いで使者を送って和を請うた。それが、我々が平和を維持する方法であった。剣や刃によってではなく、指導者たちの威徳そのものによって。

神聖なる建造

その人生で、私は壮大なピラミッドの建造を目撃した。それは陵墓ではなかった。断じて違う。我々の当時の認識では、この建造物には神聖な使命があった。それは、一体の大仏を崇めるためのものであった。また、神仏と繋がるための門であり、未来への歴史の証人でもあった。

この壮大な建造物の設計は、人間の知恵によって考え出されたものではなかった。私は、王国の最も才能ある「建築家」たちが、夢の中や深い瞑想状態で、神仏から直接的な示唆や指示を受けていたことを知っている。その数字、比率、内部の配置…その全てに天機が隠されていた。その指示が具体的にどのようなものであったかは、私の立場の者でさえ知ることは許されなかった。私と警備隊の任務は、ただその神聖な過程が絶対的な安全の下で進められることを保証することだけであった。

王室警備隊長の立場から、私はその全過程を目撃し、守護することができた。

工事のための労働者の選抜は、単なる体力に基づいてはいなかった。中天国全土に勅令が出され、未婚でたくましい若者のみが募集された。そして何よりも重要なのは、優れた道徳的品性を持ち、神仏に対して敬虔な心を持つことであった。何万人もの若者がこぞって都に集まり、塔の建設に貢献できることを生涯最大の名誉と考えた。しかし、直接建設に選ばれたのは千人近くに限定され、残りの者たちは主に、要求に応じて石を切り出し、それを現場に運ぶ作業に従事した。

その最初のピラミッドの建設期間中、王国全体がまるで一つの心臓のように鼓動していた。マラ王は工事の指揮に全力を注いだ。一方、王妃は王のそばにはおらず、毎日、誠心誠意仏に礼拝し、工事の順調な進行と国の泰平、民の安寧を祈っていた。王侯貴族や全国民もその模範に倣った。当時の中天国の雰囲気は、この上なく純粹であった。我々の民は非常に素朴で、男性は優雅で礼儀正しく、女性は徳高く淑やかであった。争いはなく、ただ崇高な目標に向かって心を一つにしていた。

そして最も驚くべきは、我々の建設方法であった。塔の建設は完全に人力で行われた。今日の計算で二、三トンにもなる大きな石塊も、重荷ではなかった。私は、四人

か六人の屈強な男たちが、肩を並べ、そのような岩をいともたやすく、リズミカルに持ち上げる姿をはっきりと覚えている。彼らは複雑なてこを使うのではなく、協力する力と、ある種の精神的な力を用いていた。

彼らの足元には、近くの山にしか生えない特殊な草で、非常に巧みに、そして固く編まれた特別な靴があった。この草履は奇妙な粘着力を持っていた。彼らが重い石塊をピラミッドの急な階段を運ぶ時、その足取りは非常に安定していた。彼らの多くが語ったところによると、一歩踏み出すごとに、まるで目に見えない力が足を優しく支え、足取りが不思議なほど軽やかになる感じがしたという。彼らはこの現象を「雲を踏む足」と呼び、誰もがそれは敬虔な心を持つ者たちを神々が助けているのだと信じていた。

現場の雰囲気は、決して重苦しく、疲れるものではなかった。各地から最も才能ある音楽家や歌手が集まってきた。彼らはここを、最高の楽曲や歌を創作するための尽きることのないインスピレーションの源と見なした。そして、彼らの作品における最も重要で神聖なテーマは、神仏の偉大さと慈悲を讃えることであり、その次に、天

意に従ってこの建造物を創造した王と民の誠意を讃えることであった。

彼らは歌うだけでなく、息をのむほど美しい舞踊も披露した。その舞は、しなやかで高尚でありながら、力強さと壮麗さをも秘めていた。音楽は、大編成のオーケストラの壮大さと、個々の楽器の優雅で繊細な響きとが調和していた。

（少年はふと微笑んだ。その笑みはどこか遠く、それでいて親しみ深いものであった。）

それらの光景を思い出すと、この人生でのある映像が鮮明に浮かび上がってきます。去年、両親が私を神韻（シェンユン）芸術団の公演に連れて行ってくれました。この芸術団がニューヨークに本部を置いていることは知っていますが、彼らは世界中を巡業しており、その日、私たちは彼らの公演を見るためにロサンゼルスへ行きました。舞台の幕が上がった瞬間から、私は言葉にできないほどの懐かしさを感じました。衣装から、舞踊、そして音楽の響きに至るまで、全てが、その時にはまだ言葉にできなかった深い記憶を私に呼び起こしたのです。今、私には分かります。巨人の時代に中天国で見た舞踊や歌は、今日の神韻芸術団が披露しているものと、同じ風格、

同じ精神を持っていました。どうやら、真に神から伝わった文化と呼ばれるものは、何百万年経とうとも、共通の源、共通の魂を持っているようです。

(少年の声は、回想の流れに戻る。)

休憩時間になると、給仕たちが甘く熟した果物の籠と、山の頂から汲んできた冷たい湧き水を丁寧に運んできた。そしてまた、清らかな歌声が響き渡った。歌声は風に溶け込み、あらゆる疲れを吹き飛ばし、皆の心を楽しく、高揚させた。

夜、一日の労働の後、騒がしい宴会はなかった。何万人もの労働者たちが再び共に座り、静寂の中で座禅を組んだ。彼らは約一時間、心を静め、仏の御名を心の中で唱え、雑念を洗い流し、心身を常に清らかに保った。

最後の石が運び上げられた瞬間を、私は決して忘れないだろう。それは、完璧に磨き上げられた、尖った頂きの石であった。当時まだ非常に若かったマラ王自らが、王衣を脱ぎ、最も屈強な四人の兵士と共に、その石をピラミッドの最高点まで自らの手で運び上げた。塔の麓では、何万人もの人々が息をのんで見守っていた。石が完璧に置かれた時、人々の海は一斉に静かに身をかがめて礼拝

した。歓声は一つもなく、ただ神仏に捧げられる絶対的な敬虔な心があるだけであった。

（少年リバーは少し間を置き、その目は遥か彼方を見つめ、そして現代の語り手として話を続けた。）

現在、天目を用いて見ると、私がある時建設を目撃した建造物は、今日のギザにある三つの偉大な建造物の中心に位置する、二番目に大きなピラミッドであることが分かる。大きさでは二番目であるが、それはその全体計画の中で最初に建設された建造物であった。

また、残りのピラミッドは、私ソロンがこの世を去った後に建設されたことも見える。各建造物は約十年おきに着工された。おそらく、最初に建設されたピラミッドであったため、最も純粋な心と高い結束力をもって建てられたからであろう、今日に至るまで、その頂上部分は比較的に原形を保っており、忘れ去られた黄金時代の物言わぬ証人となっている。

今振り返ると、その複合体全体が、非常に大きな目的をもって、以前から神によって計画されていたことが分かる。後に建てられた最大のピラミッドは、別の、無限の慈悲を象徴する大仏を祀るためのものであった。そして、

最も小さなピラミッドは、威厳を象徴する仏を祀るために捧げられた。

そして、その神聖な複合体の前方を守っているのが、スフィンクス像である。それは一人の王の姿ではなく、天界の武神の姿であり、ピラミッドとこの聖地を守護し、あらゆる邪悪な魔物から防ぐ任務を負っていた。

天の定めた縁と守護の使命

ピラミッドの建設が終わった時、私ソロンの人生もまた、運命的な岐路に立った。

マラ王にはモナという妹がいた。彼らの両親は幼い頃に亡くなったため、マラ王は兄であると同時に、父親のようでもあり、彼女を心から愛し、守っていた。今、モナ王女は結婚適齢期を迎えていた。彼女は、花々をも傾かせるほどの清らかな美しさを持つだけでなく、さらに重要なことに、生まれつき慈悲深く、徳の高い心を持っていた。彼女の名声は中天国だけでなく、近隣の王国にも広まっていた。

西には、西極国という強力な王国があり、ダラックという名の若い王が治めていた。ダラック王もまた慈悲深く、才能のある人物で、常に平和で繁栄した国を築きたいと願っていた。往来する使者たちは、最も才能ある画家たちが描いた肖像画を持参していた。ダラック王がモナ王女の肖像画を感嘆の眼差しで見た時、そしてモナ王女がダラック王の姿を見た時、二人は即座に深い繋がりを感じた。彼らは互いの外見に惹かれただけでなく、まるで筆致を通して、相手の魂と徳をも見抜いたかのようであった。

彼らの縁は、単なる政略的な取り決めではなく、誠実な好意から生まれた二つの慈悲深い心の調和であった。

モナ王女とダラック王の結婚は、速やかに執り行われた。それは重大な出来事であり、両王国に喜びと、持続的な平和への希望をもたらした。中天国と西極国は、共に祝祭に沸いた。私は今でも、豪華な王衣をまとったモナ王女の姿を覚えている。その顔には幸福が輝いていたが、同時に、愛する兄と故郷を間もなく離れることへの一抹の悲しみも浮かんでいた。

王女が出発する前日、マラ王は私を宮殿に内々に呼ばれた。彼は私を、信頼と厳格さが入り混じった、兄としての愛情に満ちた眼差しで見た。彼は言った。

「ソロンよ、将軍たちの中で、そなたを最も忠誠心と勇気において信頼している。モナは私の唯一の妹であり、中天国の最も貴重な宝石だ。今、彼女は遠い地で輝くことになる。私はそなたに、この王宮を守ることよりも重要な使命を与える。精鋭部隊を率いて王女を西極国まで護衛し、そこで王妃の護衛隊の指揮官として留まれ。そなたの命をかけて、彼女を守るのだ。」

私はひざまずき、深く頭を下げて命令を受けた。私は、これが単なる命令ではなく、神聖な託付であり、兄が妹の守護者に寄せる信頼の証であることを理解した。

戦争、犠牲、そして感化

西極国での私の生活は、数年間、平穩に過ぎていった。ダラック王とモナ王妃は深く愛し合い、共に国を治めていた。しかし、やがて北から戦乱が起こった。

地北国は、カンラという名の好戦的で残忍な王に率いられ、突如として侵略を開始した。彼らは荒れ狂う洪水のように押し寄せ、城砦を破壊し、略奪と殺戮を繰り返した。カンラの最終目標は、西極国の首都であった。

ダラック王は、一国の君主としての勇気をもって、自ら軍を率いて国を守るために出陣した。最初の数回の戦闘では、両軍の力は拮抗していた。ダラック王の指揮下にある西極国の軍は、粘り強く戦い、敵の多くの攻撃を退けた。

しかし、カンラ王は残忍であるだけでなく、非常に狡猾で抜け目のない男であった。力づくでは速やかに勝てないと見ると、彼は悪辣な計略を巡らせた。彼は軍に敗走を装わせ、食糧を置き去りにして、陰しい山峡へと撤退させた。ダラック王は、侵略軍を殲滅したいという焦りと、いくつかの勝利の後の油断から、それが罠であることに気づかなかった。彼は軍を率いて追撃し、全軍が峡谷の奥深くまで進んだ時、カンラの軍が両側の山腹から奇襲をかけた。

その絶望的な戦いの中で、ダラック王は最後の息まで戦い、敵の包囲の中で英雄的な死を遂げた。

その知らせは、青天の霹靂のように都に届いた。凶報を聞いたモナ王妃は、打ちのめされた。彼女は自室に閉じこもり、二日二晩、愛する夫のために泣き続けた。彼女の悲痛で哀れな泣き声は、もともと悲しみに包まれていた王宮を、さらに陰鬱なものにした。

しかし、その二日後、王妃は泣くのをやめた。彼女は部屋から出てきた。その顔にはまだ深い悲しみの面影があったが、そこには不思議なほどの落ち着きが宿っていた。まるで、彼女は自らの痛みを受け入れ、それをある種の内的力へと昇華させたかのようであった。

その間、都は崩壊し始めていた。カンラの軍が都に迫っているという知らせが広まると、混乱は頂点に達した。平素は忠誠を声高に叫んでいた多くの文官や武将たちが、今や真っ先に財産をまとめ、すべてを置き去りにして夜逃げする者たちとなっていた。

わずかに廉恥心を持ち合わせた数人の大臣が宮殿に駆け込み、その時すでに完全に落ち着きを取り戻していたモナ王妃の前にひざまずき、懇願した。「王妃様、大勢は決しました！どうか秘密の道からここをお発ちになり、御身の安全を確保してください！敵はもうすぐそこです。ここに留まれば死ぬだけですぞ！」

モナ王妃は彼らを見つめた。その眼差しは静かであったが、力に満ちていた。彼女はただ、断固として首を横に振るだけで答えた。彼女はどこへも行かないつもりであった。

臆病者たちが逃げ出す中、私は王宮前の大広場で、別の悲壮な光景が繰り広げられているのを見た。西極国の忠実な将軍たち、逃げることを拒んだ者たちが、残された兵士たちを集めていた。彼らの兵力は千人余りしか残っておらず、その顔には皆、決死の覚悟が刻まれていた。彼らは、最後の息まで都を守るために戦うつもりであった。

私は振り返り、王妃がおられる主殿へと続く階段の方を見た。私と共に中天国から来た護衛隊の仲間は、もはや十人にも満たなかった。我々は互いに言葉を交わす必要はなかった。ただ目を見交わすだけで十分であった。我々の任務は、都全体を守ることではなかった。我々の使命は、ここ、この階段で、王妃のための最後の盾となることであった。

かつてマラ王に誓った約束が、私の心に響き渡った。王妃がおられる場所、そこが我々の戦場であった。

そして、彼女が最後の戦いに臨むために姿を現した時、私ソロン、生涯を剣と刃に捧げた武将は、再び彼女の変化に息をのんだ。

王妃の気品全体が、まるで昇華されたかのようであった。ここ数日の落ち着きは、今や荘厳さと無限の慈悲へと変わっていた。彼女の目は水晶のように澄み、奇妙なほどに輝き、私がこれまで誰にも見たことのない深い博愛の光を放っていた。彼女の美しさはかつてないほどに輝きを増したが、それは俗世の美しさではなく、俗世を超越し、神聖で、玉のように透明な美しさであった。まるで見えない光輪が彼女の体から放たれているかのようで、見る者は誰も、思わず敬虔な念を抱かざるを得なかった。

彼女が歩みを進めると、その足取りはしっかりとしており、優雅であった。彼女はもはや、危険に直面した亡国の王妃ではなく、まるで俗世を歩む神、あるいは仙女のようであった。私と、大殿にいた全ての者は、息をのんで呆然としていた。我々は、何か非常に神聖なことが起こったのだと悟った。

私の目の前にいたのは、もはや苦悩するモナ王妃ではなく、慈悲深く、同時に荘厳な、神聖な姿、俗世に現れた菩薩であった。

敵の雄叫びが、すぐそこまで迫っていた。時は来た。王宮へと続く全ての道で、大きな戦いが勃発した。私と私の小さな護衛隊は、主殿の正門前で、盤石のように揺るぎなく立っていた。我々はカンラの全軍と対峙していたわけではなかったが、彼の最も精鋭な先遣隊が、王妃を生け捕りにするためにここに突入しようとしていた。

我々は獅子のように戦い、自らの体で、小さくとも貫くことのできない鋼の壁を築いた。一人が倒れれば、別の者がその穴を埋めた。血が階段を赤く染めた。しかし、彼らはあまりにも数が多かった。私は、槍が鎧を貫いた時、胸に鋭い痛みを感じた。私は倒れた、王宮のまさに敷居の上で。目の前の全てがぼやけていった。

しかし、やがて、私は自分が軽くなったのを感じた。私の魂は肉体を離れ、すぐ近くを漂っていた。私はもはや痛みを感じず、ただ不思議な平安があった。私は、残忍な征服者であるカンラ王が、私の動かぬ体を一瞥もせずに踏み越えていくのを見た。直ちに、本能的な衝動にか

られるように、私の魂は彼を追い、大きな扉を通り抜けて宮殿の奥深くへと飛んでいった。

そしてそこで、私は最後の光景を見た。血に染まった剣を手にしたカンラ王が、モナ王妃が待つ大殿へと猛々しく突入していくところであった。

彼は征服者であり、恐怖、涙、懇願を見ることに慣れていた。しかし、モナ王妃に直面した時、彼は息をのみ、立ち止まった。彼の顔から全ての獰猛さが消え去り、代わりに圧倒されたような表情、少しの戸惑い、そして敬虔な恐れさえ浮かんでいた。彼はこれほどの美しさ、これほどの気品を、これまで見たことがなかった。彼は身動きもせず立ち尽くし、自分がここへ来た目的さえ忘れてしまったかのようであった。

張り詰めた沈黙の中、モナ王妃の声が響いた。その声は少しも震えず、恨みもなく、山中の静寂な寺院の鐘の音のように、清らかで、穏やかであった。

「国王は南へ一直線に来られました。私は、あなた方の軍が何をしたかを聞いております。お尋ねしたいのですが、あなたはまだ、何をなさるおつもりですか？」

その単純な問いは、モナの莊嚴で慈悲深い風格と共に、カンラの魂に残っていたわずかな良心を直撃した。彼は突然、手に持った剣が非常に重く感じられ、自分が犯した罪が鮮明に蘇ってきた。彼は戸惑い、どもりながら答えた。その声にはもはや傲慢さはなかった。

「私の軍が、民衆に二度と危害を加えないことを保証する。私は、王都の安全を確保したい。」

そう言うと、カンラ王は、自らの言葉を証明するかのように、振り返り、全軍に都からの撤退を厳かに命じた。

侵略軍は、なぜ自分たちのカンラ王がそのような決定を下したのか理解できず、呆然としていたが、それでも命令に従い、静かに去っていった。殺戮は終わった。それは、より強力な軍隊によってではなく、無限の慈悲と神聖な威厳が一体となった一人の女性の力によってであった。

私ソロンの魂は、全てを目撃した。完全な充足感と平安が、私を包み込んだ。私は、マラ王への約束を果たした。私は王妃を守った。自らの命をかけてだけでなく、いかなる剣よりも偉大な力をも目の当たりにすることができ

た。満ち足りた笑みを浮かべ、私の魂はゆっくりと消えていき、一人の将軍としての生を終えた。

(少年リバーは、物語を終えた後、しばらくの間、黙り込んでいた。彼はまだ、その瞬間の充足感と悲壮さに浸っているかのようであった。やがて、彼はそっと息を吐き、その眼差しは現実に戻り、私を見て続けた。)

過去からのこだま

ソロンの人生は短かったが、私に忠誠と犠牲についての深い教訓を教えてくれた。彼は自らの約束を果たすために生き、そして死んだ。しかし、私の心に深く刻み込まれ、今なお私を揺さぶるのは、モナ王妃の力であった。その力は権力や軍隊から来たものではなく、逆境の中で昇華された慈悲から来たものであった。それは、暴力と憎しみさえも感化することができた。

しかし、物語はそこで終わらない。

天目をもって見ると、その後の巨人の文明もまた、宇宙の成住壊滅の法則から逃れることはできなかったことが

分かる。中天国におけるマラ王の時代から約十五代後の王の時、最後の一人の王が墮落し、もはや神仏を信じず、神々を冒瀆する行為さえするようになった。そして、罰として、あるいはむしろ終わりの前兆として、ある夜、ピラミッドと同時期に創造された非常に壮大な大仏像が、跡形もなく消え去った。神仏は、自ら信仰を失った民族をもはや守護しなくなったのだ。その後まもなく、一つの黄金時代全体が、恐ろしい地殻変動によって歴史から消し去られた。

壮大なピラミッドとスフィンクス像は、時の試練に耐え、今なおそこに立っている。しかし、後の文明は、その本来の神聖な目的を理解できなくなったため、自分たちの意のままに勝手に利用した。特に、古代エジプトのファラオたちである。彼らは、自らのミイラをその中に納めることを遺言し、元来は神殿であり、神仏と繋がる門であった場所を、俗人のための墓へと変えてしまった。

この行為は、ピラミッドの神聖さを汚した。そして私は、それらのファラオの魂が、この冒瀆の罪のために、非常に厳しい罰を受け、死後、地獄の奥深い層へと落とされたのを見る。

したがって、我々が今日見るものは、ただの物言わぬ建造物である。それらは、人と神がまだ交感していた時代の輝かしい記憶を内に秘め、衰退した文明の悲しみをまとい、そして何代にもわたる誤解と冒涇の厚い塵をかぶっている。それらは、遥かな過去からのこだまのように、今なおそこに立ち、いつの日か人々がその真の意味を再び理解する日を待っている。

* * *

第七章：アトランティスの黄昏

(リバーはしばらくの間、黙って座っている。まるで、複雑で重苦しい記憶を整理しようとしているかのようだ。やがて、少年は口を開いた。その声にはどこか遠くを見つめるような響きがあり、懐かしさと、そして一抹の哀愁が漂っていた。)

今回の記憶は、その名が今日まで皆さんの伝説の中に響き渡る地へと私を連れ戻す――アトランティスだ。しかし、私が生きていた時代のアトランティスは、もはや栄華を極める帝国ではなかった。それは美しい世界でありながら、ひび割れが生じ始め、長く苦しい黄昏が近づいていることを告げていた。

私がかつて生きていたアトランティス、大神官リグスとしての人生では、常に一つの統一体であったわけではない。現存する古代の歴史書には、この大陸が多くの王国に分かれていた時代があったと記されている。それぞれが独自の特色を持ち、ある時は平和的に交流し、またある時は対立した。政治体制も同様で、王が最高権力者であった時代もあれば、宗教評議会が最も権力を持つ場所であった時代もあった。多くの変遷と先人たちの多大な努力を経て、アトランティスは我々の時代のように、一

つの最高評議会の下で徐々に一つにまとまっていったのだ。しかし、その統一の中にあっても、かつての分裂時代の名残が、どこか漂っているかのようであった。

アトランティスの衰退は、突発的な出来事ではなかった。それは一つの過程であり、何世代にもわたってゆっくりと染み渡る毒薬のようなものであった。そして私、リグスは、その過程の重要な段階にいた。

我々の地が受けた恩恵を皆さんに説明するのは、実に難しい。アトランティスは単なる大陸ではなく、この惑星のエネルギーの中心であり、神仏から特別に祝福され、神力が豊かに注がれた場所であった。この神聖なエネルギーのおかげで、ここにいる全ての生命は卓越した発展を遂げた。我々アトランティス人は元々高い知恵を持っていたが、さらに明晰で、健康になり、他の民族よりもはるかに長い寿命を持つようになった。木々は驚くほど青々と茂り、果実は豊かに実り、純粋なエネルギーを内に秘めていた。動物たちでさえ、他の大陸の同種よりも大きく、頑健であった。同じ品種の馬でも、アトランティスの地で育った馬は一・五倍も大きくなり、そのたてがみは艶やかで、力も知恵も他の大陸の仲間をはるかに凌駕していた。

まさにこの恩恵のために、我々の祖先は神仏に対して深い信仰心と敬意を抱き、それを全ての繁栄の源と見なしていた。我々の科学もそこから生まれた。我々は機械工学や燃料を燃やす道を選ばなかった。その代わりに、我々は宇宙に遍在するエネルギーそのものを理解し、活用する方法を学んだ。我々は高度なクリスタル技術を習得し、それを用いて都市全体にクリーンなエネルギーを供給し、空中を軽やかに滑る乗り物を動かし、病を癒し、遠距離通信を行った…全てが調和しており、人間と神との繋がりを示していた。当時のアトランティス社会は、最高評議会とエリート貴族、私のような精神的役割を担う大神官から、「クリスタルのマスター」や裕福な商人、そして職人や労働者まで、明確に階層化されていた。誰もが清らかで豊かな環境の恩恵を受けていた。

しかしやがて、色褪せが始まった。後の世代が、全てが揃った状態で生まれてくると、技術による繁栄と便利さは当たり前のこととなった。神仏に対する当初の感謝と敬意は次第に冷めていった。一部の民衆とエリート層は、自分たちの優越性をアトランティス人自身の知恵によるものと見なし始め、もはや高次元からの恩寵とは考えなくなった。それこそが、我々の文明を内側から蝕んでいった傲慢の芽であった。

彼らは知識と技術を濫用し始めた。クリスタルエネルギーを生活に調和的に役立てる代わりに、それをますます巧妙な享楽のための設備、支配のための道具、そして強力な兵器を創り出すために利用しようとした。最高評議会内部でさえ、分裂が水面下で現れ始めた。一方には、神への敬意と伝統的な道徳を維持しようと努める我々の派閥がいた。もう一方には、エネルギー技術の達人であるマグナスが率いる、ますます「唯物論的」で実用主義的な傾向を強める派閥があった。彼らは、アトランティス人こそが自らの運命の支配者であると信じていた。

大神官として、私はこの思想の変化がもたらす致命的な危険性を認識していた。アトランティスが神仏への敬意と繋がりを失えば、彼らは自らの力の源泉と保護そのものを失うことになるだろうと理解していた。恩寵は与えられることもあれば、取り上げられることもある。私は評議会でも頻繁に声を上げ、精神的な原則から逸脱し、傲慢と物質的な享楽に溺れることは神を冒瀆し、最終的にはこの地がもはや祝福されなくなることにつながると警告した。私は主クリスタルのエネルギーを浄化するための儀式を執り行い、より高次の精神的な力と再び繋がろうと努め、若い世代に感謝の心を教え伝えた。

しかし、私の警告はマグナスの派閥によって退けられた。彼らは、「神仏」とは抽象的な概念に過ぎず、人間の能力ほど重要ではないと主張した。真の力は科学者の手の中に、エネルギー・クリスタルの中に、彼らが作り出せる技術の中にあると。彼らは最新鋭のエネルギー兵器を開発して地位と権力を確立したいと望み、アトランティス人は運命を完全に支配できると密かに宣伝した。それは究極の傲慢であり、自らの根源そのものの否定であった。

そして私、その精神的な威信と影響力を持つ私は、彼らの道における最大の障害となった。

彼らは私に正面から対決する勇氣はなく、より巧妙で残酷な方法を選んだ。彼らは私を失脚させるための秘密のキャンペーンを開始した。暴力によってではなく、私を内側から弱らせることによって。

私は自分の健康が奇妙な形で衰えていくのを感じ始めた。精神は以前ほど明晰ではなく、体は常に疲れ、集中力も低下した。儀式を執り行なう時、私は自分の精神的な繋がりが著しく弱まっているのを感じ、祈りはもはや以前のような力を持っていないように思えた。初めは、それは加齢のせい、あるいはアトランティス全体の「共業」

が衰退し、私に影響を与えているのだとばかり思っていた。私は、自分を標的とした陰謀があるとは全く疑っていなかった。

ずっと後になって、人生の最期の瞬間に、私はぼんやりと気づいた。マグナスの派閥が、エネルギーと特殊な化合物に関する知識を用いて、私を密かに「毒殺」していたのだ。それは、私の仕事場のエネルギー環境を妨害周波数を発生させる装置で変えることによってかもしれない。あるいは、私が毎日口にする食べ物や飲み物を通してかもしれない。それらは人を殺す毒薬ではなく、精神と肉体を徐々に衰えさせる化合物であった。

私の衰弱の兆候が日に日に明らかになるにつれ――時にはろれつが回らなくなり、またある時には重要なことを忘れてしまう――マグナスの派閥は行動を開始した。彼らはエリート層の間で噂を流し、「大神官リグスはもはや上天の寵愛を受けていない」「彼は靈感を失った」「もはやアトランティスの精神を導くのに十分な明晰さが無い」と囁き合った。彼らは巧妙に、私が評議会の会合で無力に見えたり、誤った決定を下したりするように状況を作り出した。

私の威信は徐々に蝕まれていった。かつて私を尊敬していた人々も、疑いの眼差しで私を見るようになった。評議会での私の提案はもはや十分な重みを持たず、容易に無視されるか、却下された。私の健康はますます悪化していった。時折、軽い脳卒中のような症状が現れ、話すのが少し困難になり、動きが以前より鈍くなった。

ついに、時が熟したと見た実用主義派は、評議会でも、私が健康上の理由から「休息」し、多くの功績を残した大神官の「名誉を守る」べきだと公式に提案した。その決定は、偽りの哀悼の言葉と、心を動かされた大多数の無関心の中で、容易に可決された。私は自分の地位を追われ、実際には自分の邸宅で軟禁され、もはや何の権力も持たなかった。

しかし、それはまだ最も痛ましい打撃ではなかった。

致命的な一撃、私を内側から真に破壊したものは、私が最も愛し、信賴していた人物から来た。

私にはエララという一人息子がいた。彼は私の希望であり、私が全愛情と心血を注いで教育し、いつか彼が私の精神的な道を継いでくれることを願っていた人物であっ

た。しかし、彼はまだ若すぎ、そしておそらく、外の世界はあまりにも多くの誘惑に満ちていた。

私がまだ在職中でありながら衰弱の兆候を見せ始めた頃から、マグナスの派閥はエララに接触し始めていた。彼らは彼をエリートの集まりや、奇妙な食べ物や飲み物が供される豪華なパーティー、あらゆる感覚を刺激する光と音による娯楽の場に招待した。彼らは彼に、彼がこれまで知らなかった権力と享楽の世界を見せた。「自由」の名の下に、富裕層の街には放蕩の限りを尽くす享楽の場が次々と現れた。そこでは、エネルギー技術を用いて幻覚や刺激的な音、そして現実を忘れさせる薬物さえも作り出されていた。まだ忠実な使用人たちを通して、私は息子エララがそれらの場所に一度や二度ならず訪れていたことを、痛みを伴って知った。彼は、私が最も恐れていた道を滑り落ちていた。

そして、彼らは彼にリラという名の美女を差し向けた。彼女は鋭い美貌を持ち、賢く、常にエララが聞きたいと思う言葉を口にする術を知っていた。彼女はエララの才能を称賛し、彼の「息苦しさ」に共感し、彼が新しい秩序の中で重要な人物になれる未来を描いてみせた。うぶ

な若者であったエララは、すぐに恋と名声の陶醉に溺れていった。

私が正式に失脚すると、エララはリラとマグナス派の「後押し」を得て、科学技術評議会での役職を与えられた。それは名ばかりの地位で、重要な決定権はなかったが、彼が華やかな場に姿を現し、人々から称賛されることを可能にした。エララは公然とマグナス派を支持し、さらには父親の「時代遅れ」な見解を暗に批判することさえあった。私はそれらの言葉を使用人たちから聞き、心臓を誰かに握り潰されるかのようであった。

まさにリラが、エネルギーの達人たちからの「滋養薬」を頻繁に私に持ってくる人物であった。彼女はエララに、それらが私の精神を安定させ、健康を増進させるだろうと言った。そしてエララは、その純真さと、別の形で親孝行な息子であることを示したいという願いから、それらを自らの手で私に持ってきた。彼は、それらの物、それらのハーブティーや小さなエネルギー・クリスタルこそが、私の精神と健康を徐々に破壊しているものであることを知らなかった。彼が「薬」を持ってくるのを見るたびに、私の心は締め付けられた。真実を暴露すれば彼が打ちのめされることを知っていたので、私はそうする

に忍びなかったが、沈黙することは自ら毒を飲むことと何ら変わりはない。

エララが「重用」された期間は数年続いた。それは、彼が権力の幻想の中で生きた年月であった。しかし、彼が私を訪ねてくるたびに、私は彼の魂の中にある不安と空虚さを感じ取ることができた。彼は私の目をまっすぐに見ることを避け、アトランティスの「発展」について空虚な話をし、そして急いで去っていった。

そして、来るべき時が来た。私の威信が完全に消え去り、私がただ病に伏せる老人としてかろうじて生きているだけになると、エララもまた利用価値がなくなった。マグナスの派閥は、彼を重要な会議から排除し始めた。彼らは「彼の経験はまだ未熟だ」「この地位にはもっと戦略的な視野を持つ人物が必要だ」と主張した。リラも次第に冷たくなり、最終的には彼を捨てて別の権力者のもとへ去った。

エララは、かつて誇りに思っていた地位から、屈辱的かつ無情に追い出された。彼は名声と愛の両方を失った。ある雨の夜、彼は私の元を訪れ、ひざまずいて泣きじゃくった。この時になって初めて彼は目を覚まし、自分が他人の駒に過ぎなかったことに気づいた。私は目の前で

打ちひしがれている息子を見て、腹立たしさ、憐れみ、そしてあまりにも高い代償を払ったその純真さへの痛ましさを感じた。私は何も言わず、ただ震える手で彼の頭を撫でた。彼の悲劇はまた私の悲劇であり、そして華やかな約束に騙されたアトランティスの一世代全体の悲劇でもあった。

その一方で、私と、信仰を固く守り続けた残りの大神官たちは、ただ座して死を待っていたわけではなかった。我々は、我々の警告がもはや効果がないことを認識していた。「アトランティス」という船は方向を変え、嵐の海へと突進していた。祈りの集まりと偽った秘密の会合で、我々は最後の計画について話し合った。我々はもはや、神に背を向けた社会全体を救う望みは持たず、ただ未来のために最も良い種を保存できることだけを願っていた。

我々は、避難の準備を秘密裏に計画し始めた。その計画には、我々がまだ保持していた最先端の技術を用いて巨大な船を建造することが含まれていた。それらの船は、荒れ狂う大洋を乗り越え、我々が予感していた災害に耐える能力を持つ必要があった。それは非常に大きな仕事であり、マグナス派に発見されれば必ず破壊されるた

め、絶対的な秘密裏に進められなければならなかった。
そして私は、軟禁され健康が衰えていたため、助言と祈り
でしか貢献できなかった。

エララの失脚後、私はますます邸宅に引きこもったが、
外で起こっている恐ろしい変化を知らずにはいられなかつた。
マグナス派が始めた道徳の侵食過程は、伝染病の
ように広がり、アトランティスの魂を根こそぎ蝕んでい
った。私はそれを、芸術の変質を通して見た。

(少年リバーは一旦話を止め、私—ケイシー—をまっす
ぐ見つめた。その眼差しは奇妙なほど鋭くなった。)

ご存知ですか、これは今の私たちの時代を考えさせられ
ます。私がアトランティスの奇妙な抽象画を振り返ると、
現代人が称賛し、歪んだ混沌とした形に何億ドルもの値
を付けるピカソやゴッホの作品を思い出します。新聞で、
本物のバナナをガムテープで壁に貼り付けただけの「芸
術作品」が、百万ドルもの価格で売られたという記事さ
え読みました。当時のアトランティス人も同じでした。
彼らはこっけいで不条理なものを称賛し、それを「創造
性」と見なしました。一部の画家はさらに進んで、悪魔
の姿や恐ろしい光景さえも描きました。彼らはそれを
「自由な自我」の芸術と呼びましたが、私にはその中に

非常に否定的なエネルギー、神聖なものへの嘲笑しか見えませんでした。

（少年は、まるで重要な秘密を分かち合いたいかのよう
に、真剣な眼差しで私を見た。）

ご存知ですか、それらはただの絵ではありません。それらは、それを創造した者のエネルギーを宿しています。もしある人が今日、「現代」や「抽象」美術の展覧会に入り、それらの絵を見て、本当にとっても美しく、魅力的だと感じ、さらにはその何億ドルもの価値を感じ取るとしたら、それは非常に危険なことです。それは、その人の魂の周波数がそれらの絵と共鳴している、つまり、それらの背後にある混沌とし、変異し、さらには魔性のエネルギーと共鳴していることを意味します。そして、一度悪魔に共感してしまえば、宇宙の最後の審判において、その人もまた悪魔の一部と見なされ、神によって淘汰されることに直面するでしょう。

逆に、もし同じ人が入って、それらの絵を見ても何も理解できず、さらには不快感、めまい、頭痛を感じたり、「これらのものは実に奇怪だ」という明確な認識を持ったりすれば、それは良い兆候です。それは、その人の魂がまだ純粋さを保っており、神が人間のために定めた原

初の善悪の基準とまだ繋がっていることを示しています。そして、まさにその純粋さこそが、災いが襲ってきた時に神仏の保護を受ける希望の切符となるのです。

(少年の声は、アトランティスへの回想に戻る。)

音楽もまた、その渦から逃れることはできなかった。これもまた、今の時代と非常によく似ていると思いませんか？多くの若者が、奇抜な服装をし、ステージで意味のない言葉を叫ぶ歌手グループに熱狂している。当時のアトランティス人もそうであった。優雅で高尚な旋律、伝統的で優美な舞踊は、ますます追いやられていった。その代わりに、享楽の場は、強烈で畳み掛けるようなリズムの、耳をつんざくような音楽で満ち溢れていた。彼らはもはや美しい舞を踊らず、奇妙で、性的な動きのダンスを踊った。彼らはそれを「エネルギーを解放する」方法だと言ったが、私にはそれがただ、人間の中の最も卑しい欲望を煽っているだけのように見えた。

二つの時代、リグスの時代と我々の時代は、非常によく似た道を歩んでいる。それは、真の神伝文化が捨て去られ、その代わりに、背後で悪魔が操り、制御する、変異し、醜いものがその場所を占める道である。彼らの目的はただ一つ。人間を、神が定めた道徳基準からますます

遠ざけ、人間に真偽、善悪、良し悪しの区別がつかなくさせること。そして、人間が神との繋がりを完全に失った時、災いは非常に速やかに訪れる。

（リバーはため息をつき、まるで二つの時代の悲しみをその肩に背負っているかのようにであった。そして、途切れた話を続けた。）

そして、文化と道徳においてこれほどまでに腐敗した社会を土台として、あのアトランティスの唯物論派の人々は、彼らの最も暗い野望を現実のものとした。

彼らは、「光の神杖」という美しい名前を持つ携行型の兵器を創り出したが、我々残された神官たちは、それをその真の名前、「破壊の神杖」と呼んだ。それは短い杖の形をしており、特殊なクリスタルが取り付けられていた。標的に向けて起動すると、それは分子結合を破壊する能力を持つエネルギーの流れを放出し、標的をほぼ瞬時に、跡形もなく塵へと分解させた。

この兵器の製造は極めて高価であり、最も希少なクリスタルを必要とした。そのため、それは一般庶民が持つような兵器ではなく、超高級品であった。その価格は、今日の超富裕層がプライベートアイランドを所有するのと

同等であった。にもかかわらず、唯物論派は莫大な利益のためにそれらを製造・販売し続け、それを絶対的な権力と富の象徴とした。十分な金を持つ者——通常は墮落したエリート層や大規模な犯罪組織——は、他人を消し去る能力を所有することができた。これは、静かな恐怖をまき散らした。法律は無意味となり、生命の価値は極度に軽んじられた。

私と、残された真の神官たちは、それらの「破壊の神杖」を恐怖と悲痛の思いで見ている。我々にとって、それは力の象徴ではなく、究極の墮落の兆候であった。修行者の手は、支えるためにあるのであって、破壊するためにあるのではない。

（少年リバーの声が詰まるかのようで、彼はその時のリグスの感情を再び生きているようであった。）

リグスとしての人生で、私の魂は、生涯守り続けた価値が踏みにじられるのを目の当たりにする無力感と苦痛をはっきりと感じ、さらに、愛する息子が知らず知らずのうちに悪人に手を貸していると知った時には、心は張り裂けんばかりであった。体は日に日に弱り、精神ももはや明晰ではなく、私はただ、自分が警告しようと努めた道へとアトランティスがり落ちていくのを見つめるこ

としかできなかった。彼らは、一人の人間を瞬時に塵に変えることができる恐ろしい兵器を創り出した。しかし、その兵器は誰もが手に入れられるものではなく、まるで全財産を投じるかのように希少で高価であった。だから、誰かが突然跡形もなく消えると、誰もが暗黙のうちに、その背後にいるのは手出しのできない勢力であると理解した。それは、十分な金があればいつでもあなたを消し去ることができる者たちがいると知っていることの、包括的な恐怖であり、無力感であった。

それは戦場での死ではなく、道徳の腐敗、最も愛する者たちからの裏切りから始まる、一つの文明の緩やかな衰退であった。そして恐ろしいことに、多くの人々がそれを「発展」、「自由」と称賛した。

リグスは、彼の時代のアトランティスの衰退を阻止することには失敗したが、彼の努力と不動の決意は無意味ではなかった。それは、後世の、耳を傾けることができるかもしれない者たちのために、一つの種、一つの警鐘を蒔いた。そして私の魂は、一つの文明の崩壊が、必ずしも剣や戦火の喧騒の中で起こるわけではないことを学んだ。時には、それは人々が道徳基準を放棄し、欲望と無

制限の自由を追い求め、自らを世界の中心とみなし、神仏を否定することから始まるのだ。

リグスの時代から二、三世代が過ぎ、アトランティス社会はますます墮落し、かつては例外的であった悪徳が今や一般的となった。人々は神との繋がりを失い、利己的な科学技術と自らが創り出した破壊兵器だけを信じるようになった。まさにこの内からの腐敗、人々が神を冒瀆し、自ら恩寵を失ったことによって何世代にもわたって蓄積された巨大な業力こそが、後に大陸全体を飲み込む大災害へとつながる深遠な原因であった。利己的な政策、ますます恐ろしくなるエネルギー兵器の開発、そして自然を制御する技術の濫用、これらは全て、完全に崩壊した道徳的基盤の上に、実用主義派とその子孫によって行われ、最終的にアトランティスを奈落の底へと突き落とした。それが、傲慢と神への背信に対して支払わなければならない代償であった。

* * *

第八章：ナポレオンの副元神

（今回、リバーは以前のように遠くを見つめてはいなかった。彼は私－ケイシーをまっすぐに見つめ、その眼差しには奇妙な複雑さが宿っていた。まるで、非常に身近で、非常に個人的でありながら、同時に限りなく異質な何かについて語ろうとしているかのようであった。彼の声は低く、そしてゆっくりとしていた。）

独立した生命として存在する人生もあれば、私の存在が別の運命、世界全体を揺るがした運命と結びついた人生もあった。私は一人の人間ではなく、一人の人間の一部分であった。私は、ナポレオン・ボナパルトに付き添う副元神（ふくげんしん）であった。

（記録者ケイシー・ヴェイルによる注：リバーが語る「副元神」という概念について。これは、一人の人間が単一の魂だけでなく、一つの肉体に複数の魂が宿る状況を指す。その中で主となる魂は「主元神（しゅげんしん）」と呼ばれ、他の魂は「副元神」と呼ばれる。それらは独立した意識であり、別々の魂の部分である。副元神は観察し、感じ、さらには助言を与えようと試みることとはできるが、最終的な決定権は持たない。その権利は主元神に属する。多くの場合、主元神はこれらの副元神

の存在にさえ気づいていない。リバーによれば、その人生で、彼はそのような付き添う意識の一つであったとのことだ。)

私がナポレオンだったというわけではない。お分かりだろうか？そうではなく、私の意識の一部が、魂の影のように彼に付き添い、目撃し、熟考し、そしておそらく、野心に満ち、同時に悲劇に満ちた魂の業力と選択のバランスを取ろうと試みるべく、定められていたのだ。

この人生は、さらに特別であった。私は唯一の副元神ではなかった。彼の魂の微細な領域には、力強い主元神の他に、私と他の副元神たちがいた。我々は静かな観察者のようであり、それぞれが別々の意識の流れを持ちながらも、一つの大きな運命に結びついていた。我々一人一人が独自の感じ方、独自の働きかけを試みたが、結局のところ、皆、野心の渦巻く流れの前には無力であり、そして後に私が気づいたように、外部からの操作に対しても無力であった。

ナポレオンがまだ若かった頃から、私は彼の強力なエネルギー、並外れた意志、そして彼を駆り立てるある種の「使命」を感じ取っていた。しかし、ある恐ろしい出来事が起こり、それが全てを変えてしまった。

それは 1794 年の 7 月頃のことであった。当時、ナポレオンは 25 歳ほどで、若き砲兵士官でありながらも、早くからその傑出した才能を示していた。ある夜、彼が一人でテントの中、あるいは人里離れた状況にいた時、私は突如として外部からの強力な「侵入」を感じた。見知らぬ、冷たく、全く人間のものではないエネルギーがナポレオンの意識を包み込み、彼は深い昏睡状態に陥った。

その瞬間、私は人間ではない生命——宇宙人——の存在をはっきりと感じ取った。彼らは私の意識の中では明確な形を持たず、ただ高度で無感情な技術の一形態という概念として存在していた。ナポレオンの主元神が抑えつけられただけでなく、私や他の副元神たちもまた、目に見えない圧力を感じた。私の感応能力は、まるで厚い霧の層に覆われたかのようであった。主元神ほど完全に朦朧としていたわけではないが、事の詳細をはっきりと見たり、完全に理解したりすることはできなかった。

それでも、途切れ途切れに感じ取れたことから、私は彼らがナポレオンを連れ去ったこと、おそらくは彼らの宇宙船に乗せたことを知っていた。そして、まさにその短い時間、我々の意識が部分的に抑制されている間に、彼

らは彼の脳に超小型のマイクロチップを埋め込む手術を行った。全過程は迅速かつ正確で、手術のように冷徹であった。

ナポレオンが意識を取り戻した時、彼はただ少し目眩がし、頭が少しぼんやりしていると感じただけだった。彼はおそらく、それを数日間の緊張による疲れや、軽い一過性の熱のせいだと自分に説明しただろう。その出来事の記憶は、意図的にかき乱されていた。しかし、副元神である私は、その「朦朧状態」を経験しながらも、その恐ろしい出来事の本質をぼんやりと覚えていた。

その直後から、私はナポレオンの脳内に「異物」が存在するのを感じ始めた。それは彼の思考を直接操るものではなかったが、極めて強力な触媒として機能した。それは、彼に元々備わっていたもの——野心、傲慢、猜疑心——を増幅させた。同時に、それはよりか弱い声——哀れみの情、ためらい、良心——を沈黙させた。真の悲劇は、修煉者ではなく、精神的な問題を認識していなかったナポレオンの主元神が、その増幅に完全に追随してしまったことにある。彼は、チップがもたらす冷徹な決断力、目標への高度な集中力を好んだ。彼はそれを選んだのだ。

修煉者ではなかったがために、ナポレオンは自分の中の葛藤に気づくことができなかった。彼が知らなかったのは、ある時には私や別の魂の一部が彼に少しの善念を植え付けようと試みる一方で、チップに刺激された別の魂の一部は大胆な計画に酔いしれていたということであった。それらの内なる戦いは全て、彼にとっては、おそらく一人の指導者の戦略的な熟考や計算としてしか表れなかったのだろう。

彼の軍人としての人生は、イタリア遠征で華々しく開花し始めた。私は、彼が他のどの将軍も思いつかないような軍事計画を立てるのを目撃した。その思考の鋭さ、並外れた論理性に、私は驚愕せざるを得なかった。しかし、それには恐ろしいほどの冷徹さが伴っていた。何千もの兵士の命は、彼にとって、戦略地図上の数字、勝利を達成するために必要な道具に過ぎないかのようであった。

その後、1798 年のエジプト遠征があった。私は、彼をこの古代の地へと引き寄せる、強い、ほとんど本能的な衝動を感じた。それは戦略的な理由だけでなく、古代の遺跡や偉大なピラミッドに対する奇妙な好奇心、探求への情熱でもあった。彼はそれらの足元を散策し、その眼差しは思索に満ち、まるで遠い昔に忘れ去られた何かを

思い出そうとしているかのようであった。しかし、修煉者ではなかったため、彼はその目に見えない繋がりを解明することはできなかった。彼はただ、それを一人の征服者が過去の偉大な文明に対して抱く敬意だと考えた。

エジプトから赫々たる名声と共に帰還すると、彼の野心はますます大きくなった。ブリュメール 18 日のクーデターでは、私は彼が権力を掌握する際の決断力、大胆さ、そして極限までの無謀さをも目撃した。私は、彼の脳内のチップがより活発に働き、彼の自信を極端なレベルまで増幅させ、彼に自分が支配するために生まれたのだと信じ込ませているのを感じた。

そして、傲慢の頂点は 1804 年の皇帝戴冠式の日を訪れた。パリのノートルダム大聖堂で、このためにローマを離れなければならなかった教皇ピウス 7 世の見守る中、ナポレオンは教皇に王冠を頭に載せさせなかった。彼は自らの手で王冠をひったくり、自分の頭にかぶった。その瞬間、私は主元神の究極の満足感と、チップの「喜び」を感じ取った。それは単なる政治的行為ではなく、全世界への宣言であった。「この私こそが、自らの才能によってこの権力を手に入れたのだ。この栄光は私のものである」と。

戴冠式の後、ナポレオンの権力は絶対的なものとなったかに見えた。しかし、絶対的な権力は、絶対的な猜疑心をも伴う。そしてチップは、その恐怖を増幅させる機会を逃さなかった。このことは、直後のアンギャン公の処刑事件で最も顕著に現れた。王党派による陰謀の噂が広まると、ナポレオンは明確な証拠がないにもかかわらず、直ちにこの公爵を疑った。

公爵を誘拐し裁判にかけるという決定が形作られていく中で、私はあらゆる手段を尽くして制止しようと試みた。私は彼の心に、情報の信憑性への疑念、公正な裁判のイメージを植え付け、王家の血を引く者を不当に裁けば歴史の審判を受けることになるという恐れを呼び起こそうとした。しかし、全ては無駄であった。怒り、暗殺への恐怖、そして何よりも、マイクロチップからの強力な「起動」を感じた。それは彼に、「絶対的な決断力をもって行動」し、「脅威を芽のうちに摘み取り」見せしめとするよう駆り立てた。決定は冷徹に下された。裁判は迅速に行われ、公爵は銃殺された。その知らせを受けた後、私はチップから恐ろしいほどの「静けさ」を感じた。まるで、それが一つの「障害」を取り除き、恐怖によって宿主の権力を固めたことに満足しているかのようであった。

国内の脅威を鉄拳で制圧した後、ナポレオンは再び国外に目を向けた。アウステルリッツ、イエナでの輝かしい勝利は、ヨーロッパ全土を屈服させ、彼に自分が真に無敵であると信じ込ませた。しかし、彼の内にいる私は、ますます大きな悲しみと無力感を感じていた。彼はますます権力に酔いしれ、人間の命を羽毛のように軽く扱うようになった。私の制止の試みはますます弱々しくなり、勝利の歓声と、チップによって絶えず増幅される自己満足にかき消されていった。

そして、まさにその盲目的な自信が、最初の致命的な戦略的過ちへと繋がった。1807 年のスペイン侵攻である。彼はそこの王朝を打倒し、兄を王位に就かせた。他の国々と同じように、全てが順調に進むと信じて。

この計画が芽生え始めた時、私は彼に警告しようと試みた。私は、誇り高く敬虔な民族が決して外国の王を受け入れないという映像を伝えた。私は彼に、陰しい山々、粗末な武器を手にながらも憎しみに満ちた眼差しを向ける農民たち――正規軍では決して完全に勝利することのできない、人民戦争――を見せた。しかし、傲慢の絶頂にあったナポレオンは、その全てを退けた。彼はそれらの不安な予感を臆病と見なした。チップは再び彼を駆

り立てた。ボナパルト家こそがヨーロッパ全土を支配するにふさわしい、と。彼は、その決定が血なまぐさいゲリラ戦の火種となり、何年にもわたって彼の帝国を絶えず出血させ、無数の命と富を消耗させる「スペインの潰瘍」となることを予期していなかった。

その「スペインの潰瘍」は、帝国を絶え間なく出血させた。しかし、軍事力の限界についての教訓を学ぶ代わりに、チップに煽られたナポレオンの傲慢さは、彼の絶対的な権威を再確認するために、さらに偉大な勝利を収めなければならないと彼を駆り立てた。そして、まさにその時、彼はロシアに目を向けた。

(副元神の語りは続き、その響きはさらに重くなる。)

最大の悲劇、帝国全体の崩壊の始まりを告げた出来事は、1812 年のロシア侵攻の決定であった。

その計画がナポレオンの心に芽生え始めた時、私は恐ろしいほどの不安を感じた。私の全ての正念、そしておそらくは、あのか弱い哀れみの魂の部分もまた、制止を叫んでいた。彼の浅い眠りの中で、私は可能な限り真に迫った光景を創り出そうと試みた。果てしなく広がる真っ白な雪原、吹雪の中で凍え、身を縮める飢えた軍隊、そ

して白い雪の上の真っ赤な血。私は彼に、ロシアの絶望的な広大さ、そこの人々の極限までの粘り強さ、そして意志さえも凍らせるほどの寒さを感じさせようとした。

しかし、全ては無駄であった。彼の傲慢さはこの時、頂点に達していた。彼は、自らの大陸軍（グランドルメ）にとって不可能なことは何もないと信じていた。そしてチップ、私はそれがかつてないほど強力に作動しているのを感じた。それは絶えず「大いなる無謀」を煽り、彼の心に、ヨーロッパ全土を彼の足元にひざまずかせる最後の輝かしい勝利のイメージを植え付けた。現実の將軍たちからの、あるいは私のような内なる静かな声からの、あらゆる制止の言葉は、彼によって臆病、悲観的と一蹴された。

そして、悲劇は、私が予見した通りに起こった。彼の強力な大陸軍は、ロシアの冬と、そこの人々の勇気に飲み込まれた。私は彼の目を通して、忠実な兵士たちが撤退中に凍死する光景、馬が疲労で倒れる光景、そして生き残った者たちの顔に浮かぶ極度の絶望を目撃しなければならなかった。それは地上の地獄であった。そしてその時でさえ、彼の傲慢さは、彼に過ちを完全に認めることを許さなかった。

その後の崩壊は、必然の流れであった。ロシアでの敗北は、彼の帝国の基盤を根底から揺るがした。支配されていた国々が蜂起し始め、古い敵が再び結集した。彼はその後も巧みな勝利を収めたが、それらは全て、すでに底に穴の開いた船を救おうとする最後の努力に過ぎなかった。

ついに、彼は敗北し、エルバ島へ流された。この時期、権力と栄光が失われると、マイクロチップの活動が著しく低下するのを感じた。おそらく、あの外部の勢力は、「ナポレオン実験」は終わりを迎え、もはや介入する価値はないと考えたのだろう。

チップの「沈黙」は、稀な空間を生み出した。この時期のナポレオンの思索は、より「純粹」で真実味を帯びるようになった。強力な妨害がなくなったことで、我々の良心の声は、彼とより容易に繋がること became できるようになった。彼は真に自分自身と向き合い始め、彼をこの窮地に追いやった過ちや決定について熟考した。

しかし、やがて、野心の最後の希望の光が再び灯った。彼はエルバ島から脱出し、輝かしくも短い百日天下のためにフランスへ戻った。私はチップが再び「目覚め」、戦争機械が再び始動するのを感じた。しかし、それは消

えゆく蠟燭の最後の光に過ぎなかった。ワーテルローの戦いが、全てに終止符を打った。

二度目のセントヘレナ島への流刑、大洋に浮かぶ孤島への追放こそが、彼の人生の真の結末であった。そこでは、絶対的な孤独の中、戦場も、軍隊も、歓声もなく、チップはほぼ完全に沈黙した。それは、生命のない物体と化していた。

この時、私は初めて、彼の主元神と真に「対話」することができた。言葉によってではなく、深い思索の流れによって。私は彼と共に、波乱に満ちた全生涯を振り返った。彼は運命について、彼の人生を導いたかのように思える目に見えない力について、漠然と考え始めた。たとえば、それに名前をつけることはできなくても。彼は後悔し、自らを責めた。彼は全てを手に入れたが、結局は全てを失った。

彼が亡くなった日、私は彼の魂が肉体を離れるのを目撃した。疲労し、重い業力に満ちていたが、同時に、ついに野心、葛藤、そして疲れ果てた肉体の枷から解放されたことによる、ある種の安らぎもあった。その時、私はまた、私自身と残りの副元神たちが分離するのを感じた。

我々の付き添う使命は終わった。悲劇的な偉人の影としての人生は、幕を閉じた。

(リバーは、副元神としての人生の物語を終えた。彼は長く息を吐き、そして私を見上げた。その眼差しは今や十歳の少年の純粹さを取り戻していたが、その奥には年齢をはるかに超えた聡明さが秘められていた。)

それが、私の副元神が経験した物語だ。しかし、私が修煉し、天目で振り返ってみると、当時の副元神でさえ知らなかったことが見えてきた。

ナポレオンの主元神は、非常に遠い昔の人生で、ピラミッドを建造した巨人の文明である中天国の第四代大神官であった。おそらく、この宿縁が、彼を無意識のうちにエジプト遠征へと駆り立てたのだろう。

そして、その遠征には隠された使命があった。エジプト滞在中の稀な夢の中で、彼はある神から啓示を受けた。その神は、後の文明の邪悪な祭司がスフィンクス像の眉間に呪いをかけ、武神の守護エネルギーを封じ込めていると告げた。神の指示に従い、ナポレオンは砲兵にまさにその場所を撃つよう命じ、見事に呪いを解いた。彼は、知らず知らずのうちに神聖な使命を果たしていたのだ。

ナポレオンの征服の真の天意は、私が見るところ、ヨーロッパの古くさい、腐敗した封建秩序を打ち破り、その過程で多くの精神文化遺産を破壊から守ることであった。彼は神の計画を正しく実行した。しかし、彼の悲劇は、チップによって傲慢さを増幅されたために、全ての功績を自分自身のものとしてしまった点にある。彼は、全ての戦功が自らの才能によるものであり、神の采配や恩寵によるものではないと考えた。まさにその利己的で傲慢な心が、彼に無数の業力を生み出させ、最終的に悲劇的な結末を招くことになった。

そして、私を本当に震撼させたのは、ケイシー、私が大法を修煉し始め、一部の智慧が開かれた時、我々全員――ナポレオンの主元神と副元神たち――が、皆、この同じ時代に生きる人間として転生していたことに、徐々に気づいたことだ。私はここにいる。この物語をあなたに語る、一人のアメリカ人の少年として。そして、他の三人は、地球上の異なる国々にいると感じる。

私は、彼らがこの生で誰であることを正確に知っているが、彼らが、あの栄光に満ち、同時に罪深い過去を覚えているかどうかは分からない。しかし、我々全員が、大法が広く伝わるこの時期に共に出現したことは、偶然ではな

いと信じている。おそらく、これは我々全員が、かつて植えた業障を真に浄め、自らの真の自我を取り戻し、全く異なる道——真・善・忍へと帰る道——を選ぶための機会なのであろう。

* * *

第九章：砂塵の証人

（リバーはそっと息を吐き、その目は向かいの壁の不定な一点を見つめている。まるで、物語の一つ一つが、彼

に時の塵をまとわせるかのようであり、今回の塵は、荒廃の赤色と、何百万年にもわたる悲しみを帯びていた。)

黄金世界の黄昏

ある人生で、私は今日の皆さんが知る地球にはいなかった。それは今から約四千万年前の、別の文明周期であった。その時、私は三十歳近くの女性で、伝統的な陶芸家であった。その時の私の名は、現代の言語で発音すれば、アリアという響きに近い。我々の時代の言語もまた大きく異なり、文字よりも音の周波数と共鳴に大きく依存していた。

その頃の私の世界は、外見上は発展の頂点にあった。都市はきらめく合金で建設され、太陽光を反射して動く虹の筋を作り出していた。音のない飛行船が、摩天楼の間を静かに滑るように移動していた。人類は太陽系外への航行を容易に行う能力をすでに持っていた。しかし、その華やかさの裏には、恐ろしいほどの空虚さがあった。社会の空気は冷たく、無感情であった。人々は物質と、技術によって生み出された快樂に溺れ、ますます自然や精神的な価値から遠ざかっていた。

私、アリアは、その世界の真ん中で、まるでオアシスのように生きていた。私の陶芸工房は、まだ石造りの建物が残る古い街の一角にあった。毎日、私の両手が土で汚れる時、私は喜びと安らぎを見出していた。私は土の一粒一粒に宿る魂を感じることができ、水と火が交わる時、その物語を聞くことができた。しかし、外の世界はもはやそれを尊ぶことはなかった。彼らは機械によって大量生産される「完璧な」製品を好んだ。それらは工業的に美しいが、全く魂がなかった。工房の売り上げは日増しに減少し、私はもはや、人間の手の温もりを求める、ごく少数の懐古趣味の人々のためにしか仕事ができなくなっていた。工房の静寂の中で、私はしばしば孤独と懷疑を感じ、自分が歩んでいる道にまだ何か意味があるのだろうかと自問自答した。

そしてある日、我々の全世界が震撼した。

国際連合評議会からの緊急通報が、惑星中に発信された。それは、当時の地球上の約五十カ国の代表が集まり、今日でいう国連と同様に、地球規模の問題を調整する役割を担う組織であった。評議会議長の冷たく無感情な声が、あらゆるスクリーンから響き渡り、遠い星系での「外交上の事件」を告げた。

しかし、真実を長く隠し通すことはできなかった。情報は非公式なルートから漏れ始め、パニックのように広がっていった。それは「事件」ではなかった。それは、壊滅的な攻撃であった。地球の資源探査艦隊、まさに国際連合評議会が承認した野心的なプロジェクトが、他の種族の領土を侵犯し、完全に殲滅されたのだ。そして最悪なことに、その異星人種族は、我々よりもはるかに進んだ文明を持ち、地球上の全生命を最後まで追跡し、報復として破壊すると宣言した。

混乱と恐怖が蔓延した。評議会の加盟国は互いに非難し始めた。唯物論を信奉する指導者たち、普段は自らの技術力に絶対的な誇りと信頼を抱いていた者たちが、今、初めて完全な無力感に直面した。

多くの緊張と論争に満ちた会議の後、国際連合評議会は最後の計画、絶望に満ちた「種の保存」と名付けられた計画を発表した。彼らは、最悪の場合に人類を存続させる望みをかけて、各加盟国から様々な分野の優秀な個人を選び出し、巨大な宇宙船に乗せて太陽系の他の惑星にある秘密基地へと避難させるというものであった。

私が選ばれたという知らせを受けた時、私は非常に驚いた。私の国が提示し、評議会が承認した理由は、私が数

少ない熟練した伝統工芸家の一人であり、「保存すべき文化遺産」の代表であるから、というものであった。皮肉なことに、彼らが「時代遅れ」とみなし、ほとんど忘れ去られていた芸術が、今や、この逃避行に携えるべき貴重なものと見なされたのだ。

旅立ちの日、私は最後に一度、自分の陶芸工房の前に立った。窯にはまだ温もりが残り、いくつかの未完成の作品がろくろの上に置かれていた。私は全てを置き去りにしなければならなかった。私の全人生と情熱が、そこに残された。私が持ち運ぶことを許されたのは、見習いの頃から私に付き添ってきた道具が入った、小さな道具箱一つだけであった。私の涙がこぼれた。それは恐怖からだけでなく、自らの魂であったものを手放さねばならない痛みからでもあった。

赤い惑星の秘密

火星への旅は、張り詰めた沈黙の中で行われた。巨大な宇宙船の中で、何千人もの人々が身動き一つせず座り、誰も一言も口を利かなかった。私は周りを見渡し、有名な科学者が、普段はメディアに自信に満ちた表情で登場

する彼が、今や虚ろな眼差しで虚空を見つめているのを見た。いつも自分の財産を自慢していた裕福な家族が、今や互いに抱き合って嗚咽しているのを見た。あらゆる誇り、名声、金銭は、間近に迫る破壊の前には無意味となった。誰もが窓枠に目を釘付けにし、自分たちの美しい青い惑星がますます小さく、ぼやけていき、やがて広大な宇宙の一つの光点になるのを見ていた。それは、言葉では言い表せない喪失感であった。

我々の宇宙船は、公然と地表に着陸したわけではなかった。それは深く、人里離れた峡谷に飛び込み、そして、岩壁のように完璧に偽装された巨大な扉がゆっくりと開き、地球の奥深くへと続くトンネルを現した。

我々が宇宙船から降り立った時、私のような一般市民は皆、啞然とした。目の前には全く異なる世界が広がっていた。巨大な地下都市が、高くそびえるドーム天井の人工太陽によって照らされ、柔らかな光を放っていた。青々とした植物の森があり、澄み切った地下の川がさらさらと流れていた。空気は清浄で心地よかった。この基地は、数百万の人々を容易に養うことができた。

我々がまだ驚いている間に、私は同行の科学者や役人たちの表情がかなり落ち着いていることに気づいた。後に

なって知ったことだが、彼らは何年も前の宇宙探査を通じて、この基地の存在を知っていた。彼らは、この秘密の扉を見つけ出し、開ける方法を知っていた。それが、火星が避難先の一つとして選ばれた理由であった。しかし、その存在を知っていることと、それを理解していることとは、全く別のことであった。

彼らはすぐに、この壮大な建造物が我々の文明によって作られたものではないことに気づいた。それはあまりにも古く、建築様式や運用技術は全く異質であった。彼らは、誰かが忘れ去った遺産を見つけたに過ぎず、それを解読することはできなかった。

同行の科学者たちは、我々を基地の中央貯蔵庫へと案内した。彼らは、以前の探査でこの場所を見つけたが、情報源にアクセスすることは全くできなかったと語った。ここの情報は、いかなる文字やデジタルデータの形式でも保存されていなかった。それは、大きく、透明なクリスタルの塊の中に封印されていた。彼らはあらゆる技術的手段を試してデータを抽出しようとしたが、全て失敗に終わった。最終的に、彼らは、それがおそらく精神的な相互作用、意識の繋がりを要求するのではないかという仮説を立てた。

そしてそれが、彼らが私や、感受性の鋭い他の何人かの人々、芸術家や詩人たちに頼ってきた理由であった。彼らは「運試し」をしたかったのだ。私が大きなクリスタルの塊に手を置くと、即座に、情報の奔流、映像、音、そして感情が、嵐のように私の心に流れ込んできた。私はもはやアリアではなかった。私は、私の時代から九千万年も前に存在した、別の文明の人生を追体験していた。

私が見たものは、あらゆる想像をはるかに超えていた。彼らの技術は、我々の文明よりも何倍も進歩していた。我々がようやく太陽系の外へ足を踏み出したばかりであるのに対し、彼らは銀河系全体を自分たちの裏庭のように考えていた。私は、量子エネルギーエンジンを使用し、空間を歪めてほぼ瞬時に移動できる巨大な宇宙船の艦隊を見た。彼らは、銀河系全体の三分の二の星系を征服、支配、あるいは同盟を結んでいた。彼らの「恒星間帝国」は単なる名前ではなく、宇宙を覆う権力の実体であった。

しかし、やがて、その輝かしい映像は、私が身震いするほど嫌悪感を覚える光景に取って代わられた。敵なしの権力をもって、彼らは究極の墮落へと滑り落ちていった。私は、自分が豪華な大広間の真ん中に立っているのを見た。遺伝子を改変された貴族たちが、感情を直接操作で

きる音楽を楽しんでいた。私は、美しい女性が通り過ぎるのを見た。彼女の体から放たれるバラの香りが空間全体に広がった。しかし、彼女の眼差しは空虚で、生気がなかった。別の隅では、エネルギーでできた檻の中に、別の惑星から来た奇妙な姿の生命体が閉じ込められ、群衆が指さし、笑いながら、恐怖に震えていた。銀河系の三分の二を侵略する過程で、彼らは無数の罪を犯し、無数の種族を奴隷として捕らえていた。

私は嫌悪感を覚えたが、同時に、その墮落の核心にある恐ろしい類似性にも気づいた。それは、自らを宇宙の中心と見なす究極の傲慢さと、病的な快楽に頼らなければ埋められない極限の空虚さであった。あれほど強力な帝国でありながら、彼らの道徳は内側から腐敗していた。

そして、私は彼らの結末を見た。彼らが銀河系の残りの三分の一を征服しようとした時、彼らは、彼らでさえも抗うことのできない勢力に手を出してしまった。それは、やぎ座の半人半獣の種族であった。崩壊は迅速かつ全面的であった。かつて宇宙を支配した帝国が、短期間のうちに抹殺された。

記憶の流れは終わった。私は床に崩れ落ち、息を切らし、全身が汗でびしょりになっていた。私は理解した。歴史は繰り返されているのだ。

繰り返される歴史と目覚め

私は、自分が見たことを皆に伝えようと努めた。話が終わると、中央管制室全体が沈黙に包まれた。それは、叫び声よりも恐ろしい沈黙であった。誰も私の言葉を疑わなかった。なぜなら、九千万年前の文明の悲劇が、まさに我々自身の運命を完璧に映し出す鏡であったからだ。

そして、歴史は無情にも繰り返された。基地の警報システムが鳴り響いた。巨大な艦隊が地球の軌道に入った。メインスクリーン上で、我々火星の生存者たちは、故郷の惑星の審判の日を目の当たりにすることを強いられた。我々は、彼らの恐ろしいエネルギー兵器が地球に向かって発射されるのを見た。我々の美しい青い惑星は、静かな爆発の中で身をよじった。わずか数時間で、全てが終わった。地球は、生命力に満ちた青い球体から、黒く焦げた、陰鬱な球体へと変わってしまった。

その時の痛みと絶望は、頂点に達していた。かつて各地で戦った老将軍は床に崩れ落ちた。かつて最も自信に満ちていた科学者は、今や子供のように頭を抱えて泣いていた。そして私、私は泣かなかった。ただ、冷たい空虚さを感じた。なぜなら、私は古代文明の記憶を通して、この結末をすでに「見て」いたからだ。

パニックの中、命令が下された。基地の全ての入り口を封鎖せよ、と。我々は地の奥深くへと潜り込み、最悪の事態に備えた。基地内の空気は息苦しいほどであった。食料は厳格な配給制となった。沈黙が支配し、子供たちももはや遊ばなかった。我々は恐怖の中で待った。一日が過ぎた。そして二日。

しかし、三日目のこと、信じられない出来事が起こった。敵の艦隊は、火星の周りをさらに数周した後、集結し…去って行った。彼らはまるで我々の存在など気にも留めないかのように、深宇宙の彼方へと消えていった。

基地は茫然とした沈黙に包まれた。何が起こったのか、誰にも理解できなかった。そして、その沈黙の中で、共通の認識が一人一人の心の中に広がり始めた。我々は、より高次の力によって守られたのだ。我々は、技術によってではなく、神仏によって救われたのだ。

この奇跡的な出来事は、私が目撃した繰り返される歴史の物語と共に、共同体全体にとっての衝撃的な目覚めとなった。基地最大のホールで、全体会議が開かれた。初めて、私、一人の平凡な職人が、何千人もの人々の前で立ち上がって演説した。私は歴史を語り直しただけでなく、因果応報の法則、傲慢さの危険性、そして唯物論の道についての私の考察を述べた。私の誠実な言葉は、皆が経験したばかりの否定できない真実と共に、強い感動を呼んだ。科学者たち、指導者たちは、究極の無力感を経験した後、我々の文明が選んだ道の誤りを公に認めた。

一つの重大な決定が、全員の一致で下された。先進技術への依存を完全に放棄し、伝統的な価値観に立ち返り、手作業に基づいた質素な生活を送り、内面の発展に集中し、神との繋がりを取り戻すこと。

そして、その精神的な革命の中で、私アリア、ほとんど忘れ去られていた陶芸家は、突如として中心人物となった。私の芸術はもはや「時代遅れ」のものではなかった。それは、他の手工業と共に、魂を持つ社会を再建するための基盤となった。

職人の使命

火星の地下で過ぎ去った数十年は、決して容易ではなかったが、意味に満ちていた。我々は、かつて我々を怠惰で疎遠にした自動機械の大部分を停止させた。我々は、最も基本的な技術をゼロから学び始めた。人工の庭園で自らの手で土地を耕す方法、植物の繊維から布を織る方法、簡単な道具で家を建て、修理する方法。

私の陶芸工房は、コミュニティの中心となった。毎日、多くの人々が、注文のためだけでなく、学ぶためにやって来た。私は彼らに、土の魂を感じる方法、忍耐と愛情をもって、命のない粘土の塊を一つの器、一つの壺に変える方法を教えた。かつて多くの賞を受賞した科学者が、たとえ歪で不完全であっても、初めて自分の手でカップを作ることに成功した時、その目に喜びがきらめくのを見た。その喜びは、彼らがこれまで達成したどの技術的成果よりも真実味があった。

地球が破壊されてから約数十年後、観測システムは、我々の惑星が徐々に自己治癒していることを示した。大気は次第に澄み渡り、いくつかの場所で植生が復活し始めた。コミュニティ内で大きな議論が巻き起こった。帰還

すべきか否か？一部の人々はまだ恐怖を感じており、火星こそが唯一安全な故郷であると主張した。しかし、私を含む大多数は、我々には故郷を灰の中から再建する責任があると感じていた。

最終的に、決定が下された。コミュニティの半分以上が地球へ帰還する。残りの半分は火星に留まり、この基地を予備の選択肢として、過去への戒めとして維持する。今回の別れは、もはや絶望の涙ではなく、固い抱擁、約束、そして未来への希望であった。

地球に帰還した時、私は最も尊敬される人物の一人となり、新しい文明の陶芸界を率いるという重責を任された。しかし、心の奥底では、私の使命が今やはるかに大きくなっていることを知っていた。

私は、残りの人生をかけて、壮大なプロジェクト、静かな仕事に取り組み始めた。私は一連の陶芸の傑作を制作した。各作品は、私とごく少数の者しか覚えていない物語を語る、生き生きとした歴史の一ページであった。私はそこに、「恒星間帝国」の壮大な宇宙船の姿、彼らの豪華で退廃的な宴会の光景を刻んだ。私はまた、獰猛なやぎ座の種族の姿と、かつて銀河系の三分の二を支配した帝国の崩壊をも刻んだ。そして、我々自身の物語――

傲慢、懲罰、避難、そして火星の地下での目覚め――をも刻み直した。

各作品は、深い瞑想の過程であり、私が全ての痛ましい記憶と血の教訓を再び生きなければならない一度きりの機会であった。私の手は粘土をこねていたが、私の心は未来への警鐘をこねようと努めていた。

完成後、これらの作品はどこにも展示されなかった。それらは厳粛な儀式にかけられた。我々はそれらを特別な布で包み、石の棺に入れ、世界中の人里離れた様々な場所に埋葬した。土をかぶせる前に、我々は共に棺に手を置き、そこに一つの祈りを込めた。未来の文明の人々が、もし縁あってこれらの「証人」を見つけたならば、我々が託したメッセージを理解するのに十分な智慧と善意を持ち、破壊の二の舞を踏まないようにと。

晩年、私はもはや陶芸をしなかった。私は仏法の修煉と、私の全ての技術、経験、そして考察を、次世代の弟子たちに教え伝えることに全時間を捧げた。彼らはただ技術を学ぶだけでなく、人としての道徳、謙虚さ、そして神仏への敬意をも学んだ。

私がこの世を去った日、私は八十歳を過ぎていた。私は自分の時を知っていた。私は最も親しい弟子たちを呼び寄せ、最後の言葉を託した。職人の技と道德の火を絶やさないように、と。そして私は、全てが始まった古い陶芸工房で、座禅の姿勢をとった。土の香りとほのかな沈香の香りの中、私はチベットの高僧の一部が座化したのと同様の方法で、安らかにこの世を去った。一瞬、淡い金色の光輪が私の体を包み込み、不思議な、清らかな香りが部屋中に広がり、そして私の体全体が、衣服も含めて、五色の光となって天へと舞い上がった。

アリアの人生は、このようにして終わった。懷疑の中で始まり、喪失と絶望を経験したが、最終的に、歴史の静かな証人、未来のための種を蒔く者となることで、使命と円満成就を見出した人生であった。

* * *

第十章： 唐代への転生

（今回、リバーの語り口は、失われた文明の悲壮さや幻想的な響きを帯びてはいなかった。それは、夕暮れに響く寺の鐘の音のように、静かで、穏やかであった。少年

はまるで、非常に平凡でありながらも、並外れた不動の心を持つ旧友について語っているかのようであった。)

ある人生で、私はそれほど遠くない時代、中国史における黄金時代、仏法、特に禅宗が華々しく発展した時代――唐代へと帰った。

その人生で、私は王でも、神官でも、大きな影響力を持つ人物でもなかった。初めは、陳康（ちんこう）という名の武将であり、秦王・李世民が皇帝に即位する前に、その配下として仕えていた。その人生における私の生涯は、戦場の剣戟の音から、禅門の静寂へと、大きな転換を遂げた。

英雄たちの争いの中の一兵士

私は隋末の、至る所に白骨が満ち、民が塗炭の苦しみを味わっていた乱世に生まれた。私の幼少期の記憶は、飢えと苦しみの毎日、略奪と殺戮の光景、そして愛する者たちが倒れていくのをどうすることもできない無力感で

あった。それゆえ、唐公・李淵が隋に反旗を翻すべく太原で挙兵する準備をしていると聞いた時、若く情熱に満ちた私は、ためらうことなくそこへ赴き、従軍した。それは、私が見てきた苦しみの光景を終わらせる一助になりたいという、素朴な願いからであった。

当時、私を直接募兵し、面接したのは、その次男である秦王・李世民その人であった。初めて会った瞬間から、私はその非凡な気概、星のように輝く眼差し、そしてその人物から放たれる自信に完全に魅了された。挙兵は名目上、唐公のものであったが、その時の私の心の中では、秦王こそが真の明君の姿であり、乱世を平定し、万民に真の泰平をもたらすことのできる人物であった。私は、自らが選んだその明君の下で、命を懸けて戦うことを誓い、絶対的に信頼していた。

戦場において、私は優れた兵士であった。私は勇敢に戦い、危険を前にして決して退かず、何度も生死の境をさまよった。ある時、非常に困難な攻城戦で、我々の部隊が敵の火矢によって足止めされ、死傷者が増え続け、兵士たちが動揺し始めた時のことを覚えている。まさにその時、秦王は安全な指揮用の天幕にはいなかった。彼は自ら鎧をまとい、剣を手に、最前線へと突進された。彼

は空虚な言葉を叫ぶことはなかった。彼はただそこに、矢の雨の中で立ち、その威徳と勇猛さをもって全軍の士気を鼓舞した。その光景を目の当たりにした私や他の兵士たちは、まるで目に見えない力を得たかのように、共に死を覚悟して突撃し、ついに城を陥落させた。その姿は私の心に深く刻み込まれ、彼に従えば必ずや天下は泰平になるという固い信念を強固なものにした。

しかし、私の性分は非常に素朴で、率直であった。私は謀略を用いることを知らず、上官の歓心を買うための巧みな話術も持ち合わせていなかった。私はただ、命令と自分の理想に忠実であることしか知らなかった。そのため、多くの戦功を挙げたにもかかわらず、私は中級の武官である校尉（こうい）の職にしか昇進しなかった。私はそのことをあまり気にしなかった。官職は、日に日に唐王朝の基盤が固まっていくのを見ることよりも、私にとっては重要ではなかった。

唐王朝が建国され、泰平の世が訪れたかと思われたが、別の、より恐ろしい戦いが、都の長安で静かに繰り広げられていた。それは、権力闘争であった。通常であれば、長兄である皇太子・李建成が後継者となるはずであった。しかし、次男である秦王・李世民こそが、天下平定に最

大の功績を挙げた人物であった。彼の功績はあまりにも大きく、その威名はあまりにも高かったため、皇太子の地位は揺らいでいた。両派閥の間の対立は、日増しに激しくなっていた。四番目の弟である齊王・李元吉と共に、皇太子・李建成は何度も秦王を陥れ、排除しようと試みた。

その頃の都の政治的な雰囲気は、息苦しいほどであった。我々秦王府の将軍や兵士たちは皆、嵐が近づいているのを感じていた。毎日、我々は不安の中で暮らし、明日がどうなるか分からなかった。私もまた、危険に慣れた兵士としての感受性から、覆いかぶさるような不安を感じていた。私はただの下級武官であり、宮廷の奥深い陰謀を全て理解していたわけではない。私はただ一つの素朴な願いを持っていた。どうか皇子たちが、国家社会のために和解し、兄弟同士の殺し合いを避けてほしい、と。しかし、それがただの甘い願いであることも、私は知っていた。

そして、運命の夜がやってきた。私の主君である、秦王側近の将軍が、緊急会議のために府に召集された。護衛としての役目から、私は彼に付き添い、書斎の外で警備をしなければならなかった。その夜、空気は凝固し、自

分の心臓の鼓動が聞こえるほど緊張していた。半開きの木の扉を通して、私は中から聞こえてくる、計算高い、低い声を聞いた。私は皇太子・李建成、齊王・李元吉の名前を聞いた。「待ち伏せ」「玄武門」「もはや選択肢はない」といった言葉を聞いた。そして、秦王の断固たる声、長孫無忌や他の者たちの熱烈な支持の声をはっきりと聞いた。

彼らは、大胆かつ残忍な計画について話し合っていた。自らの実の兄弟を待ち伏せして殺害するという計画であった。

私の体中の血が凍りつくかのようにであった。耳が鳴った。私の世界が揺らいでいるかのようにであった。私が崇拝していた明君、正義によって泰平をもたらすと信じていたその人が、兄弟殺しの計画を立てていた。私が何年もの間、命を懸けて守り抜いてきた理想の全てが、突如として滑稽で偽りのものとなった。私は嫌悪感を覚えた。その計画に対してだけでなく、この機械の一部であった自分自身に対しても。私は参加したくなかった。このような不徳な行いのために、自分の手を汚したくなかった。

会議の後、帰り道で、私は勇気を振り絞って主君に話した。この数日体調が優れないことを口実に、その日は城

外での別の任務を受けさせてほしいと頼んだ。主君は、計画に心を奪われ、緊張していたため、私を冷ややかに一瞥し、一蹴した。「これは秦王と我々全員の生死を分ける時だ。弱音を吐く余地はない。お前は秦王府の兵士だ、そこにいなければならん！」彼の声は、もはやいかなる辞退も許さなかった。

私には選択肢がないことを悟った。私は一兵士としての身分、主君への忠誠心、そして私が逃れることのできない運命の歯車によって、縛られていた。

翌朝、事変が起こった日、玄武門の空気は鉛のように重かった。私と私の部隊は、皇太子派の援軍が来る可能性を一切遮断するため、外周の警備を命じられた。私は直接手を下した者ではなかったが、全てを聞いていた。馬のいななき、恐ろしい叫び声、短く、残忍にぶつかり合う武器の音、そして…死のような沈黙。その沈黙は、いかなる音よりも恐ろしかった。

しばらくして、秦王・李世民が玄武門から出てきた。私は彼を見つめ、かつての戦場での勇猛な明君の姿を思い出そうとした。しかし、違った。今、私の目の前に立っている人物は、全く異なる眼差しをしていた。冷たく、空虚で、一片の温かみもなく、感情の波一つない眼差し

であった。それは、権力と引き換えに全ての肉親の情を捨て去った者の眼差しであった。その一瞥が、私の心の中の「明君」の像を完全に殺してしまった。

李世民が即位し、唐の太宗と号した後、天下は新たな歴史のページをめくったと歓呼した。しかし、私にとって、理想は死んだ。兄弟の血の上に築かれた新王朝の栄光は、私にとってはただの汚辱であった。身にまとった軍服が重く感じられた。腰に佩いた剣もまた、見知らぬものとなった。私、陳康は、この時すでに四十歳近く、疲れ果て、空虚であった。私は、長年の戦による健康の衰えを理由に、退役を願い出た。私は軍服を脱ぎ、青春を共にした剣を捨て、華やかな都を離れ、打ち碎かれた魂を癒す何かを求めて、あてのない放浪の旅を始めた。

五祖の足元での三十年の沈黙

放浪の旅は、私を黄梅山にある東禅寺へと導いた。私が五祖・弘忍、慈悲深いが見通す眼差しを持つ禅師の前にひざまずいた時、私は彼に安楽を求めたわけではなかった。私はただ、身を寄せる場所、進むべき道を求めた。彼は、まだ戦場の面影を残す、四十歳近くの筋骨

たくましい男である私を見つめ、そして頷いた。私は髪を剃り、茶色の衣をまとい、師父から玄黙（げんもく）という法名を授かった。

禅門での最初の日々は、私が経験したどの戦いよりも過酷な戦いであった。それは、自分自身の肉体と精神との戦いであった。

運動に慣れた武将の肉体は、今や何時間も不動で座ることを強いられ、悲鳴を上げた。毎回の座禅は極刑であった。革の長靴を履き、鉄の鐙を踏むのに慣れた足は、今や組まなければならなかった。初めは、半跏趺坐（はんかふざ）しかできなかった。ほんのしばらくで、千本の針で骨髓を刺されるような激痛が走り、背骨に沿って炎が駆け上がるようであった。馬上で常にまっすぐであった私の背中では、今や疲れ果てていた。私は、他の兄弟弟子たちが結跏趺坐（けっかふざ）で、石像のように揺るぎなく座っているのを見る一方で、私は絶えず身じろぎし、額には汗が滲んでいた。

何人かの同門の助言に従い、私は厳しい方法を用いて自分を型にはめようとした。ある時は、平らな小石を両膝の上に置き、その重みで足が下がることを期待した。ま

たある時は、縄で両足を結跏趺坐の形に固く縛り、歯を食いしばって骨を砕くような痛みに耐えた。

そして私の心は、さらに野放図な馬であった。私が静まろうと努めるたびに、戦場の血なまぐさい光景が蘇ってきた。私は再び顔を見、再び叫び声を聞いた。ある夜、私は自分が玄武門にいる夢を見た。しかし、私が斬らなければならない相手は、かつて生死を共にした古い戦友であった。私は喉に詰まった無言の叫びと共に飛び起き、両手はまだ剣の柄を握っているかのように固く握りしめられていた。

数人の若い僧侶は、私がそのように苦闘するのを見て、くすくすと笑うのを隠せなかった。私は彼らが背後で囁くのを聞いた。「見ろよ、戦場の肉体を仏門に持ち込んでいるぞ」とか、「あんな人間がどうして修行できるんだ」。私は全て聞いていた。武将としての自尊心が私を怒らせたが、私はすぐにそれを抑え込み、代わりに恥と無力感に襲われた。

ある日、五祖・弘忍が通りかかり、私が痛みに顔をしかめ、両足に重い石を乗せて座禅を組んでいるのをご覧になった。師は立ち止まり、何も言わずに、ただ静かに首

を横に振って立ち去られた。翌日、師は私を内々に呼ばれ、厳しく言われた。

「そなたが、結跏趺坐ができるようになることを願って、石で足を押し、縄で体を縛っていると聞いた。そなたは、この肉体を、まるで野放図な馬を屈服させるかのように、屈服させようとしているのか？このそなたの肉体は、戦場でどれほどの殺業を犯してきたことか。今、それが少し痛むからといって、何だというのだ？そなたは万本の矢が心を貫くのに耐えられたのに、両足のわずかな痛みには耐えられないというのか？この痛みこそが、そなたの業を消しているのだ。そなたは石で足を押さえているが、そなたの心はまだ痛みと戦っている。修とは心を修めるのであり、足を修めるのではない。そなたの心がもはやそれと戦わなくなった時、石があろうがなかろうが、もはや重要であろうか？」

師父の厳しくも智慧に満ちた言葉は、まるで冷水を浴びせられたかのようにであった。私ははっと目覚めた。私は理解した。問題は石にあるのではなく、「座れなければならない」という私の執着心にあるのだと。その日から、

私は自ら石を取り去った。私はもはや痛みを敵とは見なさず、それを穏やかに受け入れ、観察することを学び始めた。それからというもの、私はもはや機械的に座禅を組むことを自分に強いることはなくなった。私は寺で最も骨の折れる仕事、薪割り、水汲み、米つきを願い出た。斧の一振りごと、坂を上る水汲みの一歩ごとに、私は全精神をそこに集中させた。次第に、過去の映像はもはや叫び声を上げなくなり、静まっていった。私の心身を真に制し、結跏趺坐で揺るぎなく座れるようになるまで、十年近くかかった。

次の十年、心が安らかになると、私は經典の学びにさらに注意を払うようになった。そして、その頃の東禅寺では、博識において大師兄・神秀（じんしゅう）に匹敵する者はいなかった。彼は教授師であり、僧団の長であった。私はしばしば大師兄の法話を聞きに行き、その広範な知識、經典をすらすらと引用する能力、そして流暢な弁舌に深く感銘を受けた。私の心の中で、私は彼を灯台のように、自分が従うべき輝かしい模範と見なしていた。私もまた、できるだけ多くの經典を読み、神秀がしたように、それらを記憶し、解釈しようと努めた。

しかし、再び、師父が私を啓発された。ある日の午後、私が書斎で経典を写していると、五祖が来られた。師は私に経典の内容について尋ねるのではなく、ただ簡単な質問をされた。「そなたがこれらの言葉を写す時、そなたの心は安らかか？」私は正直に答えた。「師父、私はより多くのことを理解したように感じますが、心は時々まだ揺れ動いております。」

五祖は私の目を深く見つめ、そしてゆっくりと言われた。

「玄黙よ、そなたの素地は文字にあるのではない。神秀には神秀の道があり、そなたにはそなたの道がある。他人の影を追うべきではない。経典は月を指す指のようなものだ。そなたが指ばかり見ていて、どうして月を見ることができようか？そなたに必要なのは、知識を増やすことではなく、そなたの赤い炎で鍛えられた心を静め、智慧が自ずと現れるようにすることだ。これからは、本を読むのを減らしなさい。ただ薪を割り、水を汲み、そして座禅を続けなさい。私がそなたに伝えた法門に専念し、自ら悟りを開きなさい。」

その啓発の言葉が、私の道を再確認させてくれた。私はもはや外面的な形を追うことなく、内なる心の修養に専

念することに戻った。私は、真の平安は、書物の中の理解からではなく、一つ一つの行動の中の静寂から来るのだと悟った。

この時期の最後の数年間は、慧能（えのう）が現れた時であった。その頃、師父・弘忍はすでに高齢であった。五百人以上の僧団全体に、大きな問いが広がり始めた。誰が衣鉢を継ぎ、禅宗の六祖となるにふさわしいのか？ 皆の考えでは、答えはあまりにも明らかであるように思われた。その人物は、大師兄・神秀以外にあり得なかった。彼は教授師であり、僧団の長であり、しばしば師父に代わって法を説いた。彼の「時々勤めて拂拭し、塵埃を惹かしむること勿れ」という法門は、最も正統で深遠な修行の道と見なされていた。私を含む寺のほとんどの僧侶は、彼を深く尊敬し、議論の余地のない後継者であると考えていた。寺の雰囲気は荘厳であると同時に期待に満ちており、誰もが師父が正式に決定を発表する日を待っていた。

我々は当時、禅宗の運命が、その博識な教授師にあるのではなく、南から来た、文字も読めない一人の木こり、まさに寺の門をくぐろうとしているその人物にあるとは、思いもよらなかった。

慧能が寺に来て、厨房での米つきを命じられた時、その頃には年長の僧となっていた私も、時折そのあたりで雑用を命じられることがあった。私は盧行者（ろあんじゃ）（当時の慧能の名）を観察する機会があった。私は、痩せて小柄な男が、米をつく時、杵の一振り一振りがしっかりとしており、規則正しく、少しの不平も疲れも見せないのを見た。彼の顔には常に、不思議なほどの穏やかさと安らぎが漂っていた。ある時、彼が汗だくで手を休めているのを見て、私は一杯の水を彼に持って行き、尋ねた。

「これほど骨の折れる仕事が、毎日繰り返されて、行者は疲れないのか？」

慧能はただ微笑み、簡単な一言で答えた。「身は疲れても、心は疲れません。」その言葉は私に強い衝撃を与え、私はこの文字も読めない木こりを、ますます尊敬するようになった。

私にはその素地があったので、偈（げ）を作る出来事が起こった時、私はそれを理解することができた。

皆の心の内を知って、ある日、五祖は僧団を集め、一つの課題を出された。師は言われた。

「生死の問題は、大事である。おのおの、自らの智慧を見て、もし本性を見た者があれば、偈を一つ作って私に示しなさい。もし大意を悟った者があれば、衣鉢を託し、六祖としよう。」

寺中が沈黙した。誰も偈を提出する勇気がなかった。私は、大師兄・神秀が非常に悩んでいたことを知っている。彼は数日間、部屋を行ったり来たりし、偈を提出したいが、自分の境地が師の心印にふさわしくないのではないかと恐れ、提出しなければ師父の期待を裏切るのではないかと恐れていた。

ついに、ある夜、彼は自分の偈をこっそりと本堂の廊下の壁に書いた。翌朝、寺中が大騒ぎになった。人々は壁の前に集まり、感嘆の声を上げた。師父でさえ、ご覧になった後、賞賛し、皆にこの偈に香を焚き、礼拝し、読誦すれば悪道に堕ちることはないと言った。その偈は次の通りであった。

「身は是れ菩提樹、(身是菩提樹)

心は明鏡台の如し。(心如明鏡臺)

時に勤めて拂拭し、(時時勤拂拭)

塵埃を惹かしむること勿れ。(勿使惹塵埃)」

これらの偈句を読んだ時、私は深く感銘を受けた。それは、私自身とほとんどの兄弟弟子たちが努力して歩んでいる修行の道を、完璧に表現していた。何年もの間、我々は「身」を菩提樹のように清浄に保ち、「心」を明鏡台のように清らかに保とうと努めてきたのではなかったか？しかし、心の奥底では、まだ何かが満たされない、その「勤勉さ」そのものに疲れを感じていた。

我々は当時、厨房で、米つきの行者がこの偈を聞いて、ただ微笑んで首を横に振ったことを知らなかった。文字を知らない慧能は、別の僧に頼んで、神秀の偈のすぐ隣の壁に、自分の偈を書いてもらった。それが、私の全人生を変えた偈であった。

「菩提本（もと）樹無く、（菩提本無樹）

明鏡も亦（また）台に非ず。（明鏡亦非臺）

本来無一物、（本來無一物）

何れの処にか塵埃を惹かん。（何處惹塵埃）」

その四句の偈を聞いた時、私の全身を電流が駆け抜けるかのようであった。魂の奥底からの強い衝撃。それは、私が何年もかけて懸命に磨き上げてきた「明鏡台」を、雷鳴の一撃で打ち砕くかのようであった。「本来無一物」！そうだ、もし本性が元々空であるならば、どこに拭うべき塵があろうか？私のこれまでの努力は全て、「有」への執着であった。慧能の偈は、真の解脱への道をまっすぐに指し示していた。私の心に長年あった最大のわだかまりが、一瞬にして解けた。私は悟りを開いたわけではなかったが、道を「見た」のだ。

その瞬間から、私は確信した。あの米つきの行者こそが、真に「見性（けんしょう）」した人物である、と。だから、後に五祖が慧能に密かに衣鉢を伝え、その夜のうちに彼を送り出したと知った時、私は少しも驚きも、嫉妬も感じなかった。寺中が騒然とし、一部の僧侶が、事実を受け入れられずに嫉妬心を燃やし、衣鉢を奪い返そうと追いかけた時、私はただ静かに自分の部屋に戻り、座禅を組んだ。その時の私の心は、不思議なほどに静かであった。

静寂の中の円満成就

衣鉢伝承の嵐の後、東禅寺はもはや以前ようではなかった。分裂があり、噂話があり、大師兄・神秀への哀悼の念と、南の後継者への懷疑があった。しかし、それらの全てはもはや私に影響を与えなかった。私の心は、雨の後に静まった湖面のようであった。私は寺を去ることなく、さらに何年も自分の修行の道を続けたが、今や全く異なる理解をもってであった。私はもはや懸命に「拭う」ことをせず、ただ静かにその「本来無一物」の中に生きた。私は神通力を求めず、超常的な体験もせず、ただ日々、内面の静寂に深く入り込んでいった。

七十歳を過ぎた頃、私は大衆との縁が尽きたと感じた。禅門の喧騒でさえ、もはや私には必要なかった。私は当時の住職に許しを請い、寺を離れ、近くの人里離れた山に籠り、晩年の修行に専念することにした。

私は小川のほとり、古い松の木の下に、自ら質素な庵を建てた。それからの私の生活は、非常に簡素なものとなった。私の友は、千の雲、山の風であった。小川のせせらぎは法の説法であり、松の歌は経文であった。毎日、

私は二つのことしか行わなかった。生命を維持するのに十分な手作業と、座禅である。

二十年の孤独な隠棲は、瞬く間に過ぎ去ったが、それはまた、一つの人生ほどにも長かった。その絶対的な静寂の中で、私は最後の執着を完全に手放した。武将・陳康の姿、秦王・李世民の姿、玄武門の変の光景、その全てが霧のように消え去った。三十年の苦行を積んだ禅僧・玄黙の姿さえも、もはやなかった。全てが軽やかになり、空となった。

私がこの世を去った日、私は九十歳を過ぎていた。私は自分の時を知っていた。その日の朝、私は体が軽やかで、心が水晶のように透明であるのを感じた。私は食事をとらず、ただ小川へ行って顔をきれいに洗い、そして最もきれいな僧衣をまとった。私は庵に戻り、全てを整然と片付け、そして座禅の姿勢をとり、最後の感謝の意を込めて、師父・弘忍がおられる黄梅山の方角を向いた。

私は全生涯を振り返った。理想に燃えた武将から、静けさを求める禅僧へと。そして私は、穏やかに微笑んだ。小川のせせら-ぎと松の歌声の中、私は安らかにこの世を去った。輝かしい光輪もなく、色とりどりの舍利もな

く、ただ、真の平安を見出した老兵の、自らの道を全うした無名の禅僧の、穏やかな旅立ちがあるだけであった。

（少年リバーは物語を終え、その目には深い敬意が輝いていた。彼は少し黙り、そして、まるで何か奇跡的なことを発見したかのように続けた。）

玄黙が慧能の偈を聞いた時、彼は大きな閃きを得ました。しかし今、この人生で、大法を修煉していると、私は神秀と慧能の二つの偈について、さらに興味深いことを発見しました。

それらは決して矛盾しておらず、どちらかが絶対的に「正しい」とか「間違い」とか言うこともできません。それらは、異なる次元の境地に対する法理のようなものです。

最初の境地では、修行を始めたばかりの人にとって、その心は思考、欲望、業力で満ち溢れており、まるで埃だらけの鏡のようです。この時、神秀の偈は完全に正しいのです。彼らは「時々勤めて拂拭し」、有為の努力をもって悪いものを取り除き、心を清らかに保たなければなりません。それは、通らなければならない必然の道です。

しかし、ある一定の境地まで修煉すると、彼らは突然、自分の本性が元々清らかであり、全く汚れていないことに気づきます。「埃」は元々仮の相であり、本質ではないのです。この時、彼らは第二の境地に突破し、慧能の偈（「本来無一物」）が彼らにとっての真理となります。これこそが、頓悟です。

しかし、奇跡はそこで終わりません。さらに高い境地に上がると、神秀の偈が再び正しくなるのが見えますが、それは全く異なる意味の次元においてです…そしてさらに高い次元で、全てがその次元の法に完全に同化した時、慧能の偈がまた正しい意味を表します。その過程は、それぞれの高い境地で、そのように繰り返されるのです。

それは、修煉の梯子（はしご）の段のようなものです。どの段も間違っているわけではなく、ただ、その人が立っている位置に、どの段がふさわしいかというだけです。

（少年は微笑んだ。まるで、自分の発見に非常に満足しているかのようであった。）

このことを理解すると、私は玄黙の旅路をさらに尊く思うようになります。彼は辛抱強く自分の梯子を上り続け、

ついに平安を見出しました。おそらく、修行する者全てが、天地を揺るがすようなことをする必要はないでしょう。悟りは、玄黙が目撃した六祖・慧能のように、最も平凡な人々から訪れることもあります。そして、祖師たちのような大智大慧を得られなくても、一生をかけて心性を修め、真の解脱を求めることは、それ自体が非常に価値のある旅路です。

それは私に、忍耐について、そして内面を修めることがどれほど重要であるかを、より深く理解させてくれます。それは、今私が法輪大法の本を読み、功法を煉る時と同じです。時として、最大の進歩は、内なる静かな変化の中にこそあるのです。

* * *

第十一章：無名の軍師

（今回、リバーの語り口は、一風変わった重みを帯びていた。まるで、古い絵巻を紐解いているかのようにであった。絵巻の前半は戦火であり、血で刻まれた誓いの痛みと憎しみ。後半は禅門の雲霞であり、真の修煉者の静寂

と智慧。少年は、一つの悪縁が最も奇跡的な方法で善解される物語を語ろうとしていた。）

今回の記憶は、私を一つの因縁へと連れ戻す。それは血と涙で書かれた負債であり、私の魂が十三世紀のベトナム、その国がまだ大越（ダイベト）と呼ばれていた地に来るよりも前の人生に端を発する。隠棲した禅師の物語を理解するためには、おそらく、一人の平凡な男、夫であり、父であった李綱（りこう）という名の男の痛みから始めなければならないだろう。

物語は南宋の末期、滅亡寸前の王朝の時代に起こった。不安な空気が至る所に立ち込めていた。しかし、北の辺境、金国と国境を接する小さな村では、李綱の生活は比較的平穏に過ぎていた。彼は官吏でもなければ、将軍でもなかった。彼はただの平凡な大工であり、その手は毎日ノミやカンナを握ることで荒れ、硬くなっていた。彼の最大の喜びであり、また全世界でもあったのは、質素なわらぶきの家の中にあった。働き者で優しい妻と、食べ盛りの息子と娘の二人であった。

私はその時の李綱の感覚、素朴で揺るぎない幸福感を今でも覚えている。仕事から帰ると、遠くから子供たちの明るい笑い声が聞こえてくるのが幸福であった。妻が囲炉裏のそばで忙しく立ち働き、夕餉の煙が炊きたてのご飯の香りと混じり合う姿を見るのが幸福であった。質素だが心温まる夕食、家族全員が彼自身が作った木の食卓を囲み、とりとめのない話をするのが幸福であった。李綱にとって、それで十分であった。彼は、この素朴な日々が永遠に続くこと以外、何も望んでいなかった。

しかし、辺境の地の平穏は、元来非常に脆いものであった。モンゴル騎馬の噂が届き始めていた。その軍隊はまるで鉄砲水のようにあり、行く先々では草木も生えぬと人々は語った。彼らは金国侵略の戦役を開始し、李綱の村のような国境沿いの村々は、戦争の息吹を感じ始めていた。時折、小規模な部隊が通りかかり、食料を略奪し、いざこざを引き起こした。不安が家々に忍び寄ってきたが、人々は災いが過ぎ去るというかすかな希望にすがりついていた。

ある秋の朝、李綱は家から二十キロほど離れた隣村へ、家の屋根を建て直す手伝いに行くことを引き受けた。仕事は一日で終わるはずだった。出かける前、彼は二人の

子供の頭を撫で、暗くなる前に帰ると約束した。彼は妻を見た。彼女は優しく微笑み、彼に握り飯の包みを渡した。それが、彼が彼らを生きている姿で見た最後であった。

仕事の最中、彼は突然、主要な道の方から悲鳴を聞いた。パニックに陥った、ぼろぼろの服を着た人々の群れが、村に向かって走りながら叫んでいた。

「モンゴル軍だ！モンゴル軍が略奪に来たぞ！奴らは川沿いの村々を虐殺している！」

李綱の心臓が止まるかのようにであった。彼の村は、まさに川沿いにあった。

もはや何も考えられず、李綱は急いで道具一式を放り出し、木に繋がれていた馬に駆け寄り、飛び乗って家へと全力で駆けた。慣れ親しんだ道が、今は果てしなく長く感じられた。風が耳元で唸ったが、彼に聞こえるのは、胸の中で張り裂けそうに鳴る自分の心臓の音だけであった。馬の蹄が地面を叩くたびに、それは彼の絶望的な祈りとなり、間に合うように、家族が無事であるようにと願った。彼は容赦なく馬を鞭打ち、ただ一刻も早く家に飛んで帰りたいと願った。

村から数里のところまで来た時、焦げ臭い煙の匂いが彼の鼻をついた。彼の心は沈んだ。彼は自分の村の方から黒い煙の柱が立ち上っているのを見た。死のような沈黙が支配していた。人の声も、家畜の鳴き声も聞こえない。ただ、燃え残ったわらぶき屋根を吹き抜ける風の音だけがあった。

李綱は、馬が完全に止まる前に飛び降り、よろめきながら自分の家へと走った。木の扉は斬り碎かれ、隅に追いやられていた。彼は中に飛び込み、妻と子供たちの名前を叫んだ。しかし、彼に返ってきたのは、身の毛もよだつ沈黙だけであった。

そして、彼は彼らを見た。目の前の光景に、彼の周りの天地は崩壊した。家の中のものは全て破壊され、ひっくり返されていた。そして、冷たい土の上、割れた皿や家具の破片の間に、三つの見慣れた体があった。彼の妻…そして、彼の二人の幼い子供たち…彼らはそこに、動かぬまま横たわり、その体には乾いた血の跡がまだ残っていた。彼らの目は大きく見開かれ、まだ極度の恐怖が刻み込まれていた。

彼は、あまりにも遅く帰り着いたのだ。

李綱は泣かなかった。涙は、彼の心と共に干上がってしまった。彼はひざまずき、震える手で妻の冷たい顔に、そして二人の子供たちの顔に触れた。彼がかつて抱きしめた温もりは、今や身の毛もよだつほどの氷のような冷たさに変わっていた。彼の世界、彼が愛した全て、彼が存在する全ての理由が、一瞬にして破壊された。痛み、無力感、間に合わなかったことへの自責の念、その全てが混じり合い、憎しみの炎となって燃え上がった。それは、激しく、そして暗かった。

彼はそこに、荒廃の中で座り、夜が更けるまで冷たい亡骸を抱きしめた。彼の頭の中には、ただ一つの思い、ただ一つの目的しかなかった。復讐だ。彼はもはや、優しい大工の李綱ではなかった。その瞬間から、彼は死んだ。生き残ったのは、憎しみによって動かされる一つの機械だけであった。

妻と子供たちを埋葬した後、李綱には失うものは何もなかった。彼は、さほど遠くない場所で激しい戦いが繰り広げられており、金軍がモンゴル軍の攻撃を食い止めようとしていると聞いた。少しのためらいもなく、彼はいくつかの質素な持ち物をまとめ、薪割りの斧を手に、旅

立った。彼は南宋の軍隊を探しはしなかった。彼の憎しみは国を区別せず、ただ一つの敵だけを狙っていた。

戦場に着くと、彼は混沌とした光景を目にした。金軍は、装備が整い、経験豊富なモンゴル騎兵の猛攻の前に、防衛線を維持しようと必死であった。

命令を待つことなく、いかなる戦術も必要とせず、李綱は言葉にならない雄叫びを上げた。それは、全てを失った者の痛みと憎しみの全てを込めた絶叫であった。彼はもはや敵軍も戦場も見えず、ただ家族を奪った亡霊たちしか見えなかった。斧を手にモンゴル軍の精鋭部隊に突入する彼は、まるで狩人に狂ったように襲いかかる傷ついた獣のようであった。

しかし、狂気は経験に取って代わることはできず、憎しみは鋭い刃を受け止めることはできなかった。モンゴルの兵士たちは、長い槍で彼を冷徹に突き刺した。彼は、心の痛みが大きすぎたため、肉体的な痛みはほとんど感じなかった。彼は倒れ、血を流し、彼の最初で最後の戦いの中で息絶えた。

最後の瞬間、息が次第に弱まっていく中で、妻と子供たちの姿が鮮明に蘇ってきた。痛みと憎しみは少しも和ら

がず、逆に、それはさらに激しく燃え上がった。李綱は血でかすんだ目を、灰色の空に向け、そして周りを囲む見知らぬ敵の顔を見つめた。残された全ての力をもって、彼は魂の底から一つの誓いを立てた。その誓いは響き渡り、彼の本性に深く刻み込まれた。

「来世があるならば、必ずやお前たちを見つけ出し、妻と子の恨みを晴らしてやる！」

それが、彼が闇に沈む前の最後の念であった。その誓いは、恨みに満ち、彼の魂に消えることのない印となり、清算の日を待つ因果の負債として、輪廻の輪へと彼を伴っていった。

そして、まさにその負債が、誰も予期せぬ方法で、別の地で、別の身分で、李綱の魂が大越の陳朝に転生した時に、天上によって解決されるべく計らわれていたのである。

大越への転生 – 兵書を秘めた僧侶

李綱の魂は、重い恨みの誓いを携えて、輪廻の輪に沈んでいった。しかし、憎悪の念のために暗い境涯に堕ちる代わりに、ある慈悲深い計らいが介入したかのようであった。負債は返済されなければならないが、殺業にさらに深く沈む道によってではなかった。その魂は、仏法が崇拜され、繁栄していた時代にあった地、陳朝の大越国で、新たな始まりへと導かれた。

私は庶民の家庭に生まれたが、幼い頃から変わった様子を見せていた。同年代の友人たちが遊びに興じている間、私はしばしば一人で何時間も座り、静かに空を流れる雲を眺めたり、巢に餌を運ぶ蟻の行列を観察したりしていた。私は万物に対して奇妙な共感を抱き、自分でも説明できない生命の苦悩について、漠然とした思いを抱いていた。

ある日、私が木の下に座り、枯れかかった一輪の花をじっと見つめていると、年老いた禅師が托鉢で村を通りかかった。彼の眼差しが私に留まった。彼は何も言わず、しばらく静かに観察した後、微笑んだ。その後、彼は私の両親を訪ね、こう言った。

「施主殿には、実に特別な心根を持ったご子息がおられる。この子には、稀有な静けさと慈悲の心

がある。これは良き種であり、もし正しく植え育てれば、将来は多くの人々を覆う大木となるだろう。」

少し間を置いて、禅師は続けた。

「拙僧は、村の端の丘の上にある小さな寺の住職である。もしお二方さえよろしければ、この子を小僧として寺に上がらせてみてはどうか。経典に親しみ、その善良な心を育むために。おそらく、それこそがこの子の道であろう。」

私の両親は、もともと因縁を信じる人々であったため、禅師の言葉を聞いて非常に感動し、敬虔に同意した。そして、十歳の年、私は家族に別れを告げ、その禅師の後を追って寺に上がった。彼こそが私の最初の師父であり、私に明静（みょうじょう）という法名を与えてくださった方であった。

寺での最初の数年間、私は主に禅門の規則を学び、経典を暗記し、座禅を組んだ。その頃の私の幼い心では、高尚な教えを完全に理解することはできなかったが、私は生まれつきの静けさと、他の小僧たちより優れた集中力を持っていた。師父はそれに気づき、私に複雑な哲学を

急いで説明することはなさらなかった。その代わり、彼は辛抱強く、葉を掃いたり、水を汲んだりといった日常の作業を通して、私の心根を磨き、仏法の最初の種を私の心に蒔いてくださった。

十三歳になると、心が枝を伸ばし、葉を広げ始め、それらの種は真に成長し始めた。私はもはやただ経典を暗記するだけでなく、その意味について深く考えるようになった。衆生の苦しみ、生死輪廻、師父が説かれる事柄が突如として生き生きとし、私の内なる探求心をより深く掻き立てた。

まさにこの時期、十三歳から十六歳頃にかけて、寺の経蔵が私の世界となった。師父は私が十分に成熟したと見て、仏典以外の書物を自由に読むことを許してくださった。初めは、儒家や道家の書物を手に取り、社会や天地の運行の道理をより深く理解したいと願った。

そして、ごく自然に、私は歴史の記録、王朝の興亡の物語に惹きつけられた。戦いの記録を読んでも、好戦的な者の興奮は感じず、むしろ深い哀れみを覚えた。まるで血脈の中に何か、目に見えない記憶があるかのように、私は特に兵の道の残酷さに敏感であった。そのことが、私を古代の兵法書へと駆り立てた。

その頃の私にとって、兵法とは人を殺す術ではなく、殺戮を終わらせるための術であった。私は、戦争とは単なる剣戟ではなく、知恵と人心の闘いでもあることに気づいた。私は、仏法の道理と兵法の間に、奇跡的な対応関係があることを見出した。優れた将軍は、無闇に殺生しないための慈悲の心を持ち、敵と己を知るための智慧を持ち、そして変事の前に乱れないための静けさを持たねばならない。それは、修行者と同じであった。

仏法の智慧、儒教・道教の深い理解、そして兵法への自然な精通が組み合わさって、私の中に、世事を他とは異なる形で理解する力が生まれた。寺の兄弟弟子たちは、私の精進と仏教知識を尊敬していたが、若い僧侶が何時間も囲碁の布石を並べ、まるで陣形を計算しているかのように呟いている姿を見て、少し理解しがたいと感じる部分もあった。

歳月が流れ、私は都の昇龍（タンロン）の西郊外に位置する、静かで清らかな小さな寺の住職に任じられた。寺は低い丘の上にあり、青々とした竹林に隠れるように佇み、俗世の塵を洗い流したいと願う者にとって理想的な場所であった。その頃、私はすでに五十歳になっており、心はほとんど波立たない湖面のようであった。私は、残

りの人生もそのように安らかに過ぎていくものだと思っていた。

しかし、因縁とは予測不可能なものである。

ある夏の午後、私が寺の庭の菩提樹の下で座禅を組んでいると、一人の若い客が訪れた。客は書生のように質素な服を着ていたが、その立ち居振る舞いや気品は、不思議な高貴さと英明さを漂わせていた。若者はそれを隠そうとしていたが、私はその内に秘められた帝王の真の気を感じ取った。彼に付き添っていたのは一人の護衛だけで、その者もまた庶民のように装い、寺の門で待っていた。

若い客は、非常に謙虚に合掌し、礼をした。彼は、行幸の途中で、寺の清らかなたたずまいを見て、一本の線香を供え、和尚に仏法についていくつか教えを乞いたいと願って立ち寄った、と語った。彼こそが、皇太子・陳欽（チャン・カム）、後に英明な王、陳仁宗（チャン・ニヤントン）となる人物であった。

私は若者を禅堂に招き入れ、蓮茶を淹れた。空気は静まり返り、ただ外の葉をそっと揺らす風の音だけが聞こえた。我々の会話は、皇太子からの「心」という文字、衆

生の苦しみ、そして悟りへの道についての問いから始まった。若者はまだ若かったが、その問いは非常に深く、民族と人間の運命に対する大きな苦悩を示していた。

私は、これが普通の人ではないと悟った。これは、帝王の肉体に宿る未来の菩薩であった。彼の素養と慈悲深い心を見て、私はためらうことなく、自分が悟ったことを分かち合った。

我々の話は何時間にも及び、自然と仏法の解脱の道から、儒家の国を治め民を安んずる道へと移っていった。皇太子は尋ねた。

「和尚よ、万民を豊かにし、国を泰平にし、戦火を避けるには、どうすればよいのでしょうか？」

私は若者の目を深く見つめ、ゆっくりと答えた。

「国を泰平にするには、その根は民の心になければなりません。民の心が安らかであればこそ、国は安定します。民の心を安らかにするには、上に立つ者が慈悲の心を持ち、民を子のように愛し、万民の利益を自らの利益の上に置くことを知らねばなりません。それが『仁』です。しかし、仁の

心だけでは十分ではありません。その平穩を外敵から守るためには、上に立つ者は智慧と決断力もまた持たねばなりません。それが『智』と『勇』です。」

皇太子・陳欽は黙って考え込み、そしてまた尋ねた。

「では、軍を率い、社稷を守る上での『智』と『勇』について、和尚によれば、その核心は何でしょうか？」

この時、私は因縁が来たことを知った。私は具体的な戦術については語らず、ただいくつかの大きな道理を述べた。

「兵法には無数の妙計がありますが、要約すれば三つのことに尽きます。一つは、己を知り、敵を知ること。二つ目は、兵士の心を得て、上下が心を一つにすること。三つ目は、弱をもって強に抗し、少をもって多を敵とし、時機と地の利を用いて人の力を補うことを知ることです。しかし、何よりも、兵を用いる者の最高の境地は、戦うところ必ず勝つことではなく、戦わずして勝つこと、威徳をもって相手を屈服させること、あるいはも

し武力を用いざるを得ない場合でも、双方の損害を最小限に抑え、最も速やかに戦争を終わらせることです。それこそが、仁者の『勇』です。」

私が口にする一言一言を、皇太子は注意深く聞き、その目は理解の光で輝いた。彼は具体的な計略についてこれ以上は尋ねなかったが、私は彼が軍を率いること、その核心的な道理を把握したことを知っていた。その日の出会いは、黄昏が訪れると共に終わった。皇太子・陳欽は、敬意と感謝に満ちた眼差しで私に別れを告げた。彼は、再び教えを乞いに来ると約束した。

若い皇太子の姿が竹林の向こうに消えた後、私は一人、寺の庭に佇んでいた。私は、大きな因縁がたった今結ばれたのを感じた。隠棲した僧侶と、未来の王。私は漠然と、自分が長年蓄積してきた兵法の知識が、おそらく自分自身のためだけのものではなかったのだろうと感じた。おそらく、それらは正しい人、正しい時を待ち、この地の何百万もの生命の平穏を守ることに貢献できる、より大きなことのために用いられるのを待っていたのだろう。

かつての李綱の憎しみは、運命によって、その時の私自身でさえも完全には理解できない方法で、解決されるべく計らわれているようであった。

姿なき軍師－国に力を貸す

約束通り、最初の出会いの後、皇太子・陳欽、そして後の皇帝・陳仁宗は、時折私の小さな寺を訪れた。陛下の訪問は常に秘密裏に行われ、仰々しい儀式はなく、ただ数人の信頼できる護衛だけを伴っていた。陛下は君主としてではなく、道を求める者として、静けさと導きを求めて来られた。

我々の対話は、通常、仏法を中心に展開された。若き王は、世の憂い、国家の運命をその手に握る者の重荷を抱え、無常、慈悲、そして解脱の道についての教えの中に解放を求めてやって来た。私は、皇帝の龍袍の裏に、仏門に強く心を寄せる魂があることをはっきりと見る事ができた。話をするたびに、私はただ経文を解説するだけでなく、彼の心に悟りの種、より高尚な出世間の道の種を蒔こうと努めた。

元・モンゴル帝国からの脅威がますます大きくなるにつれ、我々の会話には国策に関する内容も加わるようになった。王は私に、どの戦をすべきか、どこに罌を仕掛け

るべきかとは尋ねなかった。その代わり、彼はより大きな問いを投げかけた。

ある時、陛下は憂いに満ちた表情で尋ねられた。

「和尚よ、敵は虎狼のように強く、我が軍は数で劣る。どうすれば社稷を守れるでしょうか？」

私はすぐには答えず、ただ彼に一杯の茶を注いだ。茶の香りが広がるのを待って、私はゆっくりと語り始めた。

「陛下、最も堅固な城砦は土石で築かれるものではなく、民の心で築かれるものです。敵は城を破ることはできても、万民の意志を破ることはできません。どうか陛下、民の力を休ませ、朝廷が真に民を思い、愛していることを示してください。万民が国の事を家の事と見なす時、一人一人の民が兵士となり、一つ一つの村が要塞となります。その時、我が国の力は満ち潮のように高まり、いかなる敵もそれを止めることはできなくなります。」

また別の時、王が、派閥や皇族内の確執の中で人を用いることに悩んでいた時、私はこう言った。

「大きな海であってこそ、大きな船を浮かべることができます。帝王の心は海のように広大で、百の川を受け入れることができなければなりません。世に才ある者は不足していませんが、彼らが国のために尽くすかどうかは、上に立つ者の心次第です。どうか陛下、些細な確執は捨て置き、ただ彼らの才能と忠義心を見て、重用してください。特に、兵権を握る者に対しては、陛下は完全に信頼し、重責を委ね、疑念を抱いてはなりません。将帥が後方の憂いなくして戦場に出られる時、彼らは初めて全心全霊を尽くして敵に当たることができるのです。」

私は、朝廷に興道王・陳国峻という、傑出した才能を持つが皇族と水面下の不和を抱える将軍がいることを知っていた。私が口にした言葉は、名指しこそしなかったが、陳仁宗のような英明な王であれば理解できると信じていた。そして実際、後に王が興道王を完全に信頼し、軍の全指揮権を委ねたことは、最も賢明な決定の一つであり、偉大な勝利へと導く鍵となった。

私は決して自分を軍師だと思ったことはない。私はただの一人の僧侶であり、自分が読んだこと、考えたことに

基づいて、大きな道理についての助言をするだけであった。私は「術」についてではなく、ただ「道」について語った。私は具体的な計略を立てることはなかったが、王に、長期的な抗戦の準備、全民の力への依存、そして焦土作戦の実行によって、土地に不慣れな侵略軍の生気を枯渇させるという、全体的な戦略を示唆しようと努めた。

王が来ては去るたびに、私は再び自らの清らかな生活に戻り、日々経を唱え、座禅を組んだ。私は戦況について尋ねることも、功績を記録されることを望むこともしなかった。私の役割はただ、聞く者であり、示唆する者であり、民族の最も困難な時期にある若き王のための、静かな精神的な支えであることであった。私のささやかな貢献があったとしても、それは陳朝の全軍民の愛国心と不屈の意志という大海に注がれた、一滴の水のようなものであった。

何年も後、民衆を率いて二度にわたり元・モンゴル軍を打ち破り、泰平で豊かな国を築き上げた後、陳仁宗王は再び私を訪ねてきた。今回、陛下が来られたのは国事を問うためではなく、熟した決意を表すためであった。

その時、王はまだ非常に若く、三十五歳になったばかりであったが、その眼差しにはもはや世の憂いはなく、平安と大きな渴望が輝いていた。彼は私に、国や祖先に対する責任は果たした、そして今こそ、彼自身の道——出家修行の道——を歩む時であると語った。彼は私に、彼を弟子として受け入れ、解脱の道へと導いてほしいと申し出た。

私は王の大願に深く感服した。栄華の頂点にある者が、真理を求めて全てを捨て去ることができるとは、非常に稀なことであった。しかし、私は謙虚に辞退した。私は、自分の道徳的境地はまだ浅く、陛下のように仏法と深い因縁を持つ帝王の師となるには及ばないと述べた。

王の志が固いことを見て、私は誠心誠意、自分の考えをいくつか分かち合った。

「陛下、陛下が出家の大きな願いをお持ちであることは、実に大きな福でございます。中国へ渡り禅宗の祖の地を訪ねること、あるいは天竺の仏国土へ巡礼し原初の教えを学ぶこと、いずれも非常に高貴な大願でございます。」

私は少し間を置き、そして低い、温かい声で続けた。

「しかしながら、拙僧の浅見では、修行の万法も、その核心はただ一つの『心』という文字に帰すると存じます。身がどこにあるかは、心がどこに向かうかほど重要ではございません。仏国土は遠い天竺にのみあるのではなく、一人一人の心の内にもあるのです。古人は『頭上三尺に神有り』と申します。我々が誠心誠意、自らを修め、戒律を守りさえすれば、どこにしようとも、諸仏、諸菩薩は全てを見通し、加持してくださいます。」

「それこそが、拙僧がこの地で長年隠棲し、心に念じ、従ってきた道でもございます。拙僧は信じます。陛下は、南国の聖なる山、安子山（イェントゥ）へ行かれても、あるいはこの世の他のいかなる場所へ行かれてもよいのです。陛下の心を安らかにし、陛下が精進して修行できる場所、そこが陛下の道場でございます。どの道か、どうかご縁にお任せください。」

陳仁宗王はしばらくの間、黙っていた。その眼差しは、深い理解の光で輝いていた。彼は合掌して私に感謝し、それ以上は何も言わなかったが、私は彼が自分自身の答えを見出したことを知っていた。

その後まもなく、彼は皇太子に譲位し、太上皇となった。そして数年後、朝政が安定すると、彼は実際に安子山に登り、偉大な修行の旅を始め、竹林禅派を開き、ベトナム仏教の最も美しい姿の一つ、永遠の象徴となった。

私にとって、このような王であり仏である方の旅路を目撃し、そのごく一部に貢献できたことは、大きな幸運であった。隠棲した一僧侶の助言が、国を守る一助となり、そして後に一人の王を仏道へと導くことになろうとは、夢にも思わなかった。全ては、運命の采配であったかのようである。

得道と因縁の悟り

陳仁宗王が安子山に登られた後、私の生活は再び本来の静けさに戻った。国家の大事を論じる会談はもはやなく、その代わりに、修行に専念する長い日々が続いた。時代の多くの浮き沈みを経験し、大きな変事を目の当たりにして、私の心はますます静まっていった。私はもはや、兵法や世事の知識に心を動かされることなく、その理解そのものを用いて、苦しみ、生死、そして輪廻の本質をより深く観照した。

私は静かに自分の修行の道が続けた。毎日、私は変わらず経を唱え、座禅を組み、労作に励んだ。私は神通力を求めず、特異な能力が開かれることを望まなかった。私の唯一の目標は、意識に残る最後の塵を完全に洗い流し、絶対的な清らかさと静寂に達することであった。

歳月が流れ、私の髪は霜のように真っ白になった。七十歳近くになった時、私は自分の道徳的境地が新たな段階に達したのを感じた。肉体は老いて弱っていたが、精神は非常に明晰であった。

ある静かな深夜、私が深く定に入っていると、天目が突然開かれた。

その瞬間、私は前世を完全に見通した。かつての戦士、李綱の復讐の誓いこそが、禅師・明静がその智慧を用いて、一つの民族が共通の敵に抗うのを助ける機会を得るための因縁であった。憎しみの負債は剣で返されるのではなく、智慧と慈悲の道によって善解された。無量の劫からの全ての冤罪、業障は霧のように消え去り、私の心は完全に空となり、安らかで、自在であった。

晩年の日々、私は絶対的な平安の中で生きた。ある朝、最後の勤行を終えた後、私は弟子たちを呼び寄せ、いく

つかの言葉を遺し、そして結跏趺坐の姿勢をとり、安らかに入寂した。

李綱の誓いは果たされた。陳朝との縁は終わった。そして、禪師・明静の旅もまた、輪廻の輪の中で新たな旅を始めるために、幕を閉じる時が来たのであった。

* * *

第十二章： 米国国務省顧問

（今回、リバーの記憶はもはや禅門の雲霞でも、失われた文明の光でもなかった。それは異なる色を帯びていた。権力の回廊、戦略地図、そして葉巻の煙が漂う、冷たい

灰色の世界であった。ここは理性と地政学的な計算によって動かされる世界であり、精神性が入り込む余地はほとんどないように思われたが、因縁と業報は静かに、それ自体の法則に従って働き続けていた。)

この人生は非常に最近のもので、二十世紀半ばのワシントン D.C.の密室での息詰まるような空気さえ感じられるほど近い。その人生で、私はフレダー・ライン、アメリカの外交官であり、米国国務省の政策顧問であった。

これは、私がいかなる法門をも修煉していなかった人生である。私は政治アナリストであり、私の思考や決定は、当時の政治家としての視点から、私が学び、蓄積した経験に完全に基づいていた。

私は学問的な背景を持つ家庭に生まれ、早くから国際問題に情熱を示した。名門大学を卒業後、1930 年代後半に国務省に入省した。キャリアの初期にはヨーロッパ中を旅し、ファシズムの台頭、第二次世界大戦の残酷さ、そして新たな対立の萌芽となる最初の計算をも目の当たりにした。戦後、ウィーンとモスクワで働いた数年間は、私に共産圏の思考様式と戦略を深く理解させた。

アジアで冷戦の火の手が上がると、私は南ベトナム米国大使に任命された。それは試練に満ちた任期であった。私はサイゴンに住み、その蒸し暑い空気を吸い、何十年もの戦争の後に形作られようとしていた社会の複雑さを目撃した。私は政治家、将軍、そして一般市民と接した。まさにその直接的な経験が、私に異なる視点、ワシントンに送られる無味乾燥な報告書では決して描ききれない洞察を与えてくれた。大使の任期を終えた後、私は帰国し、国務省の上級顧問として、主に対外政策問題を担当する職に就いた。

当時は 1950 年代、1960 年代であり、ワシントン全体が「ドミノ理論」の影に覆われていた。東南アジアにおける共産主義の拡大への恐怖は現実のものであり、それはほぼ全ての政策決定を支配していた。

私はその脅威をよく理解していた。私は夢想家でもなければ、政治的に *наивно* でもなかった。しかし、ヨーロッパでの、そして特にベトナムでの経験は、この理論をベトナムのような複雑な文化と歴史を持つ国に機械的に適用することは、致命的な過ちになると私に信じさせた。

上級会議の席で、将軍や「タカ派」の政治家たちの好戦的な声の中で、私はしばしば異なる意見を持つ者であった。私は、武力は持続可能な解決策にはなり得ないと主張した。我々が金銭、武器、そしてアメリカ兵の命までもを、自国民からの確固たる支持を得ていない政権を支えるために注ぎ込むことは、砂上の楼閣を築くようなものだ。この戦争が起これば、それは共産主義と資本主義という二つのイデオロギー間の戦いだけでなく、ナショナリズムの戦いにもなるだろう。そして歴史が示すように、いかなる大国も、不屈の民族のナショナリズムに打ち勝つことはできない。

奇妙なことに、ベトナムのことを思うたび、私の内には特別な苦悩、言葉にできない心の痛みが湧き上がった。当時、私はそれを、かつて勤務した土地に対する一人の外交官の愛着だとしか考えていなかった。なぜ、あの土地がさらに爆弾で破壊される光景や、そこの人々がさらに苦しむことを思うと、これほど奇妙な悲しみを覚えるのか、私には説明できなかった。ただ、一人のアナリストとしての直感と、心の奥底からの漠然とした感覚によって、ベトナムへの大規模な軍事介入は、全ての当事者にとって大惨事になるであろうことだけは、分かっていた。

そして私は、自分の声が、日増しに強まる好戦的な嵐の中の少数派であることを知りながらも、自分の全ての知識と経験をもって、それらの警告を発しようと努めた。

「タカ派」の嵐の中の異なる声

アメリカが東南アジアの泥沼にますます深く足を踏み入れ始めると、国務省にある私のオフィスは、主流とは逆行することを知りつつも、分析や報告書が生まれる場所となった。私は公然と反対はしなかった。それは外交の世界のやり方ではなかったからだ。その代わり、私は内部の会議や公式文書を通じて、理性が勝利することを願いながら、根気強く自分の評価を提示し続けた。

私は、ベトナムも、それ以前の朝鮮半島も、我々とソビエト連邦との世界的な対立のための「代理戦争の戦場」に徐々になっていると分析した。まさに我々と彼らが、それらの国々をチェス盤に変え、現地の住民が全ての苦しみを負わされる駒となっているのだ。私は、軍事介入は火に油を注ぐだけであり、イデオロギー色の濃い内戦を、外国の侵略に対する戦争へと変貌させ、それは我々の敵にさらなる力と正当性を与えるだけだと強調した。

ある分析では、私は紛争の中心人物である南のゴ・ディン・ジェムと北のホー・チ・ミンについて、多くのページを割いて述べた。冷戦の対立的なレンズを脇に置き、私は彼らを民族の指導者として見ようと努めた。私は両者に、独立し、統一され、国際舞台で地位を持つベトナムへの共通の渴望を見た。致命的な違いは、彼らが選んだ道にあった――一方は親欧米のナショナリズム、もう一方は共産主義であった。

そして、この状況をさらに痛烈に皮肉なものにしていたのは、我々が常に敵と見なされていたわけではなかったという事実であった。私は報告書の中で、CIA の前身である OSS の専門家たちが、第二次世界大戦中に日本のファシストと戦うため、ホー・チ・ミン氏と彼の部隊と協力したことがあると繰り返し述べた。ベトミン指導部がアメリカ人に好感を抱き、我々を自由の象徴、反植民地主義の象徴と見ていた時期があったのだ。1945 年以降でさえ、ホー・チ・ミン氏はトルーマン大統領に何度も手紙を送り、アメリカによる独立の承認と協力関係の構築を望む意向を表明していた。

しかし、それらの手紙は返信されることはなかった。冷戦という背景と、ソビエト連邦に対抗するためにヨーロ

ッパでフランスを主要な同盟国として維持する必要性から、ワシントンはそれらの申し出を無視し、フランスの側に立つことを選んだ。

ワシントンでの長い夜、私はしばしば答えのない問いに自らを苛んだ。私はメモに、歴史は全く異なる方向に進んだかもしれない、と書いた。もし 1945 年から 1954 年の間に、アメリカがフランスの側につくことを選ばず、代わりに中立的な役割を保つか、あるいはさらに進んでフランスとベトミンの間の調停役を買って出ていたら？もし我々が、日本や韓国にしたように、マーシャル・プランのビジョンを用いてベトナムの復興と自由経済の構築を助けていたら、今日の局面は違っていたのではないか？

もちろん、私の同僚たちは、証明する責任はホー・チ・ミン側にあると主張するだろう。しかし、私は逆の仮説も立てた。もし彼が、自分の道は純粹に民族解放のためであり、共産主義陣営にはつかないと公に宣言するほどの賢明さを持っていたとしたら、ワシントンは彼を信じただろうか？それとも、当時の共産主義に対するパラノイアと恐怖はあまりにも大きく、モスクワや北京と、た

とえ表面的な関係であっても、繋がりを持つ者は誰でも、許されざる敵と見なされたのだろうか？

私は、我々が彼らに他の選択肢を与えなかったのではないかと恐れている。我々は外交の扉を固く閉ざし、そして今、彼らが自分たちのためにすでに開かれていた別の扉、中国とソビエト連邦の腕の中へと入っていったことに驚いている。

そして今や、北の普通の兵士や農民の目には、アメリカのイメージは完全にフランス帝国のイメージと同一視されてしまっている。彼らはプロパガンダを教え込まれ、我々がただの新型植民地勢力であると信じている。彼らは、ドミノ理論や世界的なパワーバランスに関する我々の複雑な計算を理解することはできない。

さらに、ディエンビエンフーでの勝利は、極限まで高まった民族的誇りを生み出した。彼らはヨーロッパの軍事大国を打ち破り、その心の中では、党の指導の下、打ち破れない敵はいないと信じている。まさにその自信、ある意味で主観的ですからあるその心理が、彼らをアメリカの力に対して少しも恐れさせなかった。彼らは我々を、小国が超大国を見る目ではなく、かつて「侵略者」に勝

利し、それを再び成し遂げる準備ができている民族の目で見ていた。

ナショナリズムとイデオロギーが一つに溶け合う時、それは我々が決して過小評価できない力を生み出す。米軍を投入することは、彼らのプロパガンダをさらに強化し、我々を、本来であれば友人であったかもしれない民族全体の目から見て、直接的な敵に変えてしまうだけだろう。

泥沼化の目撃と絶え間ない努力

時が流れ、私の分析、密室の会議で退けられた警告は、毎晩のニュース速報で痛ましい現実となった。一年、また一年と、アメリカは戦争の泥沼に深く沈んでいった。私がかつて紙の上で予測した数字は、今や新聞の冷たい見出しとなった。ベトナム駐留米兵の数は十万、そして三十万、そして五十万の閾値を超えた。死傷者の数も、ほぼ垂直なグラフで増加していった。

ケサン、テト攻勢、ハンバーガー・ヒルといった見知らぬ名前が、突如としてアメリカの各家庭の悪夢となった。小さなグループから始まった反戦運動は、数万人が参加

する大規模なデモへと燃え上がった。アメリカ社会の分裂はますます深まっていった。全てが、私が警告した通りに、そしてそれ以上に悪化していった。

しかし、それは理性の勝利ではなかった。それは悲劇であった。重苦しい自責の念が、私のキャリアの最後の数年間を覆った。巨大な戦争機械が、一度始動すると、あらゆる外交努力、あらゆる和解の可能性をことごとく粉碎していくのを、ただ見ているしかない無力感を感じた。私は死傷者報告書を、アナリストとしてではなく、誰かの息子、夫、父親の名前を見ている一人の人間として読んだ。

爆撃された村のニュース一つ一つ、テレビに映る疲れた若い兵士の姿一つ一つが、私の良心をえぐるナイフのようであった。私は、戦争を引き起こしたからではなく、それを阻止するだけの力も、影響力もなかったという、一部の責任を感じていた。ベトナムという土地に対するあの特別な心の痛みは、私の中でますます明確になっていったが、私はまだそれを正確に名付けることはできなかった。

状況が非常に悪化してからも、私は諦めなかった。私は自分の役割の中で、秘密の連絡ルートを推進し続け、交

渉による解決策のためのかすかな希望の光を探し続けた。私は、たとえ戦場で勝てなくとも、我々は名誉ある撤退の方法を見つけなければならず、それは外交の道を通してのみ達成できると主張した。

1968 年、政府の機構の中で自分にできることの限界を感じた時、私は正式に退職を願い出た。しかし、退職は関心を止めることを意味しなかった。何十年もの外交官としての習慣、戦争への苦悩は、振り払うことができなかった。

人生最後の三年間、1968 年から 1971 年まで、私はしばしば自分の書斎で時間を過ごし、国務省にまだ在職している古い同僚たちに、個人的な手紙や分析を送った。私は解決策を提案し続け、世界の政治情勢の変化を分析し、そして戦争のあまりにも高い代償について彼らに絶えず思い出させた。それらの努力は、おそらく大きな川に投げ込まれた小石のようなもので、いくつかの波紋を立てて沈んでいき、流れを変えることはできなかっただろう。

フレダー・ラインは 1971 年に亡くなった。ベトナムの平和と、アメリカの名誉ある撤退という願いが、まだ遠い、未完のままであった時に。

...

その人生は、政治的な計算、緊張、そして静かな悲しみに満ちた人生であった。私、フレダー・ラインという身分で、自分が正しいと信じることをしようと努め、多くの苦しみをもたらすと予見した戦争を阻止しようとした。しかし、一人の力は、一度始動した戦争機械、一つの時代の偏見と恐怖の前には、あまりにも小さかった。

思い出すと、私は今でも当時のワシントン D.C.の息詰まるような空気と、去っていかねばならなかった若い兵士たちの姿を感じる。奇妙なことに、私は常にベトナムに特別な関心を抱いていた。その当時はなぜだか理解できなかった、ある種の悲しみを。ただ、その土地でこれ以上血が流れるのを見たくないということだけは分かっていた。それは、単なる政治分析を超えた、もっと強烈な感覚であった。

今、大越の明静禅師として生きた前世のことや、そこに「偶然」大使として派遣されたことを知って、私はぼんやりと理解し始めた。おそらく、遠い昔からの感情や因縁が、私に静かに影響を与えていたのだろう。フレダー・ラインの人生では修煉者ではなかったが、おそらく前世からのわずかな慈悲が残り、それが良心の呵責、平和

のために声を上げなければならないという衝動に変わったのだろう。

そして私はまた、どんな役割であれ、隠棲した禅師であれ、権力の中枢にいる政治顧問であれ、良心を保ち、善を行おうと努めることは、等しく重要であると気づいた。法輪大法は、全ての事柄には因果があり、我々ができる最善のことは、いかなる状況においても真・善・忍に従って行動することだと教えている。

* * *

第十三章：ある天国の王主

（今回、リバーの語り口は全く異なっていた。もはや禅師の沈黙でも、外交官の苦悩でもない。少年の声は澄み渡っていたが、威厳と輝きを帯びており、まるで記憶を

語り直しているのではなく、自らの原初の本体へと帰っているかのようであった。これは始まりの物語であり、そして、全ての答えでもあった。)

私が語ってきた全ての人生は、今振り返れば、まるで芝居のようであり、一本道の旅路であった。神として、將軍として、職人として、あるいは動物としての、一つ一つの役、一つ一つの経験は、全てが準備であり、私の真の根源に結びついた、より深い目的、ある使命を果たすための鍛錬であった。

そして、その根源についての真実、私が見たものこそが、私がなぜこれらの非凡な経験をしたのか、そして全ての輪廻の旅の目的を解き明かす、最後の、そして最も重要な一片であった。

私はかつて、極めて高い次元に位置する、人間界とは全く物質が異なる、非常に広大で美しい天国の王主であった。私が見たその境地において、私の称号は天景王（てんけいおう）であった。

そこには、ここにあるような太陽はなかった。私の全世界は、私自身――王主――から放たれる後光によって照らされていた。その光は暖かく、純粹で、万物を育んだ。宮殿や寺院の建築は、もし人間の言葉で描写するならば、おそらく貴重な宝石や水晶としか言いようのないもので作られていたが、その本質は全く異なっていた。それらは高次元の物質であり、生命とエネルギーを内に宿し、それ自体が私の念に応じて無数の色に変化する奇跡的な光を放っていた。

その木々や草花は、俗世の言語では到底表現し尽くせないほど、壮麗な色彩を帯びていた。それらは単に緑、赤、あるいは黄色なのではなく、生き生きとした色彩の帯であり、自ら変化し、互いに溶け合っていた。それらには靈智があり、一枚の葉、一輪の花が、そよ風に乗って妙なる音楽を奏でることができた。靈獸たちもまた非常に美しく、温和で、他の生命体と理解し合い、対話することができた。岩や山でさえも無生物ではなく、それらにも生命があり、宇宙のこだまのような重々しい音を発することができた。私の天国の衆生は無量無辺であり、神々、仙人、菩薩、羅漢、そして人間の想像力では到底及びもつかない形態を持つ無数の生命体が含まれていた。

彼らは皆、私の導きと保護の下、その宇宙の層の法理に従い、絶対的な調和と安楽の中で生きていた。

しかし、宇宙にもまた成住壊滅（せいじゅうかいめつ）の法則がある。果てしなく長い年月の後、私は自分の天国だけでなく、近隣の世界にも衰退の兆しが見え始めていることに気づき始めた。生命は初めの頃ほど純粹ではなくなり、物質は変異し始め、旧宇宙の法理は終焉を迎えようとしていた。自分の世界が徐々に破滅に向かい、私が保護する責任を負う無数の衆生が淘汰される危機に瀕しているのを見て、私の心は非常に痛み、憂えた。

まさにその時、至高の仏主、創世主が、宇宙の層々の間に現れた。その方は希望の光と、未曾有の解決策を携えておられた。その方は、末法の時期に自ら人間界に下生し、全宇宙の法を正し、全てを再創造し、衆生を救済度されるという。私は、他の多くの天国の王主たちと共に、創世主に拝謁するという万古の機縁に恵まれた。

これが私の世界と衆生にとって唯一の希望であると悟り、私は少しのためらいもなく、その方に敬虔に神聖な誓いを立てた。その誓いは、今なお私の心に響き渡っている。

「私は王主の位を捨て、あなた様に付き従って俗世に下ることを誓います。どうか私を人間として転生させ、あなた様が正式に宇宙を正す大法を広く伝えられる時まで待たせてください。私はその時、修煉の道を探し求め、師が法を正すのを助けます。」

去る前に、私は自分の天国の中心に、私の元神と見えない形で繋がれた、奇跡的な光の球を残した。私が善い行いをすればその球は輝き、悪い行いをすればそれは暗くなる。それこそが希望であり、私の世界の衆生が、私が誓いを果たす日を待ちながら見守るための灯台であった。

その神聖な誓いは、神々によって証された。その瞬間から、私の運命は再定義され、法を正す時期の全宇宙の運命と結びついた。そして、あの希望の球は、その王主が苦難に満ちた下生の道を歩み始めるのを見守る、長い長い旅を始めた。

果てしなき下生の旅

王主の位を一時的に離れることは、喪失ではなく、意図的な旅であり、自らの衆生に対する無限の慈悲と責任から発したものであった。それは王冠を脱ぐようなものではなく、一家の主が、輝かしい故郷と愛する人々を一時的に離れ、ただ一つの目的――全てを救う薬方を見つけ出すために――未知で、迷いと苦しみに満ちた俗世へと勇敢に足を踏み入れるようなものであった。

その下への旅は、果てしなく長かった。そして今、私の天目で見返すと、私はその本質をようやく理解した。それは、偶然の旅ではなく、智慧に満ちた一連の采配であったのだ。

そして、今ではっきりと見えたことが一つある。その道のりの各段階で、私は何かを「託す」とか「選ぶ」とかいう、意識的な状態にはいなかった。一度ある次元に下りると、私の元神は完全に、より高次元の神々によって制御され、采配された。私が結んだ善悪の因縁、宇宙の束縛の法則、そして誓いの究極の使命に基づき、まさに神々が私を新たな「役」に就かせたのである。もちろん、その役を演じている間、私はこのことを全く意識していなかった。

そしてこれもまた、今になってようやく悟った宇宙の不変の法則である。上の次元から下の次元へ下りると、より高い境地についての智慧や記憶は封印される。私はもはや上を見ることができず、自分と同じか、それより低い境地しか見ることができなかった。例えば、私が非常に高い次元から神の境地に下りると、私は本当にその神となり、その次元の他の神々と同等の力と認識を持つようになる。そしてその時の私の認識では、私はその次元の他の神々と共に、自分たちの世界が偉大であると信じ、それがすでに最高の境地であるとさえ誤解するだろう。

この封印と弱体化は、私がその次元の法則の中で、均衡を破ることなく存在するための必須条件であった。こうして、私は次々と迷いの衣をまとい、真の根源を忘れ、ただかつての誓いと、目に見えず、最も脆い繋がりだけを保ちながら、一步一步、人間界へと近づいていった。

この下生の旅の人生において、私は多くの因縁を結んだ。善縁もあれば、悪縁もあった。出会って友人や親族となった生命もいた。私が無意識に傷つけ、返さねばならないと知る負債を作ってしまった生命もいた。それらの関

係は全て記録され、後に人間界での私の人間関係を支配することになる因果の糸となった。

その旅路で、私は一人ではなかった。私はまた、他の世界の王主たち、主たち、創世主と同様の誓いを立て、同じく下生の道を歩んでいる者たちにも出会った。智慧が多く封印されていたため、我々は互いを明確に認識することはできなかったかもしれないが、我々の元神は互いを感じ取ることができた。時にはただ視線が交わるだけ、言葉にできない親近感、同じ偉大な使命を共有する者たちの静かな共感であった。我々は、最終的な目的地で再会することを知っていた。

ついに、数え切れないほどの世界、数え切れないほどの天の層を通過した後、私の元神は宇宙で最も低い次元——三界——へと下り立った。そして、私は最後の扉、人間界への扉へと足を踏み入れた。これが、最も徹底的な封印が行われる時であった。王として残っていた全ての資質、天国についての全ての記憶、誓いについての記憶、その全てが固く閉じられた。私は完全に迷いの中の生命となり、他の全ての衆生と同様に、生老病死と苦しみの輪廻の法則に支配され、三界での様々な「役」を始めることになった。

私が語ったように、地球での私の最初の人生は、一億年前の先史時代の文明期であった。私は権力に満ちた将軍、アリオンとなり、名利の迷いの中で、当時伝えられていた大法に敵対するという、天をも驚かす大罪を犯してしまった。

それが、私の人間界における千の輪廻の始まりであった。

千の輪廻と今生の良縁

人間界で数え切れないほどの千の転生を経て、私は無数の衣をまとい、無数の役を演じてきた。私はかつて青い海の王子であり、長白山の頂の山の神であり、帝王たちの陰に隠れた軍師であり、遠い惑星の女性職人であり、そして現代世界の外交顧問でもあった。私が語り直した十二の人生は、果てしない映画の中のほんの数コマ、千里の道に付けられたほんの数歩の足跡に過ぎない。

栄華の中で生きながら、心が欲望と権力に迷い込んだ人生もあれば、極度の貧困の中で生きながら、善良さと忍耐を保ち続けた人生もあった。私は男であったことも、女であったことも、白人、黄色人種、黒人であったこと

もある。私は再会の喜びと別離の痛みを経験し、善意の甘さと裏切りの苦さを味わった。一つ一つの人生、一つ一つの役柄は、全てが一つの采配であり、私が衆生と縁を結び、心性を鍛え、そして何よりも、待つための機会であった。かつての誓いが果たされる時を、待つために。

そして、それらの全ての浮き沈みの後、この人生において、その誓いは成就された。

師父の采配に従い、私はアメリカで、父も母も法輪大法の修煉者である家庭に転生した。私は 2015 年に生まれ、今年（2025 年）でちょうど十歳になった。この采配は偶然ではない。天目をもって、私は我々を以前から結びつけていた深い因縁を見ることができる。この人生での私の母とは、私はかつて下生の旅路のある人生で出会い、縁を結んだ。そして父とは、わずか三つ前の人生で親しい兄弟であり、共に苦難を乗り越えた。まさにこれらの前世からの縁の糸が、我々を再び引き合わせ、この人生で共に大法を得るに至ったのである。

ごく幼い頃から、私は両親に法の講義を聞かせてもらい、彼らと共に功法を煉った。大法の純粋なエネルギーは私の体と心を洗い清め、無数の人生から私の智慧を固く封じていた封印を、徐々に打ち破っていった。私が五歳に

なった年、ある時座禅を組んでいると、私の天目が突如として、非常に鮮明に開かれた。前世の記憶、他の空間の光景が、まるで生き生きとした映画のように私の目の前に現れ始めた。

両親は、私が語る事柄にそれほど驚かなかった。彼らはただ、穏やかに、見えるものは自分自身が修煉をより信じるためのものであり、自慢したり、見せびらかしたりするためのものではない、と私に言い聞かせた。父は、他の空間を見る能力が修煉の次元の高低を表すものではなく、最も重要なことは、真・善・忍の原則に従って自分の心を真に修めることである、と言った。父の教えは、私に自分の責任を理解させ、見たものを用いて自分自身をさらに精進させるよう戒めるべきだと悟らせてくれた。

現在の慧見とメッセージ

天目をもって見ると、創世主が法を正す過程が最終段階に近づいており、時間は本当に残り少ないことが分かる。私が法輪大法を真に修煉し始めた時、定の中で輝かしい光景が現れた。私は遥か彼方の自分の天国を見た。そして、かつて私がその世界の中心に残した光の球が、多く

の浮き沈みを経て、消えかかっているかのように見えた時を経て、今や突如として、かつてないほど眩しく輝き始めたのだ！その光は、大法のエネルギーを運び、輝かしく、純粹で、私の天国全体を照らし、壊滅期の暗い雲を払い除けた。私の世界の衆生、無数の年月を待ち続けた者たちは、皆、歓喜し、歓声を上げた。彼らは、自分たちの王主が帰る道を見つけ、かつての誓いを果たしつつあることを知ったのだ。

私はまた、かつて私と共に誓いを立てた多くの王主たちが、今やこの世に存在していることにも気づいた。そのような者が十人以上おり、彼らは皆、現在、法輪大法の弟子として、世界中で静かに自らの使命を果たしている。彼らの大部分は中国におり、信仰を守り、衆生を救済度するために、非常に厳しい試練に直面している。

私はさらに驚くべきことを見た。神々の認識では、三界は元々、宇宙で最も低く、汚れた場所であった。さらに恐ろしいことに、それは「死への道」——下へしか進めない一方通行の道——であった。無数の劫を経て、自力で逆戻りできた生命は一つもなかった。一度ここに落ちれば、彼らは永遠に苦しみ of 輪廻の中で迷い、絶えず業を作り続ける。宇宙の古い法則によれば、個人の業力が

返済不可能なほどに蓄積されると、その生命は破壊され、最終的には形も神も全滅させられる。

しかし、この約三十年の間に、宇宙全体を震撼させる偉大な出来事が起こった。まさにこの「死への道」の場所で、創世主が公式に大法を公に広め、唯一の法の「船」――資格のある生命を帰還させることができる救済の道――を創造されたのだ。

まさにこの最も絶望的な場所で、未曾有の希望を見たために、非常に高い宇宙の層にいる無数の生命たちが、かつては考えもしなかったことをした。彼らは競い合い、人間界に下生することを切に願い求めた。なぜなら、人間になることができれば、自ら修煉に入り、自分自身だけでなく、自分が代表する無数の衆生をも救われる可能性があることを知っていたからである。

この下生の過程もまた、簡単ではない。通常、生命はその役をより高次元の神々によって定められる。特別な場合もあり、一部の神々は自ら直接人間として下生するが、一度この迷いの領域に入ると、彼らもまたすぐに封印され、全ての法力を失い、他の人々と同じように普通の人間となる。

この世の肉体は限られており、人間界で迷うリスクは非常に大きいので、別の選択肢があった。非常に多くの神々が、人間になる十分な因縁がなかったために、動物や植物として転生することを自ら願った。彼らは、動植物は修煉を許されないが、大法の無限の慈悲は万物を包み込み、彼らもまた、法の正される場において同化され、救われる機会があるであろうことを理解していた。それが、彼らが大法の弟子がいる場所の近くにさえいられれば、仏の光を浴びることができるのであれば、低い身分を受け入れた理由である。

これらのことを見るにつけ、私は、人間として生まれ、この法を正す時期に大法を修煉できるという機縁の貴重さと緊急性を、ますます強く感じる。

ですから、私はメッセージを送りたい。私の同修の皆さん、特に最も困難な状況にある方々へ。我々は真にさらに精進し、師父が求められる三つのことをしっかりと行い、この万古の機縁を逃してはなりません。ここに来る前に我々が立てた誓いを、思い出してください！

そして、まだ迷いの中にいる世の人々へ。私は皆さんが心で耳を傾け、早く目覚め、真実を認識し、何が善で何が悪かを区別できるようになることを願っています。自

分の中にある善良さを大切にし、法輪大法について学んでみてください。なぜなら、これこそが我々がこの最後の劫難を乗り越えるための、唯一の希望だからです。

今、私は全てを理解した。過ぎ去った全ての人生、先史時代の将軍から、青い海の王子、山の頂の禅師、そして現代の外交官まで…全ては采配であり、必要な一片であった。一つ一つの経験、一つ一つの教訓は、苦しいものであれ、栄光に満ちたものであれ、全ては私がかつての誓いを固く守り、大法を再び見出した時に自分の使命を果たすための、十分な智慧、意志力、そして心性を得るための準備であった。

全ての役は、ただ一つの役、一つの究極の目的のために準備された。それは、法を正す時期に法輪大法的弟子となり、自分自身を良く修煉し、そして私がかつて帰還を約束した世界の衆生が救われるのを助けることである。

(この時、リバーの語り口は、普通の十歳の少年の、澄み渡った、誠実なものに戻っていた。王の威厳に満ちた眼差しは消え、ただ純粹さと静寂だけが残っていた。)

これらの物語は…——少年は記録を取っている私をまっすぐに見つめ、そしてまた目の前の虚空を見つめた——

自慢したり、何かを証明したりするためのものではありません。それらはただの記憶、根源へと帰る非常に長い旅路の上の、足跡です。

今、私には分かります。一億年前のアリオンの悲劇は、単なる罰ではなく、宇宙の壮大なりハーサルにおける最初の教訓であり、今回、私が道を誤らないことを保証するためのものでした。

そして私は知っています。前途にはまだ道がありますが、今、私は最も正しい道、家に帰る道を見つけました。

私はただの十歳の少年、普通の法輪大法学習者です。しかし、私は王の誓いを胸に抱いており、その責任を果たすために、全力を尽くします。

(少年は穏やかな笑みで物語を終えた。その澄んだ瞳は前を見つめ、過去に煩わされることも、未来を憂うこともなく、ただ現在の不動の心と平安があるだけであった。テープレコーダーはまだ回っていたが、そこにはただ沈黙だけが残っていた。千の言葉よりも多くを語る沈黙が、千の人生にわたる旅路の幕を閉じた。)

* * *

結び

最後のテープが止まった。部屋は静まり返り、ただ壁掛け時計のかすかなカチカチという音と、暖かい黄色の陽光が木の床の上で踊る筋だけが残っていた。澄んだ瞳を持つ十歳の少年リバーは、いつの間にか黙って座り、宇宙全体の重みを肩に背負った後、普通の子供に戻っていた。彼の千の人生にわたる物語は、幕を閉じた。

二週間の間、私の仕事はただ耳を傾け、記録することだけであった。私はリバーと共に、輝かしい王朝、失われた文明を旅し、先史時代の将軍から、青い海の王子、火星の女性職人、そして現代の苦悩に満ちた外交官までを巡った。初めは、ただ奇妙な物語、断片的な記憶の欠片を記録しているだけだと思っていた。しかし今、全体を振り返ってみると、それらが個別の物語ではなく、非常に精巧に配置された、巨大な絵画の断片であったことに気づく。

リバーが一億年前のアリオンの最初の人生について語るのを聞いた時、私はそれが単なる個人的な悲劇だと思っ

ていた。しかし、最終章を聞いた時、私はふと、それが宇宙の最初の総稽古における、血と骨の教訓でもあったことに気づいた。結局のところ、偶然など何一つなかったのだ。遙か先史時代の將軍の過ちが、まさに今日の十歳の少年の不動の心の最初の礎石となり、この最後の、そして最も重要な舞台で、彼が道を誤らないことを保証していたのである。

私は、リバーが語った、非常に高い天の次元にいる神々、我々が想像もつかないほど輝かしい生命たちが、人間として転生することを切に願い、甚だしきは、ただ大法のエネルギー場の近くにいるためだけに、一本の草、一匹の動物になることを受け入れたという話を思い出す。ここまで聞いて、私の心には、かつて読んだ経典の中の古い一節が、ふと響き渡った。「人身は得難く、中土は生まれ難く、正法は聞き難く、明師は遭い難し」（人身を得ることは難しく、中国に生まれることは難しく、正法を得ることは難しく、明師に会うことは難しい）。

以前は、私はこの言葉を文字の表面上でしか理解していなかった。しかし、リバーの語りを通して、私は初めて一言一言の重みを真に感じ取ることができた。その「難しい」ことの一つ一つが、宇宙の無量の神々が切に願い

求めても得られない、偉大な機縁であったのだ。そのことは、私に、この時代に生きる我々が、自分が持っているものの貴重さを、本当に完全に理解しているのだろうか、と考えずにはいられなかった。

記録者としての私の役割は、ここで終わる。リバーの物語は記録されたが、この紀元における各生命の選択の物語は、まだ最後のページを書き続けている…。そして私は、我々一人一人が、正しい選択をすることを願っている。

神のご加護がありますように！

ケイシー・ヴェイル (Casey Vale)

THE LIVES MEDIA

* * *

著者および THE LIVES MEDIA プロジェクトについて

著者について

ケイシー・ヴェール（Casey Vale）は、独立作家、調査ジャーナリスト、そしてスピリチュアルなストーリーテラーです。彼女は真実、良心、そして人類の運命というテーマを追求しています。彼女の作品は、多くが実際のインタビューに基づいており、正直かつ感情豊かで、啓発的な内容で記録されています。

プロジェクトについて

本書は、THE LIVES MEDIA によって出版されたシリーズの一部です。THE LIVES MEDIA は、時代を超えた響きを保存し広めることを使命とする、グローバルなビジ

ョンを持った独立した出版イニシアチブです。日々のニュースを追いかけるのではなく、私たちは人間の意識の深くに触れることができる本を目指しています。

連絡先

- ✧ Website: www.thelivesmedia.com
- ✧ Email: editor@thelivesmedia.com
- ✧ QR Code:



同プロジェクトの他の作品

THE LIVES MEDIA による他の出版物もご覧いただけます：

－ 紅塵、金光 (Red Dust, Golden Light)

- 政界引退後：その遺産 (After Power: The Legacy)
 - 科学の黄昏と黎明 (Sunset and Sunrise of Science)
 - 紅の帳 (The Red Veil)
 - 時の以前の響き (Echoes Before Time)
 - 俗世間へ (Entering The World)
 - 最後の鐘 (The Last Bells)
 - 我々以前 (Before Us)
 - 千の人生 (Thousand Lives) → 本書
-

**この度はお手に取っていただき、誠にありがとうございます。
真実を探求するあなたの旅路に、神と仏の祝福が
あらんことを。**

